

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第53集

円正坊遺跡群

E N S O N O B O

円正坊遺跡 II

長野県佐久市岩村田円正坊遺跡II発掘調査報告書

1997, 3

中部電力株式会社
佐久市教育委員会



(H 3 号住居址出土遺物)
弥生時代中頃(約2000年前)につくられた「壺」



円正坊遺跡IIの調査について

今回、発掘調査が行われた岩村田の『円正坊遺跡II』からは狭い範囲にもかかわらず弥生時代中頃から平安時代に至るそれぞれの「竪穴住居址」と呼ばれる家の跡が発見されました。家の中からは当時使われていた食器として、現在の鍋にあたる「甕」、穀物などの貯蔵を目的とする「壺」などが見つかっています。

このように世代を越えて同じ場所が居住地として選ばれたのは、周辺に良好な水田が確保でき、また高台のため自然災害などが少なかったことが影響しているものと考えられます。今後、この周辺は北陸新幹線駅により大きく姿を変えますが、

永く後世に伝えていきたい地域史の1ページが調査によって解りました。



(上の写真)

弥生時代中頃の住居から発見された壺
家の入口近くに置かれていた。

(左の写真)

弥生時代中頃に使われた甕
表面は色々な文様が描かれ、縁には
縄文土器のように縄目の模様がある。



(発掘調査風景) 調査区B区H 3号住居址の掘り下げ作業を行う。



(H 4号住居址出土遺物)

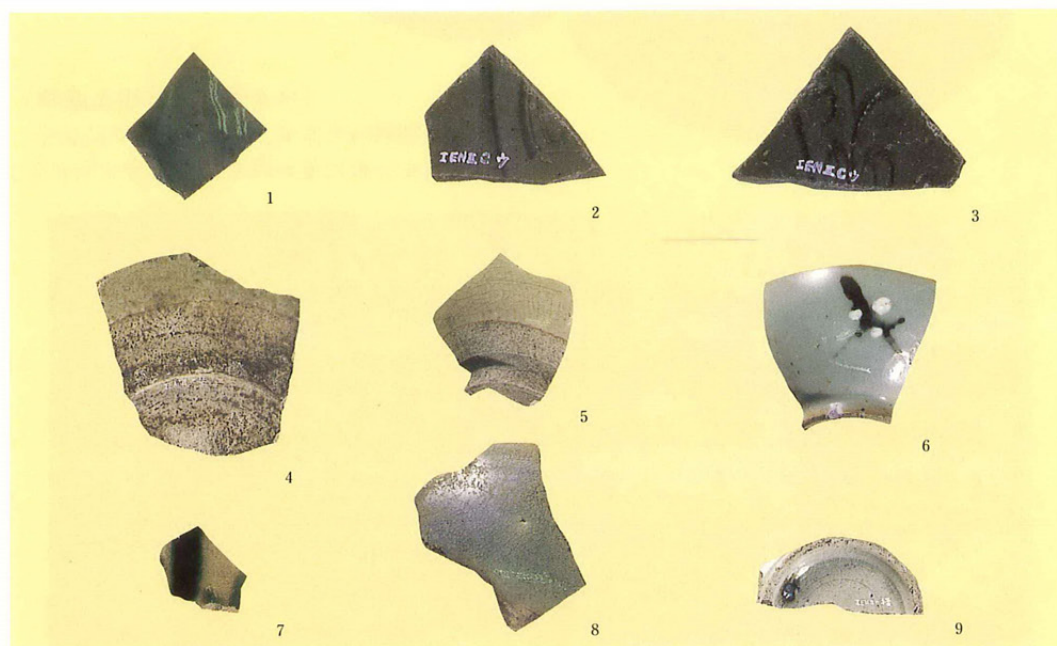
古墳時代後期初頭の土器で、日常生活具ではなく、祭り等の特別な行事に使われていたと考えられる。



(発掘調査風景) 遺跡の北側を走るJR小海線、向かって左が小諸方面。



(H 4号住居址出土遺物)



(遺構外出土遺物) 陶磁器類

例 言

1. 本書は、中部電力株式会社が行う佐久市岩村田に所在する送電線鉄塔付け替え工事に伴う、埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 調査委託者 中部電力株式会社
3. 調査受託者 佐久市教育委員会
4. 遺 跡 名 円正坊遺跡群 円正坊遺跡II (I E N II)
5. 調 査 地 籍 佐久市大字岩村田字円正坊1292-1, 1293-1, 1299-1
6. 調 査 期 間 発掘調査 平成8年5月20日～平成8年7月17日
整理調査 平成8年8月8日～平成9年3月31日
7. 調 査 面 積 375m²
8. 本書の編集、執筆は富沢が行い、報告書作成にあたっては以下の分担によって行った。

遺物洗浄	堀籠 因	市川チイ子	工藤しず子	武田千里	武田まつ子
	堀込成子	大井みつる	菊池喜重	高瀬武男	
遺物復元	遠藤しづか	橋詰けさよ	岩下吉代	岩下とも子	岩下文子
遺物実測	堺 益子	橋詰勝子	橋詰信子	齋藤真理	
版下作成	橋詰信子	三石和子			
9. 石器石材鑑定は羽毛田卓也、陶磁器類は森泉かよ子の各氏にご教示を頂いた。
10. 本書及び円正坊遺跡II出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。遺跡調査並びに報告書作成にあたっては、以下の方々のご協力・ご指導を頂いた記して感謝の意を表します。(敬称は略させて頂きました。)

堤 金治	小山岳夫	堤 隆	中沢義一郎	渡辺 眞
------	------	-----	-------	------

凡 例

1. 遺構の略記号は、住居址(H)・掘立柱建物址(F)・土坑(D)・古墳址(OT)・Pit(P)である。
2. 挿図の縮尺は次のとおりである。他の物については挿図中にスケールを示した。
住居址・掘立柱建物址1/80、土坑・カマド1/60、土器1/4、石器1/2・1/3・1/4、鉄製品1/3
3. 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。
4. 土層、遺物胎土の色調は、1988年度版『新版 標準土色帳』に基づいた。
5. 遺物挿図番号と写真番号及び観察表は番号は一致する。遺物写真のスケールは任意である。
6. 遺構は報告書作成時に新番号を付した(旧H2→1、旧3→2、旧5→3、旧1→5、旧8→7、旧7→8)。
7. 調査区グリッドは公共座標に従い、間隔は4×4mに設定した。
8. 弥生土器施文の語句表現は『北西の久保』1987を参考とした。

目次

巻頭カラー

例言・凡例

第 I 章 発掘調査の経緯と経過	1
第 1 節 発掘調査の経緯と経過	1
第 2 節 調査の体制	2
第 3 節 調査日誌	2
第 II 章 遺跡の環境	3
第 1 節 自然的環境	3
第 2 節 歴史的環境	4
第 III 章 遺跡の基本層序と概要	7
第 1 節 基本層序	7
第 2 節 検出遺構・遺物の概要	7
第 IV 章 遺構と遺物	10
第 1 節 竪穴住居址	10
(1) H 1 号住居址	10
(2) H 2 号住居址	12
(3) H 3 号住居址	15
(4) H 4 号住居址	20
(5) H 5 号住居址	24
(6) H 6 号住居址	25
(7) H 7 号住居址	26
(8) H 8 号住居址	31
第 2 節 掘立柱建物址	31
(1) F 1 号掘立柱建物址	31
第 3 節 古墳址	32
(1) OT 1 号墳	32
第 4 節 土坑	34
(1) D 1 号土坑	34
(2) D 2 号土坑	35
(3) D 3 号土坑	35
(4) D 4 号土坑	35
(5) D 5 号土坑	35
(6) D 6 号土坑	35
(7) D 7 号土坑	35
(8) D 8 号土坑	35
第 5 節 Pit	37
第 6 節 遺構外遺物	38
第 V 章 調査のまとめ	46
出土土器観察表	48
写真図版	

第 I 章 発掘調査の経緯と経過

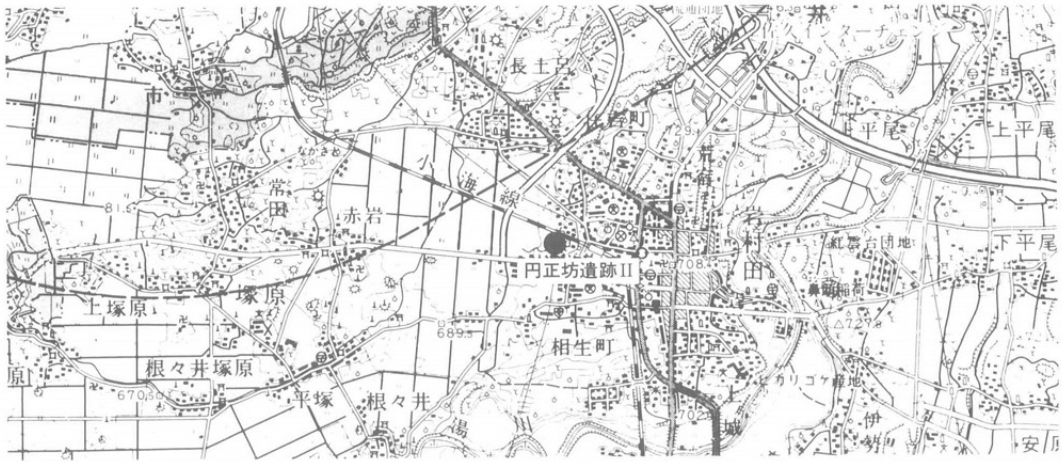
第 1 節 発掘調査の経緯と経過



調査区より蓼科山麓を望む

円正坊遺跡Ⅱが含まれる円正坊遺跡群は佐久市大字岩村田に所在し、浅間山の火砕流により形成された台地が低湿地と接する部分に位置する。遺跡周辺は、近年にいたり北陸新幹線「佐久平駅」建設に伴い大規模な区画整理事業が進みつつあり、日々その姿を変貌している。

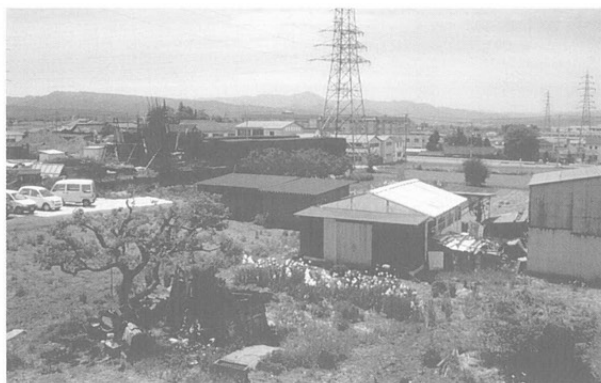
今回、中部電力株式会社の送電線鉄塔建て替えが計画され、佐久市教育委員会に遺跡有無の照会があった。教育委員会では円正坊遺跡群が存在する為、まず試掘調査を行う事とした。その結果、既存鉄塔部分においては鉄塔建設時の削平が深く遺構の存在は確認できなかったものの、仮設鉄塔部分と工事進入路部分において遺構の存在が確認された。よって、中部電力株式会社と佐久市教育委員会において保護協議をおこなったが、鉄塔の設計変更は難しく当教育委員会埋蔵文化財課において記録保存を目的とする本調査が実施されるはこびとなった。



第 1 図 円正坊遺跡Ⅱ遺跡位置図(1：50,000)

第2節 調査体制

佐久市教育委員会 埋蔵文化財課
教育長 依田 英夫
教育次長 市川 源
埋蔵文化財課長 北沢 元平
管理係長 棚沢 慶子
管理係 田村 和広
埋蔵文化財係長 大塚 達夫
埋蔵文化財係 林 幸彦 三石 宗一 須藤 隆司 小林 眞寿
羽毛田卓也 富沢 一明 上原 学



調査区より野辺山方面を望む

第3節 調査日誌

平成8年度

平成8年

- 4月22日 試掘調査を行う。
5月20日 調査開始 重機により表土はぎ。
5月23日 調査区A・B区遺構検出作業。
6月10日 調査区A区においてOT1号墳を検出する。
6月24日 調査区A区の調査終了。
7月3日 調査区C区の表土はぎを行う。
7月4日 遺構検出作業を行い、住居址1軒を確認する。
8月8日 整理作業開始
土器の洗浄、土ふるいなどを行う。
10月17日 図面整理、土器実測開始。

平成9年

- 1月10日 出土遺物写真撮影・図版作成。
3月31日 報告書を刊行する。

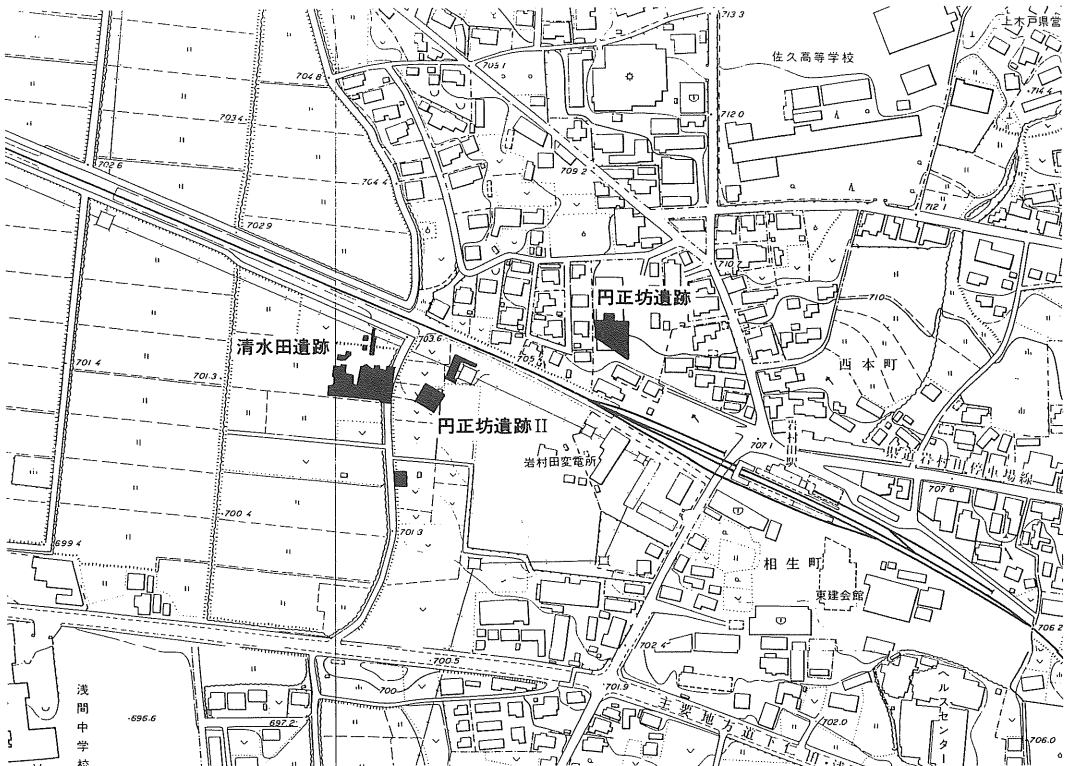


第II章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

円正坊遺跡IIが所在する佐久市岩村田地籍は佐久市のやや北方寄りに位置し、北西より南流する湯川によって逆「L」字状に囲まれた地域である。地籍全体は浅間山の第一軽石流・第二軽石流によって覆われた台地で、東側は湯川によって河岸段丘化し、また西側は濁川などの中小河川によって「田切り地形」が発達している。

円正坊遺跡IIは、この田切り地形による台地の末端に位置する。遺跡西側には田切りの谷より押し出された堆積土によって形成された低湿地が広がる。昭和40年代後半までこの低湿地には、火山噴火による泥流により形成された残丘が島状に存在したが、現在では大規模な圃場整備の行われた水田風景が広がり、かつての面影をとどめていない。遺跡と水田との標高差は2mを測る。遺跡群の北側にはJ R小海線が通過しており、北側に広がる枇杷坂遺跡群との境界をなしているが、本来は同一の遺跡群として捉えられるものである。遺跡周辺には、すぐ西隣に清水田遺跡と北側に円正坊遺跡がそれぞれ存在する。



第2図 円正坊遺跡II周辺地形図(1:5,000)

第2節 歴史的環境

本遺跡が所在する岩村田及びその周辺の長土呂・塚原には、田切りの台地上または低湿地や残丘上に数多くの遺跡が所在する。これらの遺跡を時代別に概観したい。

まず、先土器時代及び縄文時代の遺跡は、今日までに確認されていない。これは浅間山の第一火砕流・第二火砕流の年代がC14年代測定で10,650～11,300年前(第二火砕流)と判明しており、これら年代に近似する当時代は、遺跡周辺部において生活域として不向きだったことが予想される。しかし、北方約2kmに所在する聖原遺跡・下聖端遺跡・上久保田向遺跡では縄文時代とされる落とし穴遺構が見つかっており、狩猟・採集などの活動は行われていた様である。

次に弥生時代の遺跡としては中期・後期に入り、低湿地を取り囲むように大規模な集落が形成され始める。中期の集落としては佐久平をも代表する北西ノ久保遺跡が湯川の段丘上にある。当遺跡からは弥生中期後半の竪穴住居址92軒が調査され、一時期の集落構成は40軒程度で、住居址の規模・配置から血縁的つながりをもった四つのグループがあったことが考察されている。また弥生後期前半と考えられる木棺墓8基・四隅が切れるタイプの方形周溝墓1基が検出されている。この木棺墓は、形態より群馬県有馬遺跡の礫床墓などの土坑両端に棺を設置したと考えられる掘り込みなどは共通するものの、北西ノ久保遺跡の場合、礫は覆土中により検出され、どちらかというとも墓を覆った様に検出されているのが特徴である。後期の集落としては周防畑B遺跡があげられる。当遺跡は濁り川の西、低湿地に続く微行地上にあり、集落全体の調査ではないが後期前半の住居址32軒、円形周溝墓2基、多数の土墳墓が調査されている。当地域は、このように弥生時代中・後期の集落密集地帯であるが、近年国道141号線バイパス建設に伴い西一本柳遺跡が調査され当該期の大規模な集落が検出され新たな展開を見せている。

古墳時代になると、前期や中期の松ノ木遺跡・清水田遺跡の様に前代までのような大規模な集落は姿を消し、5～6軒程度の集落しか検出されなくなる。これは当遺跡周辺に限ったことではなく、理由づけはなされていないが佐久平一円に現れる現象である。集落規模が増大するのは後期にはいつてからであり、上聖端・下聖端・聖原遺跡などで集落が検出されている。しかし、立地は低湿地を望む微高地上ではなく、田切りが深くなる台地内部にこれら遺跡は立地し、弥生時代の遺跡立地とは異なる様相を示す。或いは、畑作・牧経営といった水稻耕作に比重をおかない生産・生活活動がこの頃より導入されたとも推定できる。古墳址は北西ノ久保遺跡より中期～終末期までの方墳・円墳19基が検出されている。そのうち径24mの円墳からは、多量の円筒埴輪・朝顔形埴輪・人物埴輪・動物埴輪(馬, 鶏)・家形埴輪・器材埴輪(盾, 太刀, 靴)などが出土している。その形態の共通性より群馬方面の影響下に成立したとされており、所産時期は6世紀後半と推定されている。



第3図 周辺遺跡位置図(1) (1:10,000)

次に、奈良・平安時代では、前代から同じ場所で引き次がれる集落址が多い。特に長土呂遺跡群聖原遺跡は、大規模な佐久流通業務団地建設に伴い面積約97,000㎡が調査され、古墳時代後期から平安時代末までの竪穴住居址970軒以上・掘立柱建物址860棟以上などが検出され、遺物も円面硯・石印「伯万私印」・瓦塔・八稜鏡・帯金具などが出土している。また、濁り川を挟んで対岸の台地上には海獣葡萄鏡や銀鋌の馬具などが出土した芝宮遺跡群が、またその西には「川原寺式」の要素を持つ7世紀末と考えられる軒丸瓦が出土した周防畑遺跡群などがある。このように、当遺跡周辺は古代律令期に入り古代佐久郡の中心的な場所として位置付けられ、或いは郡衙・郡寺などの発見の期待がかかる地域である。生産址遺跡としては、濁り川西の低湿地で平安時代に比定される水田址が濁り遺跡で発見されている。

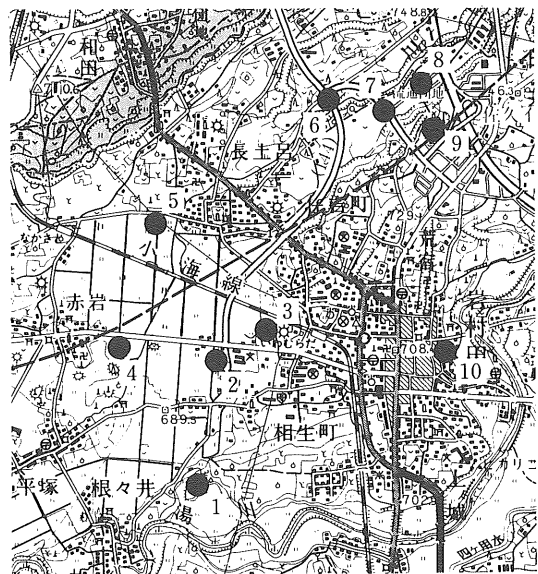
中世以降としては、北西ノ久保遺跡に隣接して鎌倉中期から後期の五輪塔などから成る石造塔婆群が存在する。館跡としては長土呂地籍に方形の地籍割を持ち、近代まで土塁・濠が一部残存した長土呂館跡があるが、成立時期など詳細は不明である。また、中世に活躍した大井氏の本拠地として推定される城館跡が岩村田市街東端の湯川段丘上に石並城・王城・黒岩城としてある。

このうち黒岩城は昭和58年に一部発掘調査が行われ、15～16世紀と推定される掘立柱建物址や竪穴状遺構が発見された。出土遺物としては、石臼・金属製品・国産陶磁器・舶載青白磁器・鉄滓などが出土した。しかし、これらの遺構は城の主要部分の建物ではなく、周辺の城に付随した工房であった可能性が指摘されている。

円正坊遺跡東方の岩村田の町は中世より大井氏の城下町として栄えていたが文明十六年(1484)村上氏によって焼き討ちにあい灰燼に帰したことが文献史料「四隣譚藪」に記されている。よって、現市街地の地下には中世町並みが兵火に遭遇したとは言え良好な状態で埋没している可能性がある。

近世にはいると、江戸幕府により整備された「中山道」が岩村田市街地を通過し、宿場町が形成された。当時の建物はほとんど残されていないが、現在でも地割りにその面影を残している部分もある。

以上、周辺の遺跡について調査されたものを中心に時代を追って概観してみた。



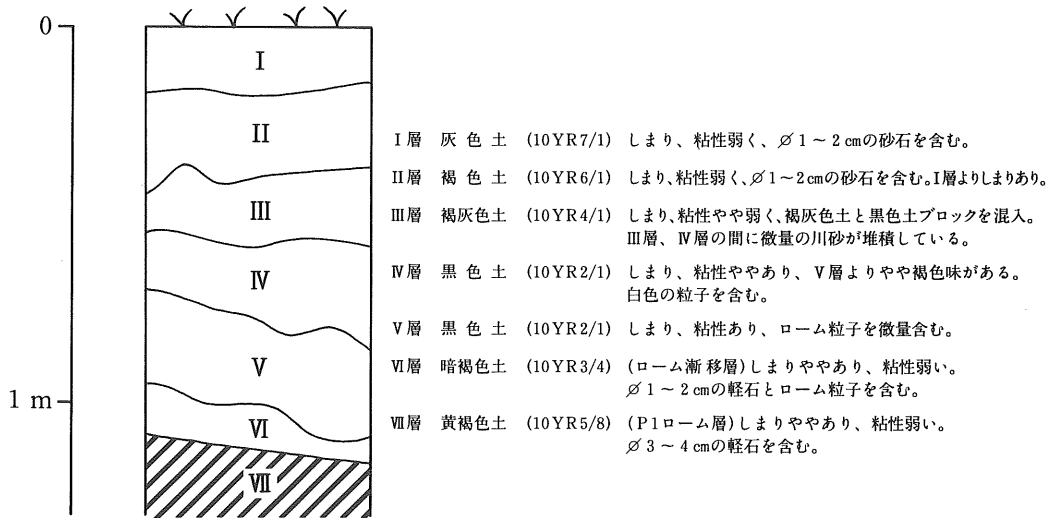
- | | |
|-----------|-----------|
| 1 北西ノ久保遺跡 | 6 下芝宮遺跡 |
| 2 松ノ木遺跡 | 7 上聖端遺跡 |
| 3 清水田遺跡 | 8 聖原遺跡 |
| 4 濁り遺跡 | 9 上久保田向遺跡 |
| 5 周防畑B遺跡 | 10 黒岩城 |

第4図 周辺遺跡位置図(2)

第Ⅲ章 遺跡の基本層序と概要

第1節 基本層序

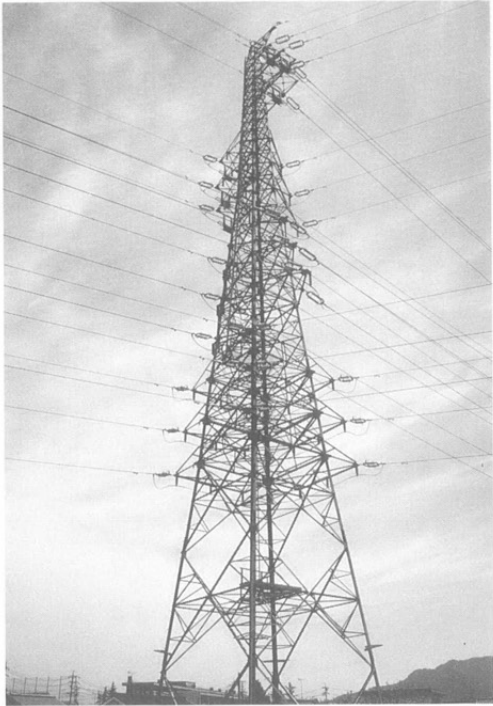
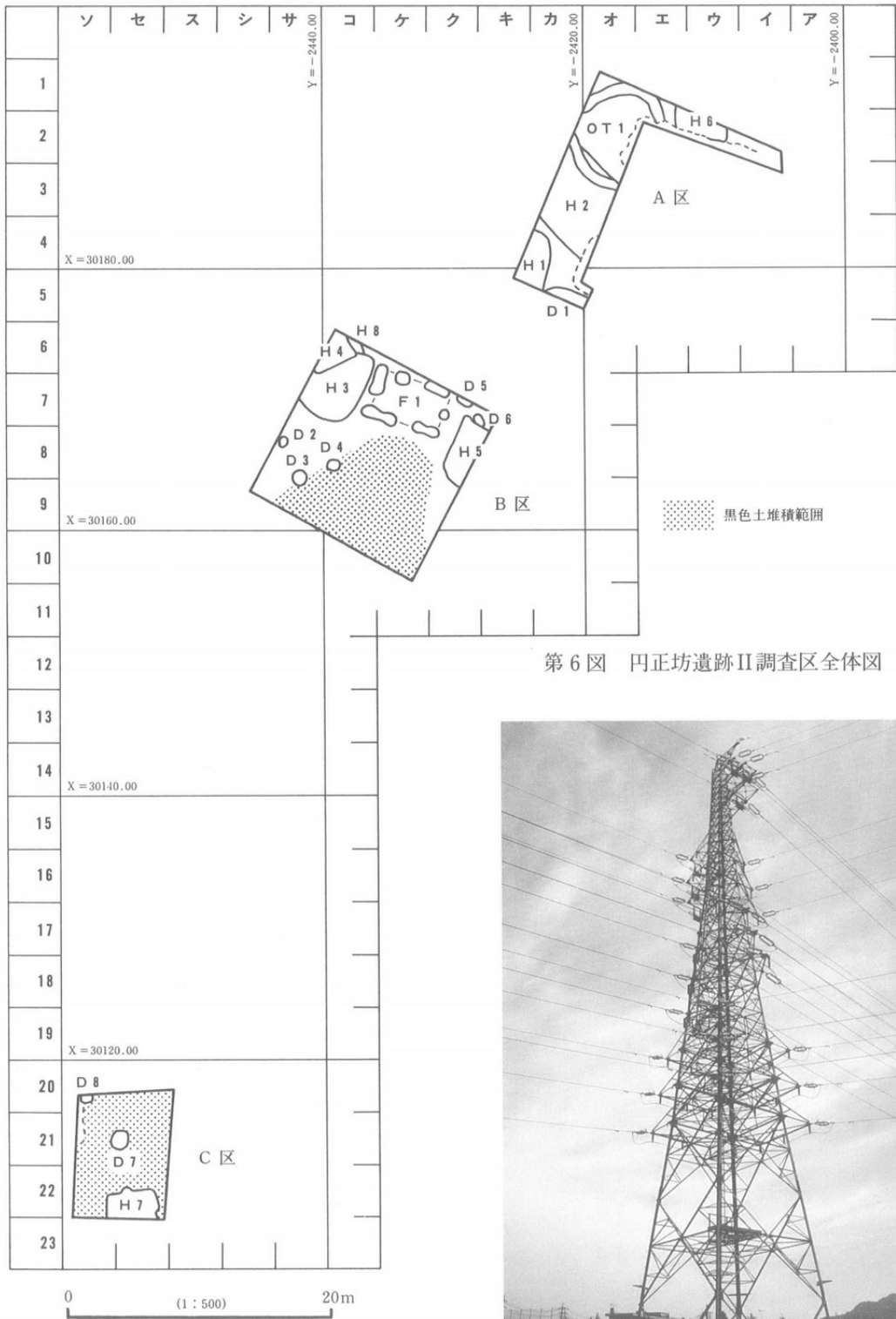
本遺跡の基本層序は調査地点により異なるが、基本的に7層に分かれる。下に示した図はC区のものである。第Ⅰ・Ⅱ層は耕作土であり、第Ⅲ層と第Ⅳ層間には微量の流水によると考えられる川砂の堆積が確認された。古墳・奈良・平安時代の各期の遺構は第Ⅳ層上面が確認面である。第Ⅳ層と第Ⅴ層中は弥生時代の土器片が含まれた包含層を形成していた。調査区A区は第Ⅱ層下が第Ⅵ層となり各期の遺構確認面は同一であった。

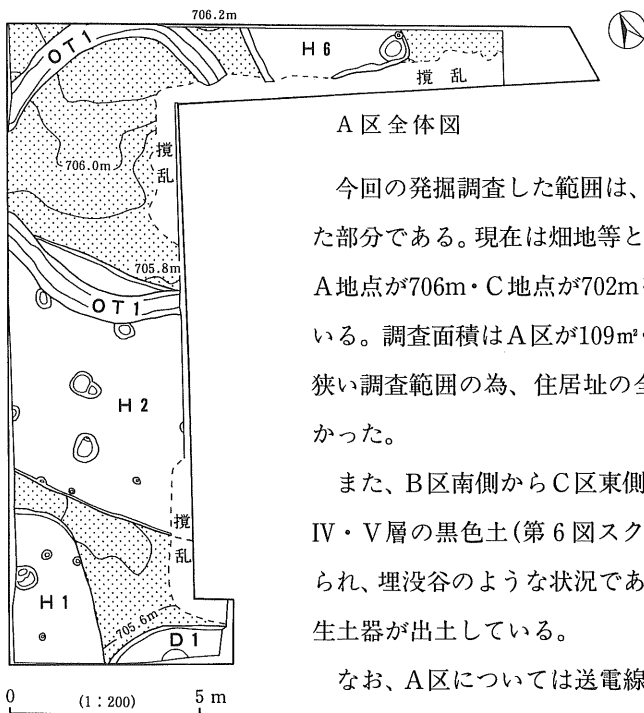


第5図 基本層序模式図

第2節 検出遺構・遺物の概要

検出遺構	竪穴住居址	8軒	弥生時代中期後半	2軒 (H1, H3)
			後期後半	1軒 (H2)
			古墳時代後期初頭	2軒 (H4, H5)
			平安時代	2軒 (H6, H7)
			時代不明	1軒 (H8)
	掘立柱建物址	1棟	平安時代	(F1)
	古墳址	1基	古墳時代後期	(OT1)
	土坑	8基		
出土遺物	弥生土器, 土師器, 須恵器, 陶磁器, 鉄製品(紡錘車), 石器,			



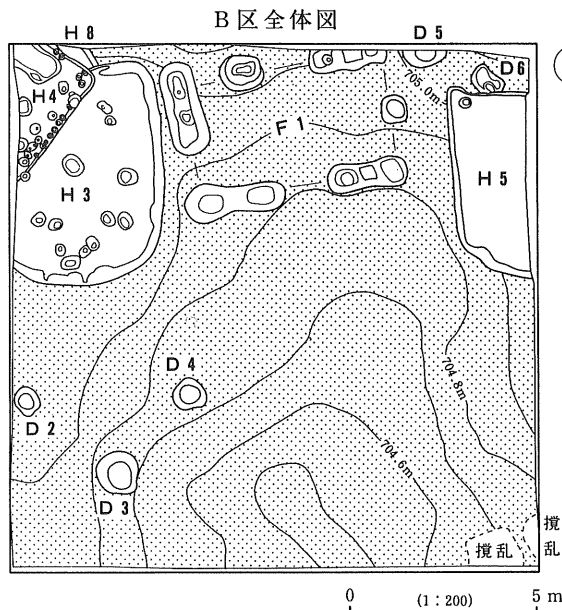


A区全体図

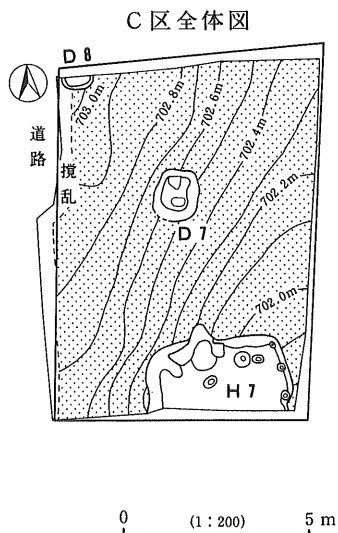
今回の発掘調査した範囲は、南北95m・東西68m範囲に囲まれた部分である。現在は畑地等として利用され、調査地点の標高はA地点が706m・C地点が702mを測り、緩やかな南傾斜を呈している。調査面積はA区が109m²・B区が196m²・C区が70m²であり、狭い調査範囲の為、住居址の全体を調査できたものは1軒もなかった。

また、B区南側からC区東側にかけては、基本層序に示した第IV・V層の黒色土(第6図スクリーン部分)の堆積が認められ、埋没谷のような状況であった。この黒色土からは多量の弥生土器が出土している。

なお、A区については送電線鉄塔が倒壊の危険性がある為、土圧維持の関係で三分割による調査が行われた。よってH2号住居址は南北半分ごとの発掘調査となった。



B区全体図



C区全体図

第7図 地点別調査区全体図

第IV章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

(1) H1号住居址(第8・9図、写真図版三)

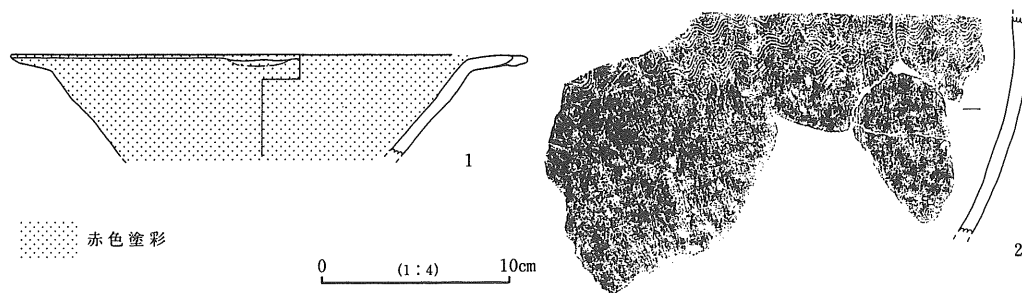
本住居址は調査区A区の南西側コーナー部より検出され、カ-4・5、キ-4・5Grに位置する。残存状況は、南側と西側がそれぞれ調査区域外となる為、住居址全体のうち北東コーナー部だけの検出にとどまったが、形態は隅丸方形の住居址と考えられる。

規模は、検出部分で東壁3.76m、北壁1.40mを測る。壁高は東壁で約0.40mを測る。住居址床面積は7.2㎡を測る。床は全体に堅く踏みしまっており、貼床は0.10mほどの厚さで施されていた。Pitは4カ所確認され、P1は北東側の支柱穴と考えられる。P1の規模は径0.62m、深さは床面より0.30mを測る。壁溝などは確認されなかった。

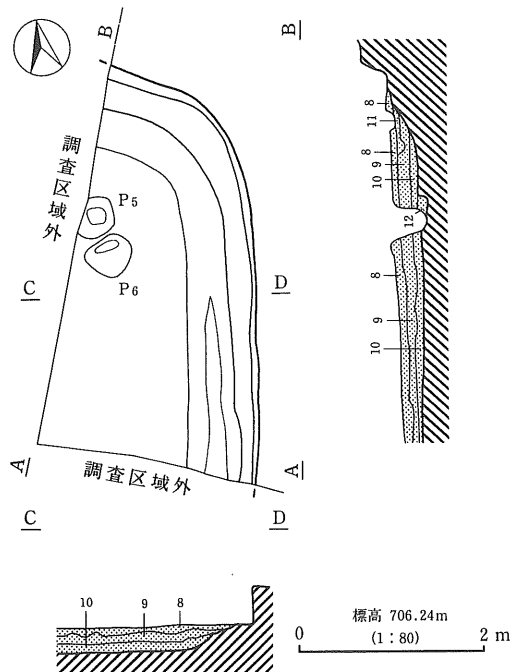
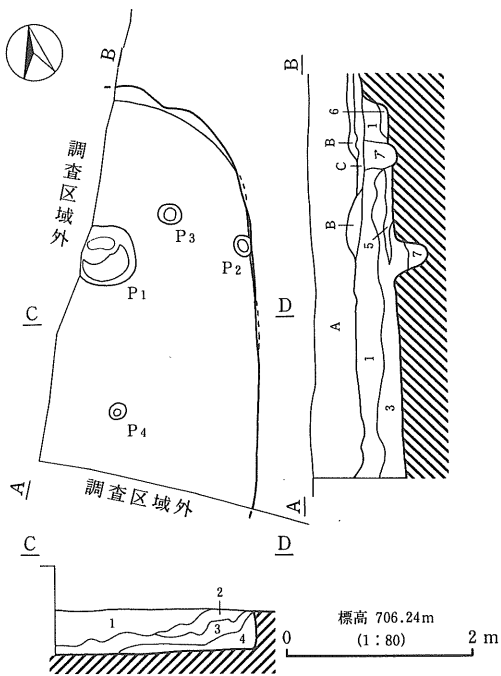
また、本址は掘り方検出時に床面(8層)下に新たな床面(10層)が確認された。新たな床面も非常に堅く踏みしまっており、厚さは9・10層で0.20mを測る。しかし、床面範囲は上部の床面ほど広がらず、壁の0.30m手前で緩やかに立ち上がる。立ち上がりの高さは0.22mを測る。床面積は4.2㎡を測る。Pitは2カ所確認された。規模は径0.40m、深さ0.39mを測る。以上のような形態・規模より新たに検出された床面は、H1号住居址の拡張前の貼床と考えられる。

本址よりの出土遺物は図示したもの他に弥生土器壺片などがある。遺物は覆土中層よりの出土が多かったが何れも小片で、床面からの出土は非常に少量であった。

1は高坏の坏部破片である。形態は坏部が逆「ハ」の字状に大きく開き、口縁部で外反し鏝状に張り出す。口唇部には三角形の突起が貼付されている。調整は内外面とも丁寧なミガキが、また全面に赤色塗彩が施されている。2は甕の胴部下半の破片である。施文は胴部中位まで右回りと考えられる櫛描波状文が8本一組で施されている。調整は胴部下方向から丁寧なミガキが行われており、このミガキにより一部分の櫛描波状文が消されている。



第8図 H1号住居址出土遺物実測図



- A層 褐灰色土 (10YR6/1)
しまり、粘性弱い。 ϕ 2~3cmの小石を含む。
- B層 にご黄褐色土 (10YR7/2)
しまり、粘性弱い。火山灰(下層)をブロック状に含む。
- C層 褐灰色土 (10YR4/1)
しまり、粘性弱い。 ϕ 1cmのパミスを含む。
- ア層 黒褐色土 (10YR3/1)
しまり、粘性弱い。暗褐色土ブロックを含む。
 ϕ 2~3mmのパミスを多量含む。
- 1層 黒褐色土 (10YR3/1)
しまり、粘性弱い。 ϕ 1~2mmのパミスを含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)
しまり、粘性弱い。黒色土ブロック・ ϕ 2~3cmのパミスを含む。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/4)
しまりあり、粘性弱い。 ϕ 2~3cmのパミスをやや多く含む。
- 4層 にご黄褐色土 (10YR4/3)
しまりややあり、粘性弱い。 ϕ 1~2mmのパミスを多量含む。

- 5層 褐色土 (10YR4/4)
しまり、粘性弱い。 ϕ 2~3cmの軽石を含む。やや明るい土。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)
しまり、粘性あり。ロームブロック・ ϕ 2~3cmの軽石を含む。
- 7層 黄褐色土 (10YR5/6)
しまり、粘性やや弱い。オレンジの地山を多量に含む。
- 8層 黄褐色土 (10YR5/8)
しまり、粘性あり。上面硬質で踏み固まっている。(貼床)
- 9層 黒褐色土 (10YR3/1)
しまり、粘性あり。黒色土とローム粒子を含む。
- 10層 黄褐色土 (10YR5/6)
しまり、粘性あり。上面よく固まっている。黒色土とローム土の混合土。
- 11層 黄褐色土 (10YR5/8)
しまりあり。黒色土ブロックを少量含む。
- 12層 黄褐色土 (10YR5/6)
しまり強く、粘性弱い。下層に黒色土を含む。

第9図 H1号住居址実測図

(2) H2号住居址(第10・11・12図,写真図版四)

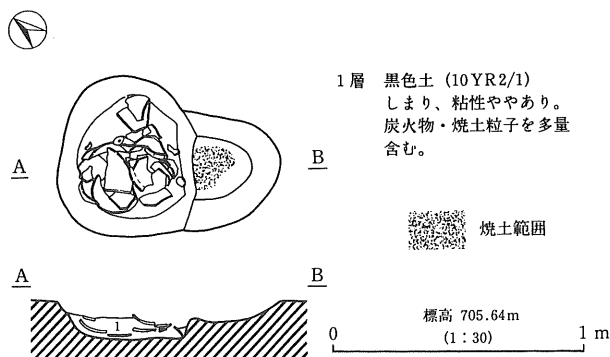
本住居址は調査区A区の中央より検出され、オ-2・3・4、カ-2・3・4Grに位置する。本址はOT1号墳と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状況は東側と西側がそれぞれ調査区域外となり、北側がOT1号墳に削平されている為に住居址全体の中央部分だけの検出にとどまったが、形態は東西に長軸をもつ隅丸方形の住居址と考えられる。

規模は、検出部分で北壁4.00m、南壁4.46mを測り、推定での規模は長軸壁約8.00m、短軸壁約6.00mを測ると考えられる。壁高は北壁で約0.23mを測る。住居址床面積は検出部で24.4㎡、推定面積は40.8㎡を測る。住居址の主軸方位はN-45°-Wを示す。床は全体に堅く踏みしまっており、貼床は0.14mほどの厚さで施されていた。Pitは7カ所確認され、P1からP4は主柱穴と考えられるが、柱痕などは確認されなかった。P1からP4の配置から本住居址は6本の主柱穴を持つと推定できる。規模はP1が径0.50m・深さ0.17m、P2が径0.60m・深さ0.17m、P4が径0.80m・深さ0.12mを測る。壁溝は北壁で確認され、幅0.13m・深さ0.10mを測る。

また、本址中央より炉跡が確認された。形態はほぼ円形の土坑が二つ連結したような状態で、規模は長軸長1.76m・短軸長1.28m、深さ0.30mを測る。火床面は浅い方の掘り込み部より顕著に確認された。深い方の掘り込み部は第12図に示したすべての土器が乱雑な状態で出土し、いわゆる「埋壘炉」として機能していたかどうかは疑わしい状態であった。

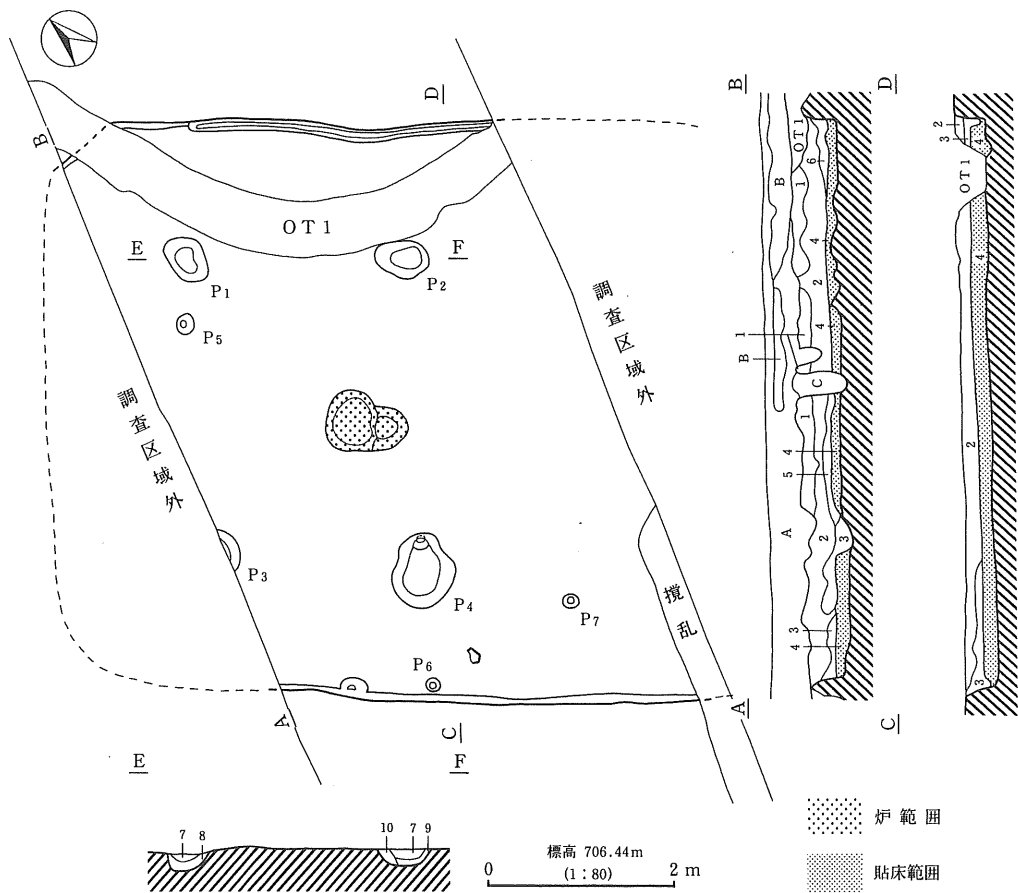
本址からの出土遺物は前述したように炉址からのものがほとんどであり、覆土や床面からは弥生土器甕の小片が少量出土したにとどまった。

1は壺の口縁部から頸部の破片である。炉からの出土のため二次焼成を受けている。形態は口縁部が外側に強く外反し、口縁部先端で受け口状に立ち上がる。施文は受け口部外面に2条の篋描連続山形文がある。調整は丁寧なミガキを施す。2は壺の頸部から胴部である。形態は胴部下半に最大径を有し、細い頸部から大きく口縁部が外反すると思われる。施文は頸部に2条の平行線文によって区切られた空間に、4条の篋描連続山形文を施し、文様帯内にLR縄文を充填して



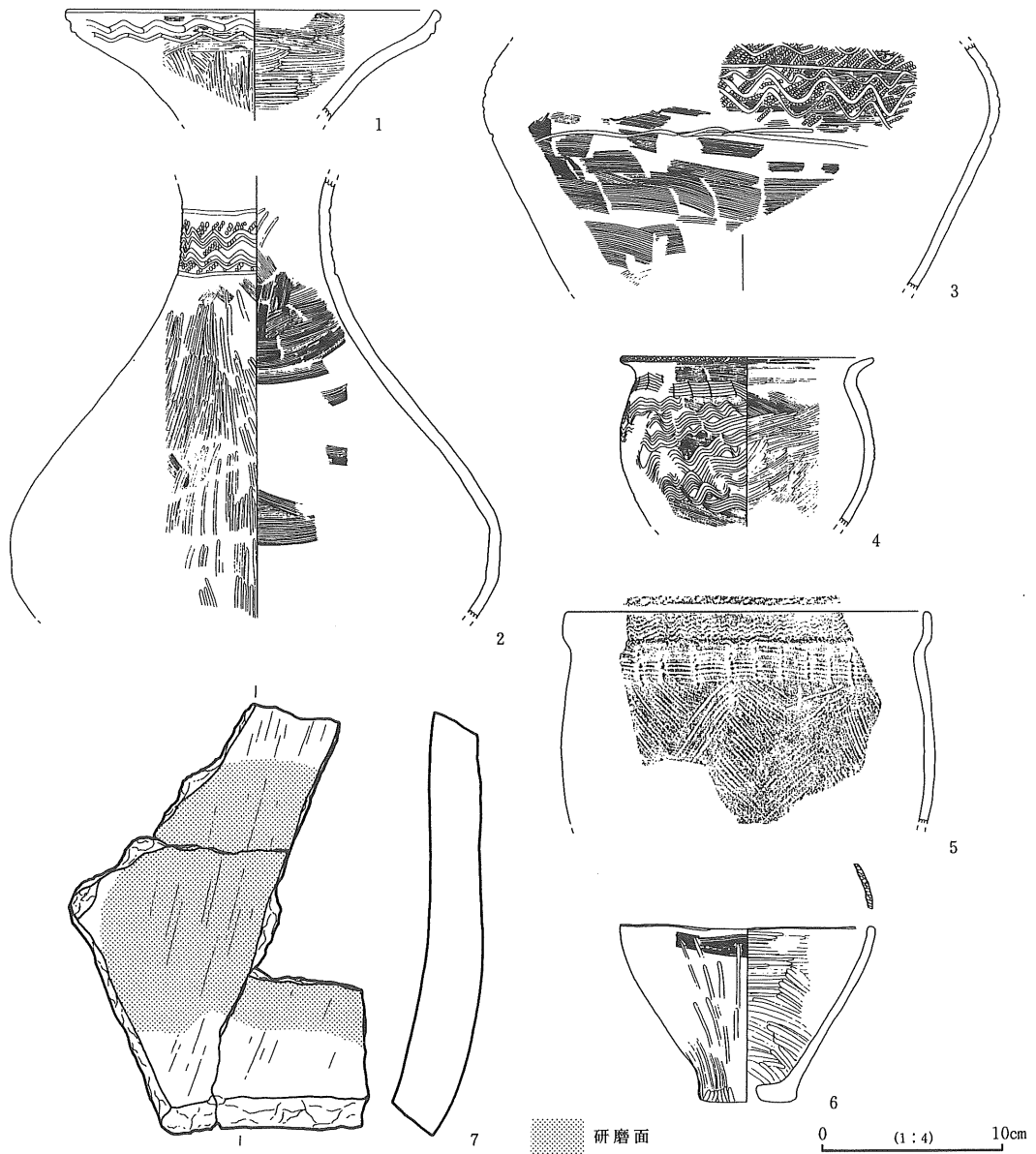
第10図 H2号住居址炉実測図

いる。調整は外面ミガキ、内面ナデが施されている。3は壺胴部の破片で、施文は残存部で2条の平行線文によって区切られた空間に大ききの異なる3条の篋描連続山形文を施し、文様帯内にLR縄文を施す。4と5は甕破片で、4の施文は口唇部にLR縄文、頸部に6本一組の櫛描波状文、胴部に5本一組の不規則な櫛描波状文がそれぞれ施してある。調



- A層 褐灰色土 (10YR6/1) しまり、粘性弱い。小石・ローム粒子を含む。耕作土。(近世)
- B層 浅黄橙色土 (10YR8/4) しまり、粘性弱い。鉄塔の工事盛土。
- C層 黒色土 (10YR2/1) しまり弱く、粘性あり。ローム粒子をほとんど含まない。
- 1層 褐色土 (10YR4/6) しまり、粘性弱い。 ϕ 2~3cmの軽石・ローム粒子を含む。褐色土のブロックを含む。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性弱い。ローム粒子・パミスを多量含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1) しまりあり、粘性弱い。 ϕ 2~3cmのパミスを多量含む。
- 4層 明黄褐色土 (10YR6/8) しまりあり、粘性弱い。 ϕ 2~3cmのパミスを多量含む。上面より硬質。下層に黒色土が入る部分あり。(貼床)
- 5層 褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性ややあり。 ϕ 1cm弱の軽石を含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2) しまり、粘性あり。焼土のかたまりと炭化物を含む。 ϕ 2~3cmの軽石を含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性やや弱い。ローム粒子を含む。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2) しまり、粘性ややあり。 ϕ 2~3cmの軽石を含む。
- 9層 黒色土 (10YR2/1) しまり、粘性ややあり。ローム粒子を含む。
- 10層 黒色土 (10YR2/1) しまり、粘性やや弱い。 ϕ 2~3cmの軽石を含み、9層よりやや明るい。

第11図 H2号住居址実測図

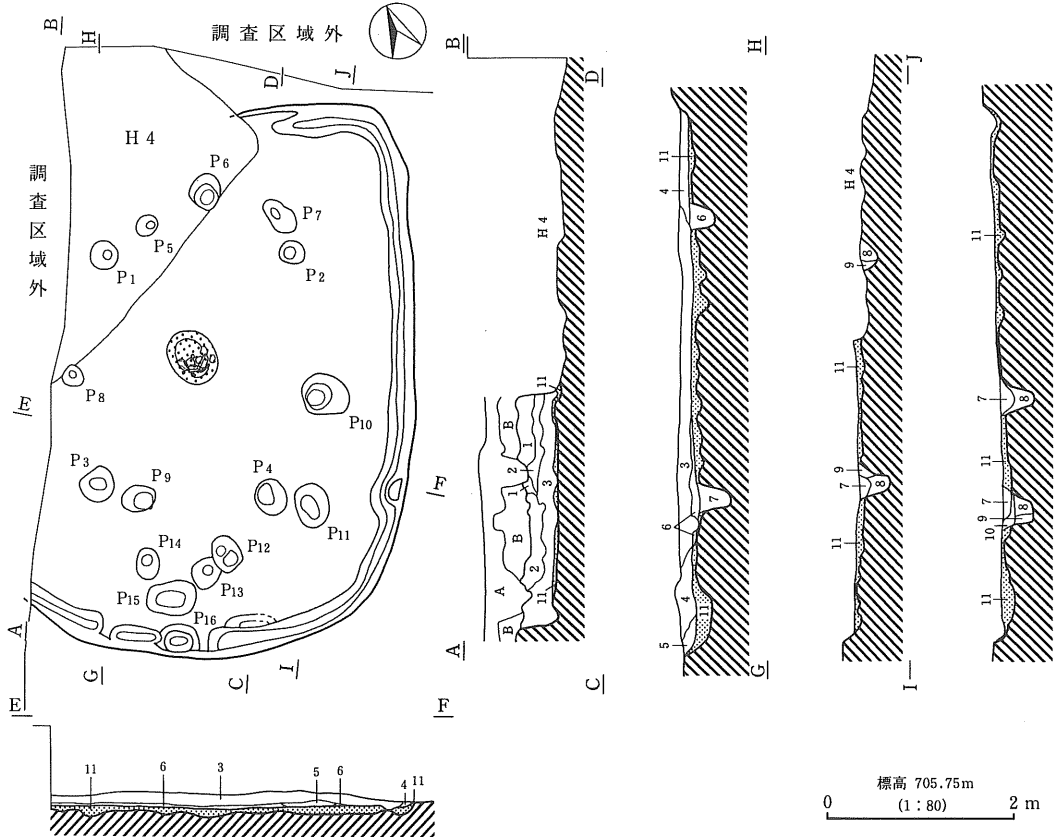


第12図 H 2 号住居址出土遺物実測図

整は内面が丁寧なミガキが施されている。5の形態は口縁部が受け口状で、施文は口唇部にLR縄文、口縁部外面に6本一組の橢描波状文、頸部に7本一組の橢描簾状文、胴部に7本一組の橢描斜走直線文が不規則な縦位羽状にそれぞれ施している。調整は内面がやや荒いミガキが施されている。6は単孔の甕で、穴は焼成前の穿孔である。施文は口唇部にLR縄文を施す。調整は内外面ともにミガキが施されている。7は磨り石皿と考えられる。北壁際と南壁際のもののが接合した。図中にスクリーントーンで示した部分がもっともよく磨かれていた。石材は花崗岩である。

(3) H3号住居址 (第13~17図、写真図版五・六)

本住居址は調査区B区の北西端より検出され、コ-6・7、サ-6・7Grに位置する。本址はH4号住居址とH8号住居址と重複関係にあり、新旧関係は古い方よりH8号→本址→H4号である。残存状況は西側が調査区域外となり、北西端がH4号に削平されている他はほぼ良好である。



- A層 灰白色土 (10YR7/1) しまり、粘性弱い。 ϕ 1~2mmの小石を多量含む。
- B層 褐灰色土 (10YR6/1) しまり、粘性弱い。A層より黒味あり。 ϕ 1~2mmの小石を含む。
- 1層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性やや弱い。 ϕ 2mmの軽石・パミスを含む。
- 2層 黒色土 (10YR2/1) しまりややあり、粘性あり。小石・軽石・パミスを含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2) しまりあり、粘性弱い。 ϕ 2~3cmの軽石を含む。
- 4層 褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性ややあり。ローム粒子を多量、軽石を含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性やや弱い。ローム粒子・軽石を少量含む。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性あり。ローム粒子・軽石を多量含む。
- 7層 黒色土 (10YR2/1) しまり、粘性弱い。 ϕ 2~3cmの軽石を含む。
- 8層 黒色土 (10YR2/1) しまり弱く、粘性あり。 ϕ 2~3cmの軽石・黄色パミスを含む。
- 9層 黄褐色土 (10YR5/8) しまり、粘性あり。ロームブロックを含む。
- 10層 褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性弱い。ローム粒子を多量含む。
- 11層 明黄褐色土 (10YR6/8) しまりあり、粘性弱い。ローム主体。 ϕ 2~3cmの軽石を含む。

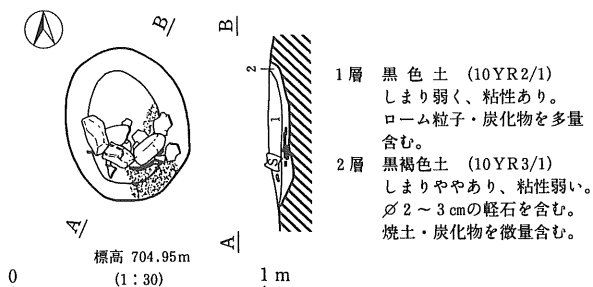
第13図 H3号住居址実測図

形態は南北に長軸をもつ隅丸方形の住居址と考えられる。規模は、検出部分で北壁1.48m、南壁3.33m、東壁5.36mを測り、推定での規模は長軸約5.80m、短軸約4.70mを測ると考えられる。壁高は西側セクション面で約0.36mを測る。住居址床面積は検出部で13.5㎡、推定面積は17.3㎡を測る。住居址の主軸方位はN-24°-Eを示す。床はやや軟質であるが、貼床は0.08mほどの厚さで施されていた。Pitは16カ所確認され、P 1からP 4は主柱穴と考えられるが、明確な柱痕などは確認されなかった。規模はP 1が径0.28m・深さ0.20m、P 2が径0.28m・深さ0.17m、P 3が径0.37m・深さ0.33m、P 4が径0.40m・深さ0.31mを測る。P 13・14・15はその配置から入り口施設の梯子穴の性格のものと予想される。また、P 16はPit上端周辺が床面よりも一段高く周堤帯のように造りだされており単なる柱穴とは異なる性格が予想される。他のPitは補助的な柱穴と考えられる。壁溝は北壁一部、東壁と南壁で確認され、幅0.23m・深さ0.04mを測る。

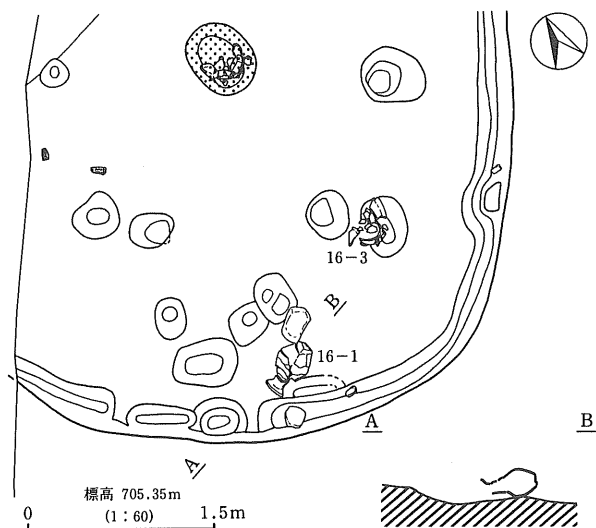
また、本址中央より炉跡が確認された。形態はほぼ円形で、規模は長軸長1.21m・短軸長0.99m、深さ0.19mを測る。炉南側には3個の河原石が「コ」の字状に配石され、枕石として使用されていた。また火床面からは第16図に示したNo.4とNo.5の土器が乱雑ではあるが敷かれたような状態で出土した。

本址からの出土遺物は、覆土上層と床面から集中的に出土した。しかし、覆土上層の遺物に関してはその出土状態や本址床面上から出土した遺物と所産時期が異なるため、第6節の遺構外遺物の項で改めて報告する。よつてここでは、床面直上出土の遺物のみを扱う。

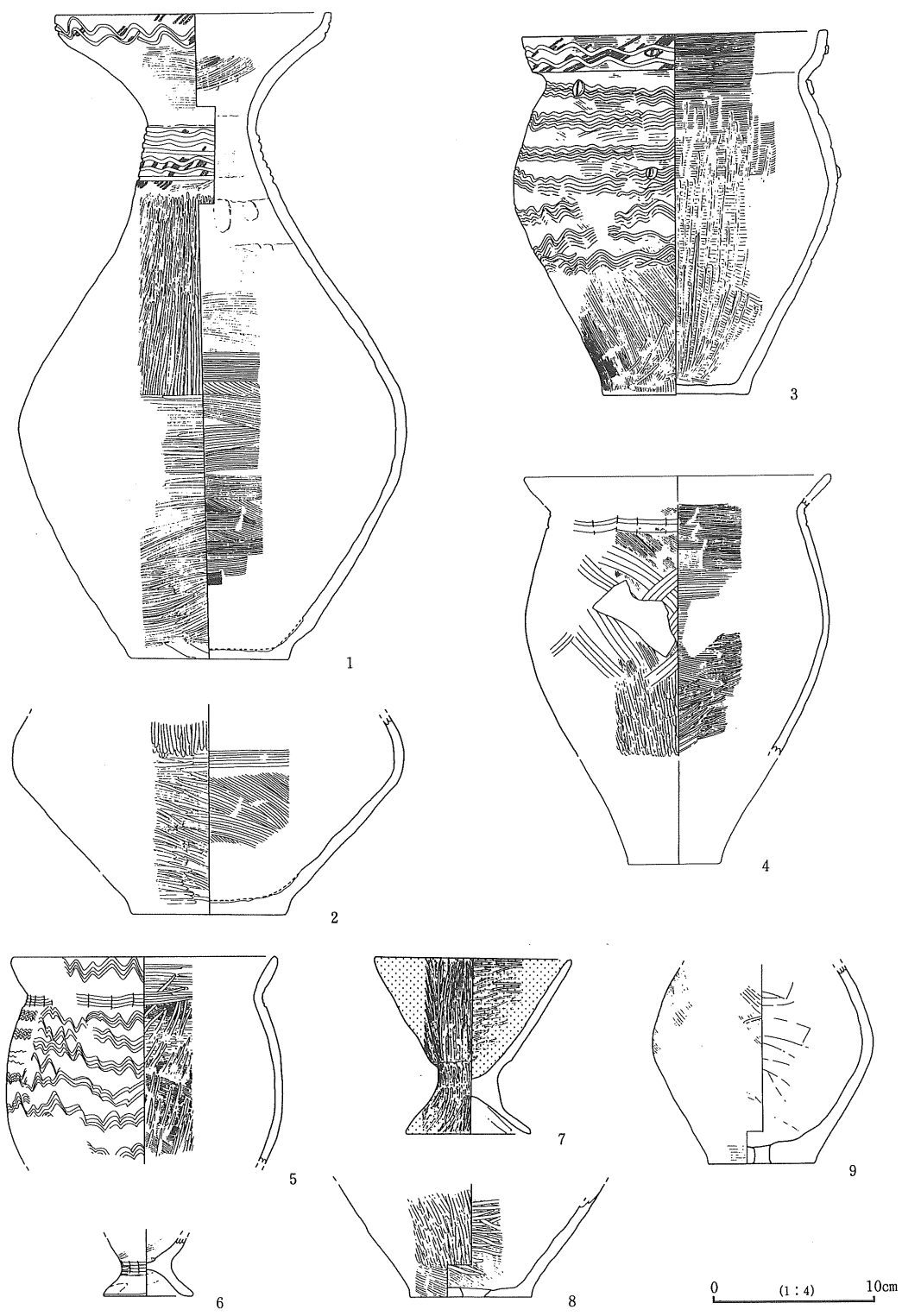
1は壺であり、口縁部の一部を欠損する他はほぼ完形である。出土位置は第15図に示したように、住居址南側にNo.11の石皿と並ぶような位置に横転した状態で出土した(写真図版六②)。形態は口縁部が外側に強く外反し口縁部先端で受け口状に立ち上がる。最大径は胴部中位にある。施文は口唇部の面取りされた部分にLR縄文を充填、受け口部外面は2条の篋描連続山形文を施文しやや荒くLR縄文を充填している。



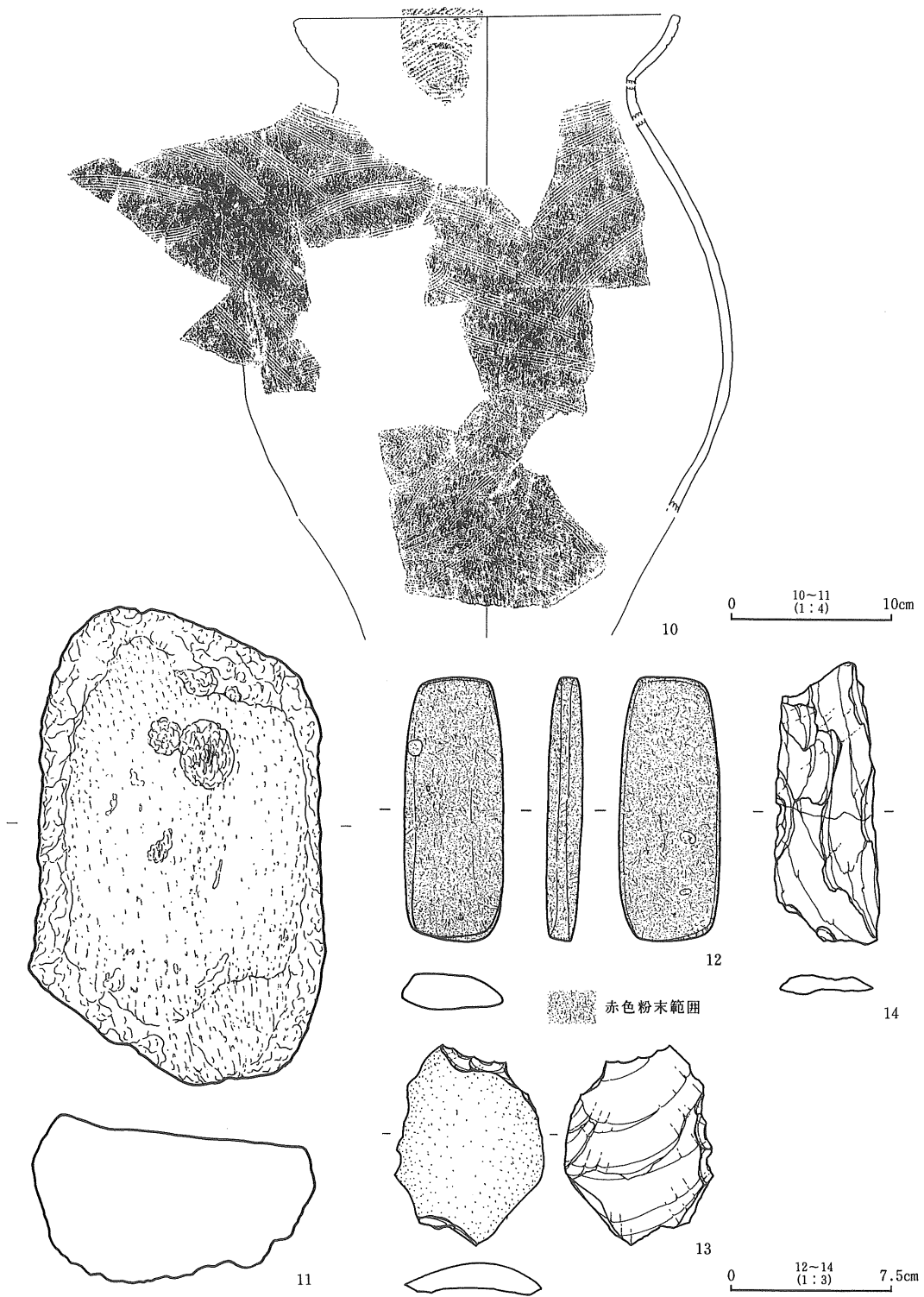
第14図 H3号住居址炉実測図



第15図 H3号住居址遺物出土状況図



第16图 H 3号住居址出土遗物实测图(1)



第17图 H3号住居址出土遺物実測図(2)

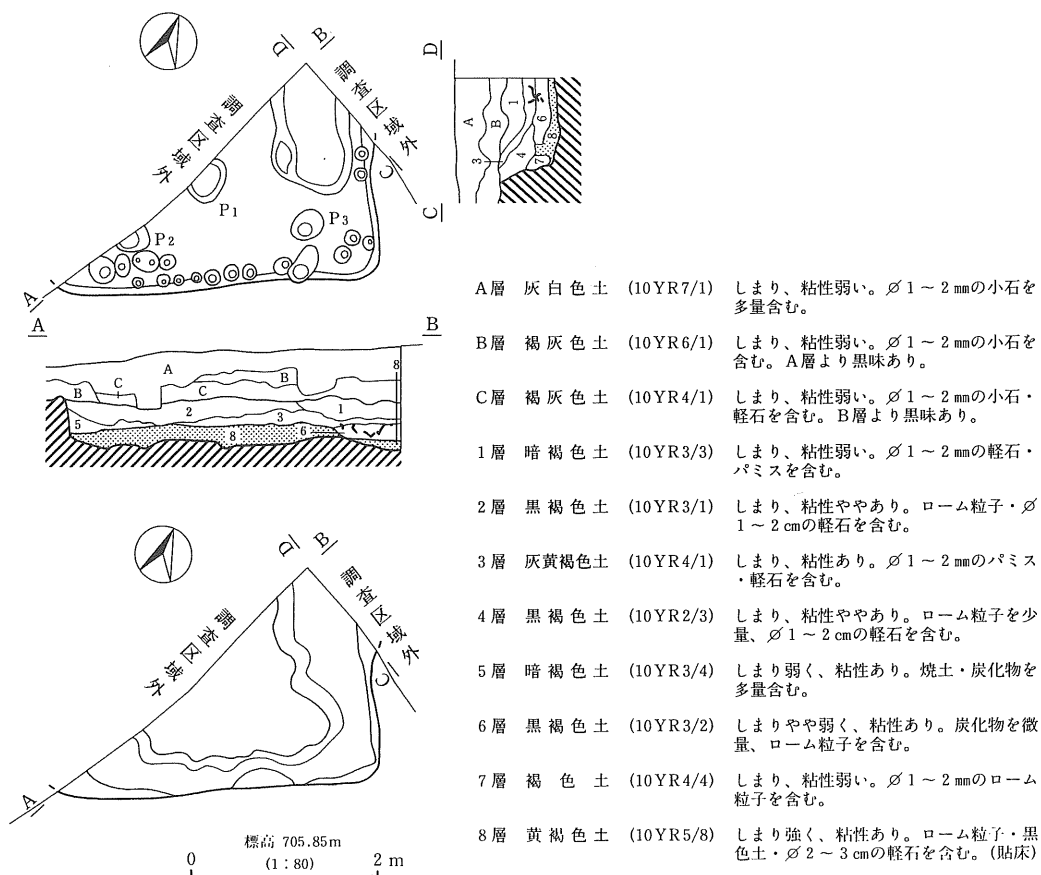
頸部は2条の平行沈線と粘土を盛り上げた部分によつて区画された空間に、2条づつ計4条の篋描連続山形文を施し、あいた空間にLR縄文を充填している。調整は外面ミガキ、内面刷毛目のナデが施されている。2は壺の胴部から底部の破片であり、P7脇より出土した。調整は外面ミガキ、内面刷毛目のナデである。内面底部付近は化粧土が剥げ器面が荒れた状態であった。3は甕であり、胴部の一部を欠損する他は完形である。P11脇から散乱した小破片の状態で出土した。形態は胴部上半に最大径を有し、広い頸部から口縁部がほぼ垂直の受け口状に立ち上がる。施文は口唇部の面取りされた部分にLR縄文を充填、受け口部外面は2条の篋描連続山形文を施文しやや荒くLR縄文を充填している。また口縁部と頸部には等間隔で5カ所に沈線文を持つ円形浮文が貼付されている。胴部上半は3条の5本一組で櫛描波状文が施されているが、最上部の1本が他に比べて深い。胴部中位は上半と同じ櫛描波状文と観察できるが、化粧土が堅かったせいか、最上部の1本しか施文されていない。調整は外面刷毛目のナデの後荒いミガキ、内面刷毛目のナデである。4は甕であり頸部から胴部の破片である。炉跡から出土した。施文は頸部に2本一組と1本一組の櫛描簾状文が巡り、胴部は4本一組の櫛描斜走直線文が縦位に施されている。調整は外面ミガキ、内面刷毛目のナデとミガキである。5は甕の口縁部から胴部の破片であり、炉跡から出土した。施文は口縁部と胴部が4本一組の櫛描波状文、頸部が4本一組の櫛描簾状文が施されている。調整は内面ミガキを施す。6は小型台付甕の脚部分で、覆土より出土した。施文は脚接合部に4本一組の櫛描簾状文を施す。また内面は煤の付着なのか黒色となっていた。7は高坏であり、口縁部と脚部を一部欠損する他は完形である。P7脇より出土し、施文は見られないが、内外面ともに赤色塗彩されている。調整は丁寧なミガキが施されている。8は単孔の甎で、北壁際の壁溝上から出土した。孔は焼成前の穿孔で、調整は内外面ともミガキが施されている。9は壺の転用甎であり、P6脇より出土した。調整は外面が刷毛目のナデの後荒いミガキで、内面がナデが施されている。孔は焼成後の穿孔である。10は甕で、床面上の広範囲から破片で出土した。形態は胴部上半に最大径を有し、口縁部が大きく外反するものと考えられる。施文は口唇部の面取りされた部分にLR縄文を充填、受け口部外面は3条の篋描連続山形文を施文しLR縄文を充填している。頸部には6本以上一組の櫛描簾状文が、胴部上半には櫛描斜走直線文が縦位羽状に施されている。調整は胴部下半と内面が丁寧なミガキが施されている。

本址からの石器は11はNo.1の壺の脇より、磨り面を上にして出土した。研面は片面のみで片側よりには大小の凹が二カ所確認できる。石材は石英安山岩である。12は磨り石で、東壁南よりの壁溝上から出土した。全面きれいな研磨のあとがあり、また赤色の粉末(ベンガラ?)が付着している。石材は砂岩である。13は不定形石器で片側に刃を造りだし、両端は槁打痕がある。石材は輝石安山岩である。14は打製横刃型石器で両端は欠損しているものの、その形態より石包丁的使用目的が推定できる。石材は緑泥片岩である。

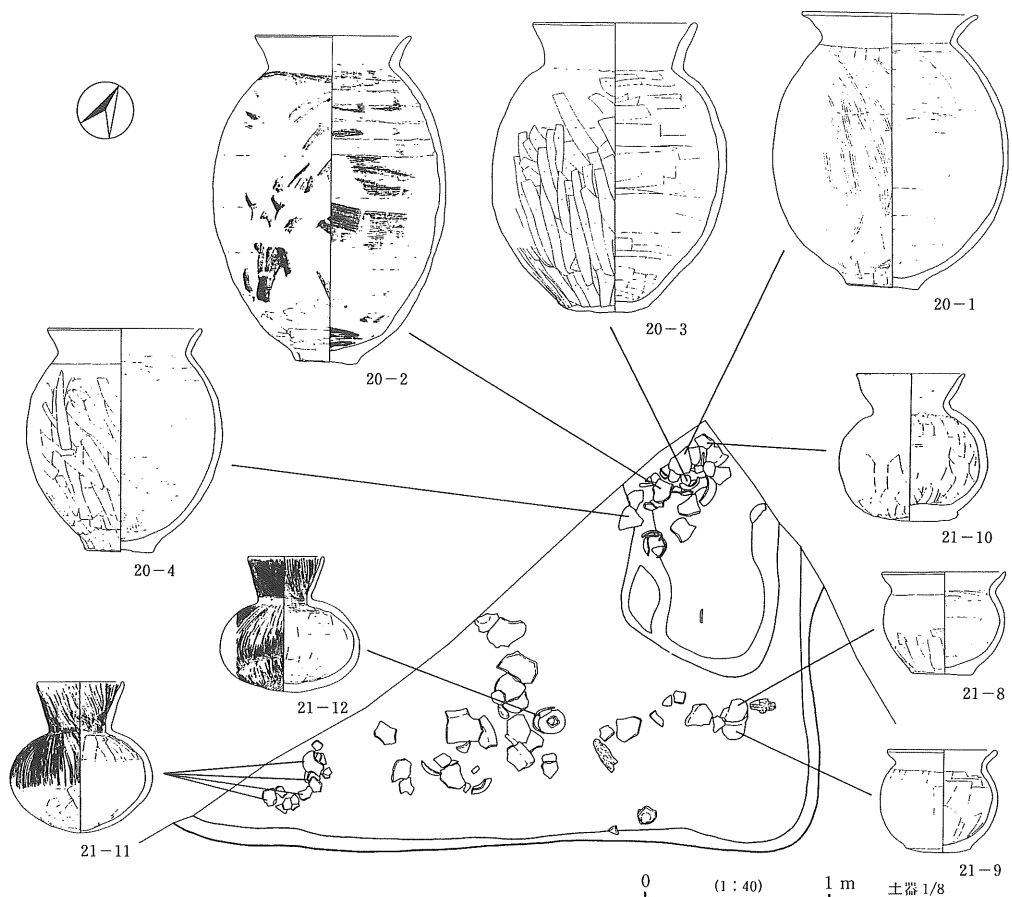
(4) H4号住居址(第18~21図,写真図版七・八②③)

本住居址は調査区B区の北西端より検出され、コ-6,サ-6Grに位置する。本址はH3号住居址とH8号住居址と重複関係にあり、新旧関係は古い方よりH8号→H4号→本址である。残存状況は西側と北側が調査区域外となり、住居址の南東コーナー部だけの検出となった。

形態は方形の住居址と考えられる。規模は、検出部分で東壁1.38m、南壁3.38mを測るが、南壁西端が屈曲し始めることや住居址掘り方において同じく西端がコーナー的に掘り込まれていることなどから、本址は小型の住居址とも考えられる。壁高は西側セクション面で約0.40mを測る。住居址床面積は検出部で4.6㎡。床はやや軟質であるが、貼床は0.20mほどの厚さで施されていた。Pitは21カ所確認され、P1からP3以外のものは壁に沿うように検出され、壁柱穴的な性格が考えられる。規模はいずれも径0.15m内外・深さ0.06~0.04mを測る。また東壁に沿うように長方形の土坑が検出された。規模は長軸長1.30m・短軸長0.80m、床面からの深さ0.09mを測る。土坑内からは第19図に示したように多量の土師器甕が出土している。



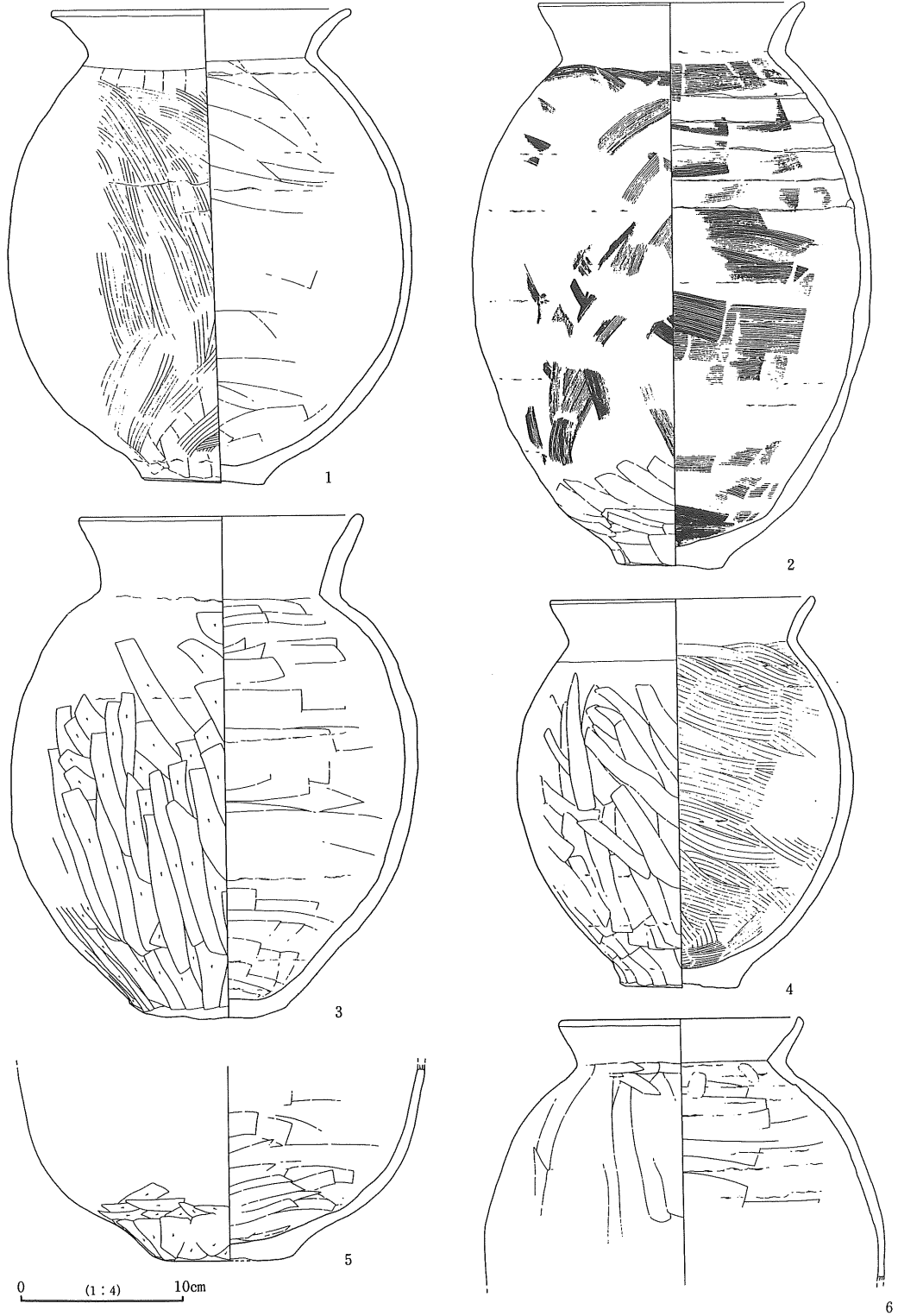
第18図 H4号住居址及び掘り方実測図



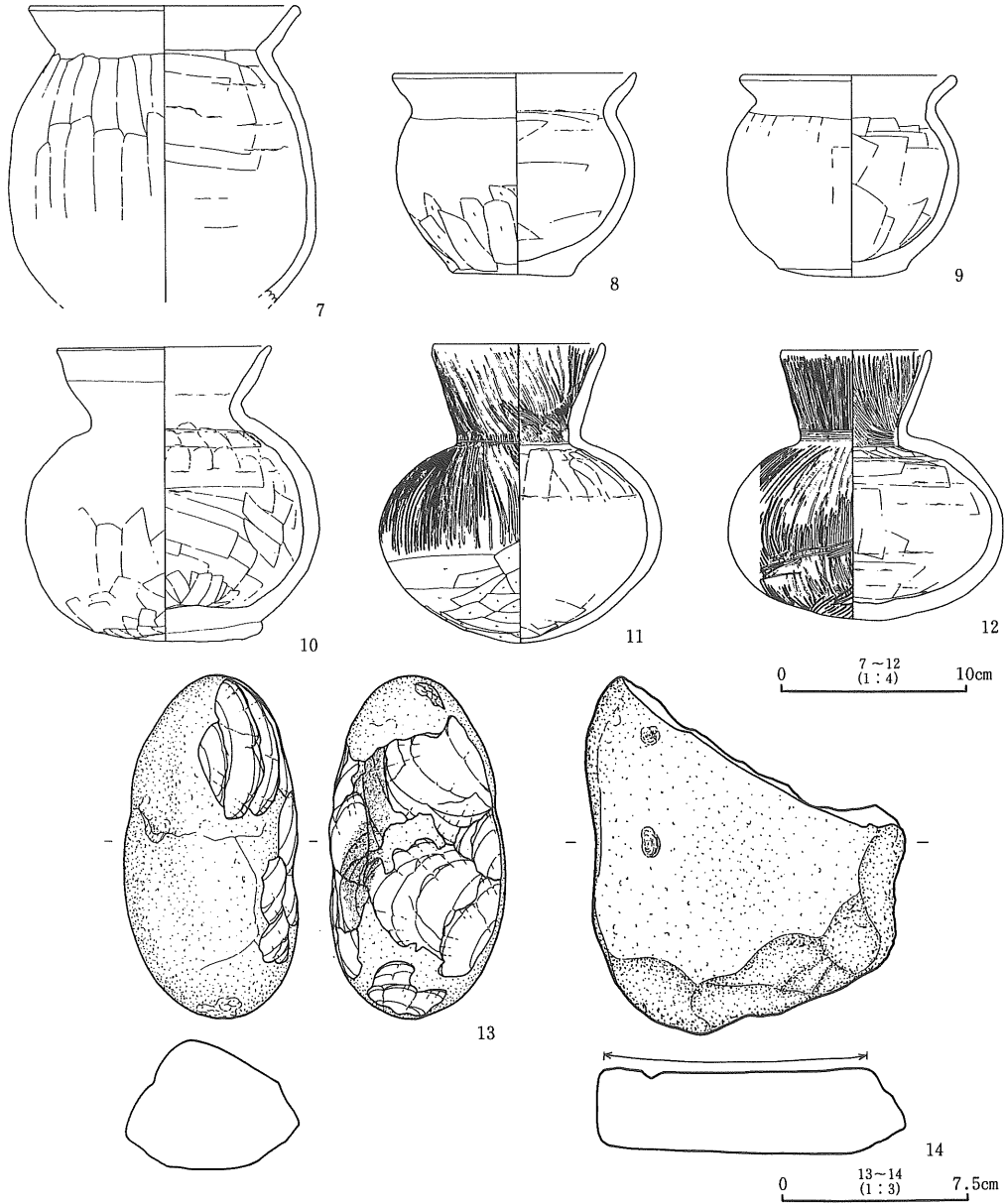
第19図 H4号住居址遺物出土状況図

本址からの出土遺物は覆土と床面及び土坑内から出土し、特に土坑内と南壁際から集中して出土した。また、土器等にまぎって炭化材も少量検出されている。

1～6は土師器胴張長胴甕で、形態はいずれも最大径を胴部中位に持ち、底部は3をのぞき水平面を作り出しているが、3はやや丸底ぎみである。調整は1・2が外面刷毛目の残るナデを、内面はナデを施す。3～6は外面がヘラケズリを、内面は3・5・6がナデ、4が刷毛目のナデを施す。7は小型甕の口縁部から胴部の破片で、顕著な二次焼成を受けている。形態は胴部下半に最大径を持つものと考えられる。調整は外面ヘラケズリ、内面がナデを施す。8と9も小型甕で、東壁脇から重ねられた状態で出土した(写真図版八②)。形態は胴部下半に最大径を持ち、底部は8が水平、9はやや丸底気味である。調整はいずれも外面がヘラケズリ、内面がナデを施す。10～12は小型丸底壺である。形態は何れも最大径が胴部中位にあるが、10は口縁部中位からやや肥厚し、頸部との境目に稜を持つ。また、底部は粘土版が残り水平状になっている。これらの形態より10は須恵器甕を意識した模倣品の可能性がある。調整は内外面にナデが施されている。



第20图 H 4 号住居址出土遗物实测图(1)



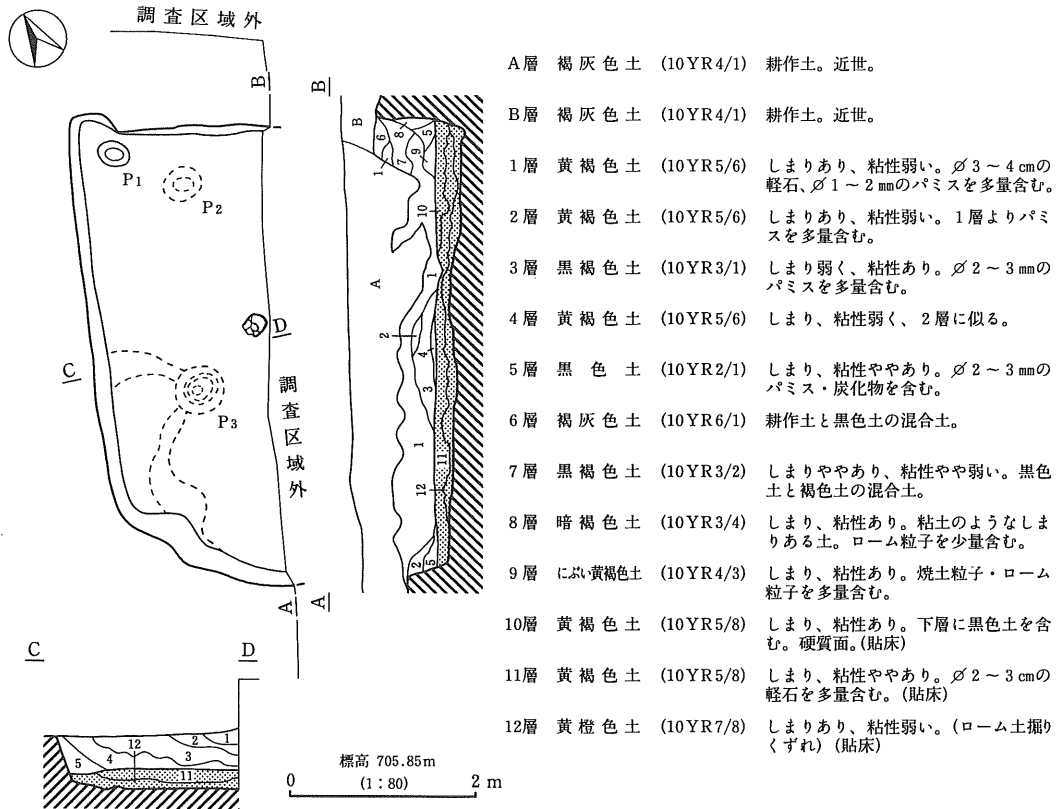
第21図 H 4 号住居址出土遺物実測図(2)

11・12の形態は口縁部径が胴部最大径より小さく、底部は丸底を呈する。また、色調が11は赤色化しており赤彩を意識したものか？。調整は11が口縁部内外面から胴部中位までが丁寧なミガキで、胴部下半は横方向のヘラケズリが施されている。12は口縁部内外面から胴部全体が丁寧なミガキ、胴部内面がナデを施す。13は敲石と考えられ、南壁西寄りの土器の下から出土した。焼成を受けている為か表面がはげ落ちている。14は石皿で、8・9の小型甕脇から出土した。片面のみ凹状の顕著な研磨面が観察できる。石材は13、14とも輝石安山岩である。

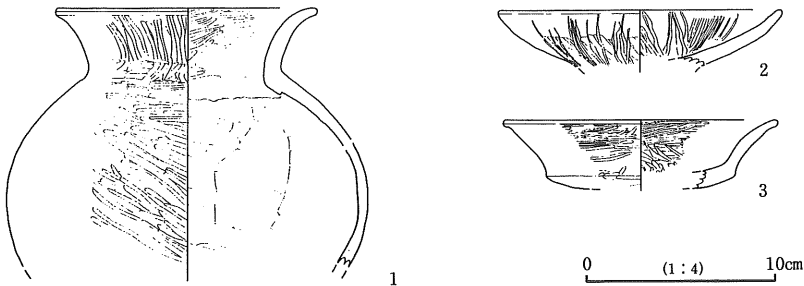
(5) H5号住居址 (第22・23図、写真図版九)

本住居址は調査区B区の北東より検出され、キ-8、ク-7・8・9 Grに位置する。本址はD6号と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。残存状況は東側が調査区域外となり、住居址の西半分だけの検出となった。

形態は方形の住居址と考えられるが、南西コーナーは隅丸的な曲線を描き、北西コーナーは一部外側に張り出している。規模は、検出部分で北壁2.05m、西壁4.36m、南壁1.85mを測る。壁高は東側セクションの残存状況良好な面で約0.92mを測る。住居址床面積は検出部6.2m²である。



第22図 H5号住居址実測図

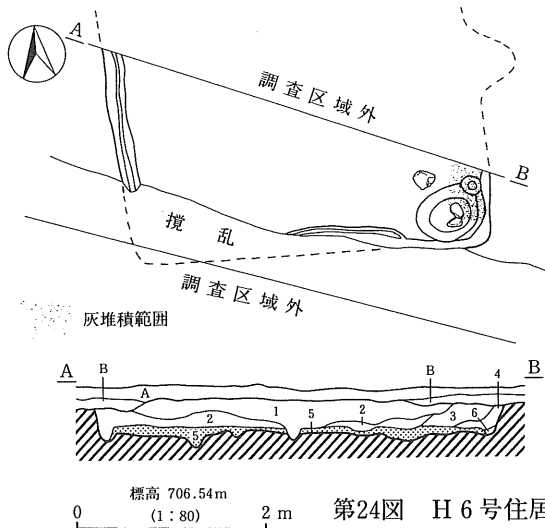


第23図 H5号住居址出土遺物実測図

床はやや軟質であるが、貼床は0.27mほどの厚さで施されていた。Pitは1カ所確認され、規模は径0.36m・深さ0.11mを測る。また、掘り方検出時に2カ所のPitが確認された。検出位置から本址の主柱穴と考えられる。規模はP2が径0.34m・深さ0.29m、P3が径0.50m・深さ0.69mを測る。カマドは検出されなかったが、東側セクションの第9層において粘土ブロックが確認された為、住居址北壁側に構築されているものと考えられる。

本址からの出土遺物は図示した物の他に、弥生土器壺片・甕片がある。1は土師器壺で、床面上より出土した。形態は胴部中位に最大径を持ち、口縁部が外側に強く外反する。調整は口縁部内外面と胴部外面が丁寧なミガキ、胴部内面はナデが施されている。2・3は、土師器高坏の坏部で、覆土より出土している(3は坏の可能性もあるが清水田遺跡において同型の小型高坏がある為、ここでは高坏として報告する)。形態はいずれも体部に稜を持つと考えられる。調整は2が内外面に暗文風のミガキが放射状に施されている。3は内外面に丁寧なミガキが施されている。

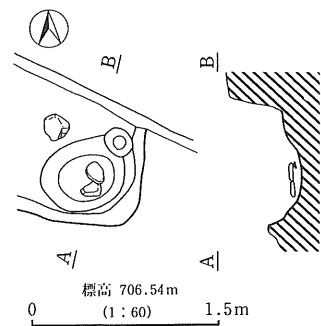
(6) H6号住居址(第24~26図,写真図版十)



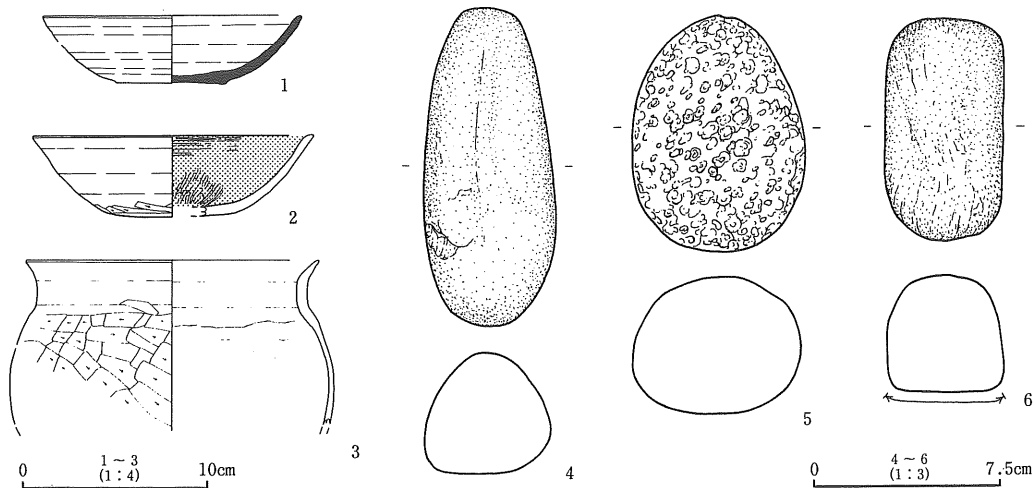
- A層 灰白色土 (10YR7/1)
しまり、粘性弱い。小石を少量含む。耕作土。
- B層 褐灰色土 (10YR4/1)
しまりややあり、粘性弱い。φ2~3mmの軽石を含む。
- 1層 黒褐色土 (10YR3/1)
しまりあり、粘性弱い。φ1~2cmの軽石を多量、ローム粒子を含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)
しまりややあり、粘性弱い。φ1~2cmの軽石・ローム粒子を多量含む。
- 3層 褐色土 (10YR4/4)
しまりあり、粘性ややあり。ローム粒子を多量含む。
- 4層 褐灰色土 (10YR5/1)
しまりあり、粘性強い。焼土ブロック・灰色粘土・炭化物を含む。
- 5層 明黄褐色土 (10YR6/8)
しまりあり、粘性弱い。φ2~3cmの軽石・砂・黒色土ブロックを含む。
- 6層 褐色土 (10YR4/6)
しまり、粘性弱い。φ2~3cmの軽石を含む。

本住居址は調査区A区の北よりから検出され、ウ-2、エ-2Grに位置する。残存状況は北側が調査区域外となり、南側は鉄塔基礎の削平によって消滅していた。よって住居址全体の南側1/3ほどの検出となった。

形態は方形の住居址と考えられる。規模は、検出部分で東壁0.72m、西壁1.40m、南壁1.10mを測り、南壁の推定長は3.60mと考えられる。壁高は北側セクションの残存状況良好な面で約0.28mを測る。住居址床面積は検出部4.2m²である。



第25図 H6号住居址コーナー土坑



第26図 H 6号住居址出土遺物実測図

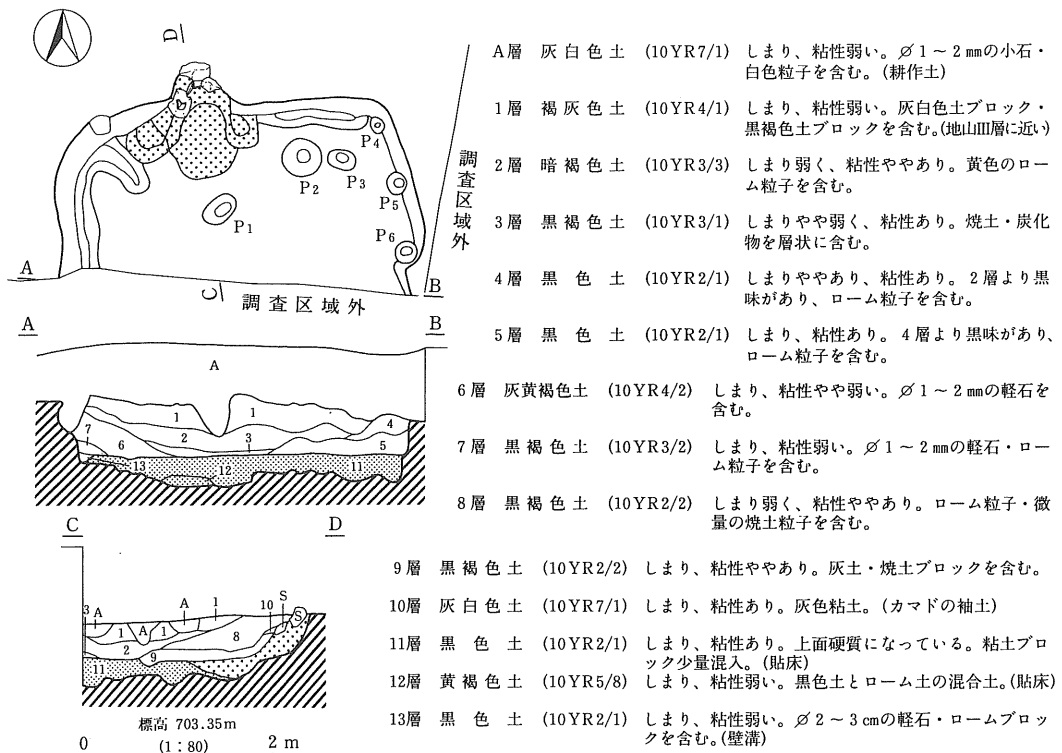
床は硬質で、貼床は0.08mほどの厚さで施されていた。Pit・カマドは確認されなかったが、住居址南東コーナーより白色粘土と灰の堆積が確認され、粘土下からは土坑が検出された。規模は長軸0.78m・短軸0.54m、深さ0.10mを測る。土坑内からは径17cmほどの河原石が2点検出され、そのいずれもが片面に焼成を受けた痕跡が認められた。この事より本址のカマドは東壁にあり、本土坑は灰溜的性格の掘り込みと推定できる。

本址からの出土遺物は非常に少なく、図示した物の他には土師器甕片・坏片が少量のみであった。1は須恵器坏で土坑内より出土した。調整は体部ロクロ成形による底部回転系切り離しである。2は土師器坏で灰の中より出土した。調整は体部ロクロ成形による底部回転系切り離しである。また内面は黒色処理されている。3は土師器甕で灰の中より出土した。形態は頸部が垂直ぎみに立ち上がる「武蔵甕」タイプであり、胴部外面は斜方向のヘラケズリが施されている。4は敲石で、両端に敲きの痕跡がある。石材は輝石安山岩である。5は面取りの部分があるが、使用目的は不明である。石材は軽石である。6は磨石で片面のみ研磨の痕跡が確認できる。石材は花崗岩である。

(7) H 7号住居址 (第27～30図, 写真図版十一・十二)

本住居址は調査区C区の南東隅よりから検出され、セ-22、ソ-22Grに位置する。残存状況は南側が調査区域外となり、よって住居址全体の北側半分ほどの検出となった。

形態は方形の住居址と考えられるが、東壁が北側のみ東に約0.40mほど張り出している。主軸方位はN-18.5° -Wを示す。規模は、検出部分で東壁2.12m、西壁1.50m、北壁3.18mを測る。北壁の中央部にはカマドが検出された。壁高は東西セクションの残存状況良好な面で床面まで約0.42mを測る。住居址床面積は検出部4.5㎡である。床は中央部から西側が特に硬質で、貼

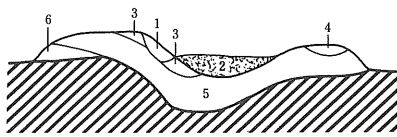
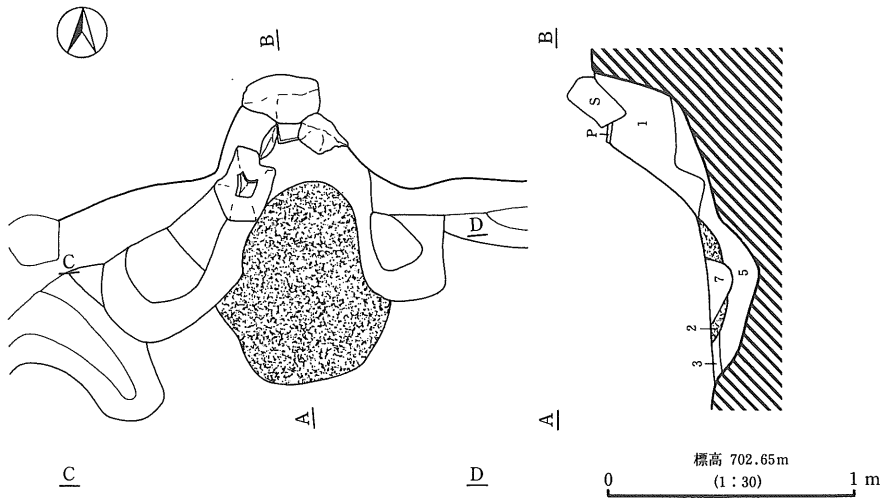


第27図 H7号住居址実測図

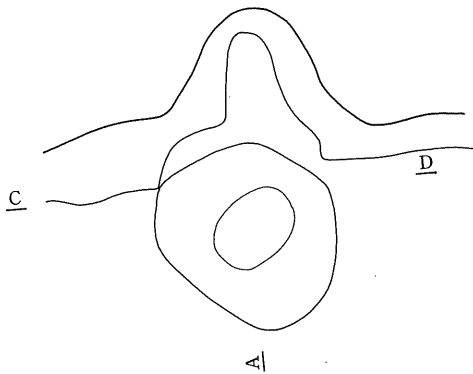
床は最大0.33mほどの厚さで施されていた。Pitは6カ所確認された。東壁直下には3カ所のPitが確認され、壁柱穴的な検出状態であった。規模は径0.22m前後・深さ0.06~0.12mを測る。壁溝は北壁と西壁で確認され、西壁の壁溝はカマド脇で「L」字形に曲がっている。規模は幅0.32m・深さ0.10mを測る。住居址掘り方は、中央部分がやや深くなり、すり鉢状を呈していた。

カマドは北壁中央に検出された。形態は煙道部が短く急激に立ち上がるタイプのものである。残存状況は天井部などが既に崩落しており、袖部も上半の構築土はなく、基底部のみの検出であった。また、煙道部の上面からはカマド構築材と考えられる焼成を受けた大型の石3点が検出されたが、原位置を保っているものではない。主軸方位はN-4.5°-Wを示す。規模はカマド長軸が1.86m・短軸が1.40m、袖部規模は向かって右袖が幅0.50m・長さ0.50m・高さ0.09m、左袖が幅0.53m・長さ0.92m・高さ0.14mを測る。火床面はよく焼けており、厚さ0.12mの焼土の堆積が認められた。カマド掘り方では、火床面下に径1.08m・深さ0.16mの円形の掘り込みが確認された。

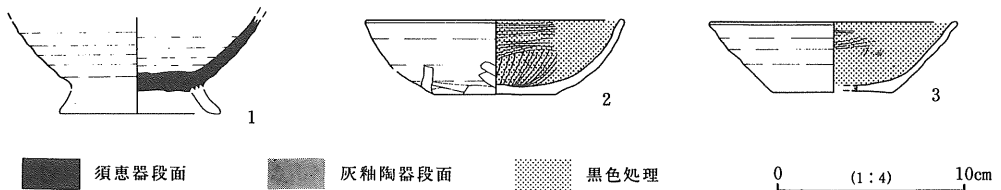
本址からの出土遺物は覆土・床面上・カマド内より出土している。1は須恵器高台付坏であるが高台部分は欠損しており、全体の1/2ほどが残存している。覆土より出土した。調整は体部がロクロヨコナデ、底部が回転糸切り離しの後高台貼付を行っている。また、内面見込み部には



- 1層 褐灰色土 (10YR4/1)
しまり、粘性弱い。さらさらで小石を含む。
- 2層 明赤褐色土 (5 YR5/8)
しまり弱く、粘性ややあり。灰を含みよく焼けている。(焼土層)
- 3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)
しまり弱く、粘性あり。灰層。
- 4層 灰白色土 (10YR8/1)
しまり、粘性あり。粘土層。(袖の土)
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)
しまりややあり、粘性弱い。ロームブロックを含む。(焼床面の下の土)
- 6層 褐色土 (10YR4/4)
しまり、粘性ややあり。黒褐色土・ロームブロックを含む。φ2~3cmの軽石を含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)
しまりややあり、粘性弱い。焼土粒子・炭化物を含む。(支脚石のぬき穴?)

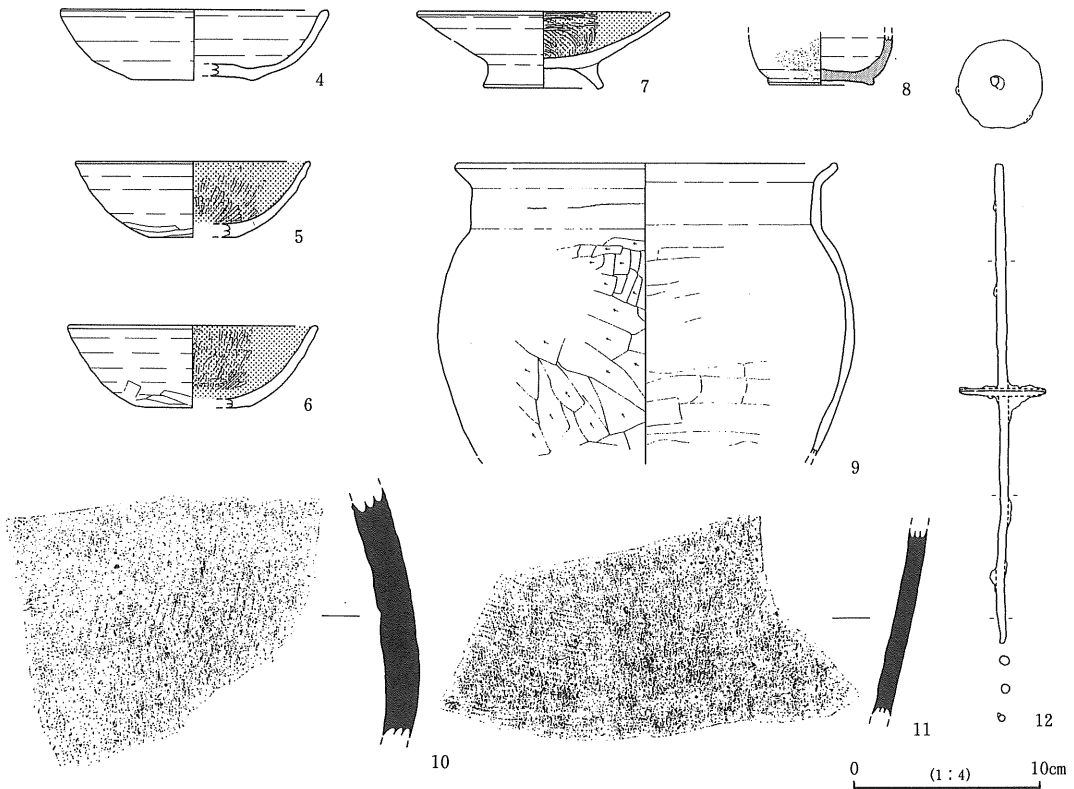


第28図 H7号住居址カマド実測図

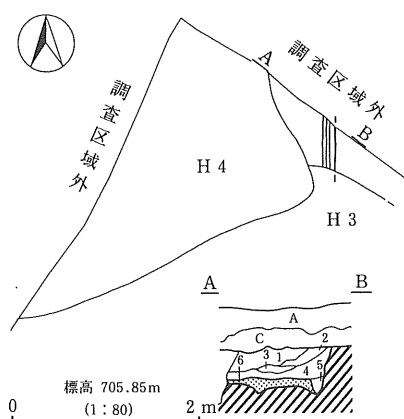


第29図 H7号住居址出土遺物実測図(1)

煤が付着している。2～6は土師器坏で、3のみカマド右袖内より出土で他のものはすべて覆土中からの出土である。調整は2・5・6が体部上半がロクロヨコナデ、体部下半と底部はヘラケズリが施されている。また内面は黒色処理されており、丁寧なミガキが施されている。3の調整は体部ロクロヨコナデ、底部が回転糸切り離し、内面は黒色処理されている。4は体部がロクロヨコナデで、底部は無調整、内面には煤が付着している。7は土師器高台付皿で、覆土中・床直・カマド右袖上からの破片がそれぞれ接合された。調整は体部ロクロヨコナデ、底部は高台貼付で、内面は黒色処理と丁寧なミガキが施されている。8は灰釉陶器の小壺?であり、床面上から出土した。調整は胴部ロクロヨコナデ、底部は回転糸切り離しの後、高台をひねり出している。内面の見込み部と外面胴部には自然釉が付着している。9は土師器甕でカマドより出土した。口縁部は「コ」の字状に屈曲しており、調整は胴部外面斜め方向のヘラケズリ、内面ナデが施されている。10・11は須恵器甕胴部の破片であり、10がカマド煙道部、11が住居址中央の覆土中より出土している。調整は何れも外面平行タタキが、内面は11が輪積痕と刷毛目のナデが、11はナデが施されている。またいずれも外面に自然釉の付着がみられる。12は鉄製紡錘車でほぼ完形である。カマド右袖上から出土した。

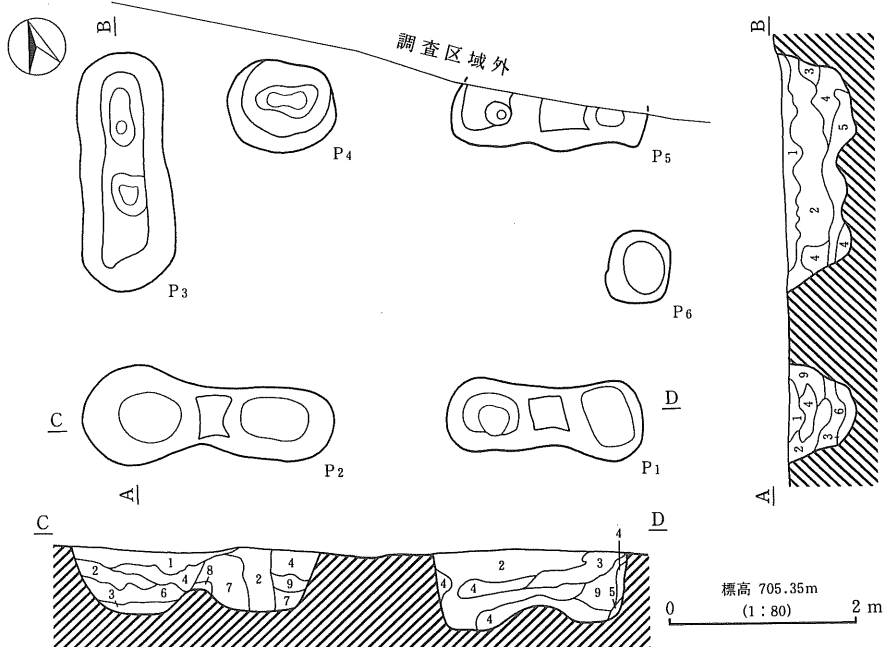


第30図 H 7号住居址出土遺物実測図(2)



- A層 灰白色土 (10YR7/1)
しまり、粘性弱い。 ϕ 1~2mmの小石を多量含む。
- C層 褐灰色土 (10YR4/1)
しまり、粘性弱い。 ϕ 1~2mmの小石・軽石を含む。
- 1層 灰黄褐色土 (10YR4/2)
しまり、粘性ややあり。ローム粒子・ ϕ 5mmくらいの軽石を含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/3)
しまり、粘性弱い。ローム粒子を含む。3層よりやや明るい。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)
しまり、粘性やや弱い。2・4層の中間層。
- 4層 黒色土 (10YR2/1)
しまりややあり、粘性弱い。きめ細かく、ローム粒子を微量含む。
- 5層 黄褐色土 (10YR4/6)
しまり、粘性弱い。ロームブロック・黒色土ブロックの混合土。
- 6層 黄褐色土 (10YR5/8)
しまりあり、粘性弱い。ローム主体。 ϕ 1~2mmのローム粒子を含む。(貼床)

第31図 H8号住居址実測図



- 1層 褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性ややあり。ローム粒子を含む。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性弱い。ロームブロックを含む。
- 3層 黄褐色土 (10YR5/6) しまり、粘性弱い。ロームブロック・黒色土ブロックの混合土。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/4) しまり、粘性弱い。ローム粒子を少量含む。
- 5層 明黄褐色土 (10YR6/8) しまり強く、粘性弱い。ローム土の攪りくずれたような土。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性強い。踏み固めたような土。ロームブロック・黒色土の混合土。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2) しまり、粘性強い。ロームブロック・黒色土の混合土。
- 8層 黄褐色土 (10YR5/6) しまり強く、粘性弱い。版築状につき固めた土。
- 9層 黒褐色土 (10YR2/3) しまり、粘性弱い。2層に似るがややしまりあり。

第32図 F1号掘立柱建物址実測図

(8) H 8号住居址 (第31図)

本住居址は調査区B区の北西隅より検出され、コ-6 Grに位置する。残存状況は北側が調査区域外、西側がH 4号住居址、南側がH 3号住居址によって削平されており、住居址の一部分のみの検出に止まった。新旧関係はいずれも本址のほうが古い。検出状況等から住居址の形態は不明であるが、検出部の規模は東壁が0.46m・深さは床面まで0.32mで、貼床は0.08mほどの厚さで張られていた。本址からの出土遺物はなかった。

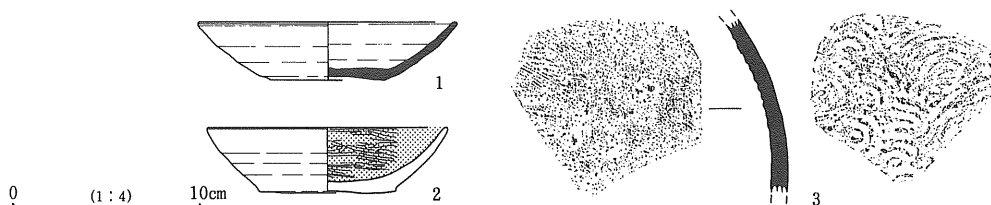
第2節 掘立柱建物址

(1) F 1号掘立柱建物址 (第32・33図、写真図版十三①)

本址は調査区B区の北よりから検出され、ク-7・8、ケ-6・7・8、コ-6・7 Grに位置する。残存状況は北側が調査区域外となり一部検出できなかったが、その他は良好である。

形態は東西に長い2間×3間の側柱式建物址であり、柱穴は一部連結式の溝持ち柱穴となっている。長軸方位はN-74°-Wを示す。規模は東西5.20m・南北3.45mで、柱穴間の寸法は梁行きが1.80~2.00m・桁行きが2.37~1.45mを測る。なお、東側桁行きは柱穴ラインより若干東に飛び出しており、歪な形態を呈する。柱穴の形態はほぼ楕円形ですり鉢状の掘り込みを呈し、底面において一段下がる掘り込みをもつ穴が多い。柱穴規模は、単体のP 4とP 6がそれぞれに径0.96m・深さ0.61mと径0.76m・深さ0.43mであり、連結式のP 1・2・3・5は径2.65m前後・深さ0.74~0.41mを測る。柱痕はP 2東側の柱穴で明瞭に確認できた。

本址よりの出土遺物は、柱穴覆土より検出された。図示したもの他に弥生土器片が少量ある。1は須恵器杯でP 3の覆土中より出土した。調整は体部ロクロヨコナデ、底部は回転糸切り離しである。また体部内面には火だすきの痕跡がある。2は土師器杯であり、1と同じにP 3覆土中より出土した。調整は体部がロクロヨコナデ、底部は静止糸切り離しの後、底部周辺のみヘラケズリを行い、ミガキを施している。内面は黒色処理が行われ、ミガキが施されている。3は須恵器甕胴部の破片であり、P 3より出土した。調整は外面が櫛目状のカキ目調整が行われ、自然釉が付着している。内面は同心円文のタタキが施されている。



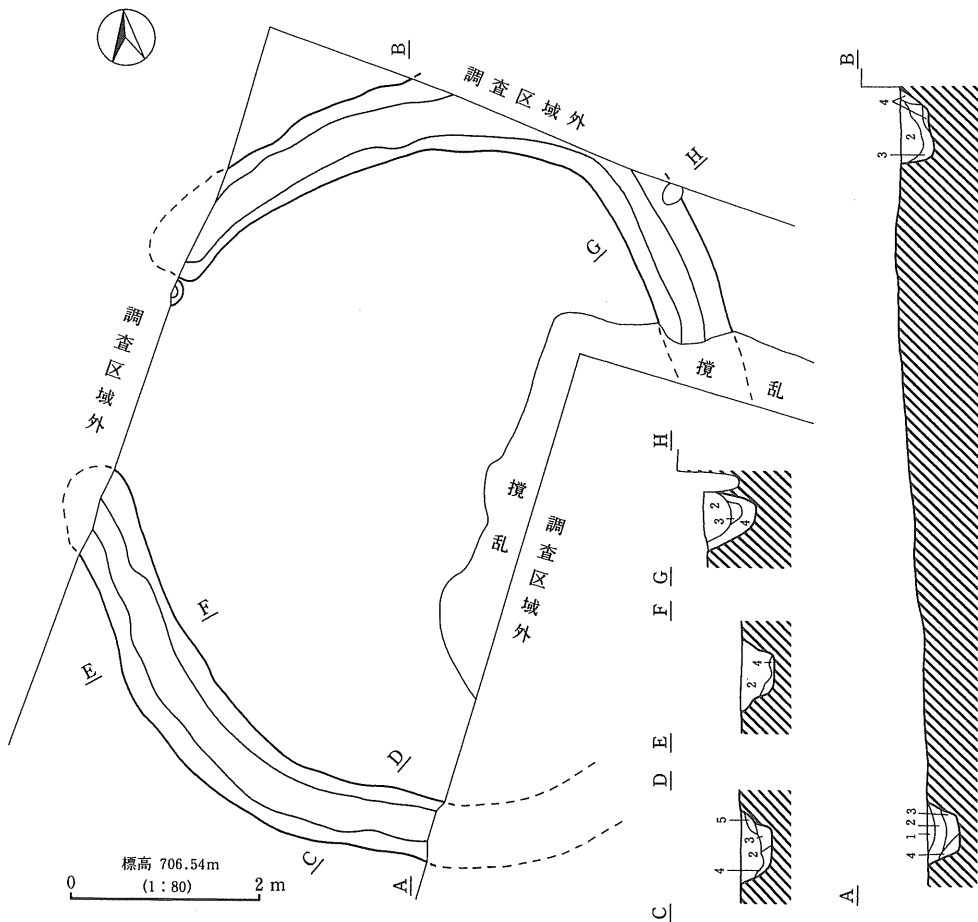
第33図 F 1号掘立柱建物址出土遺物実測図

第3節 古墳址

(1) OT1号墳 (第34・35図, 写真図版十三②)

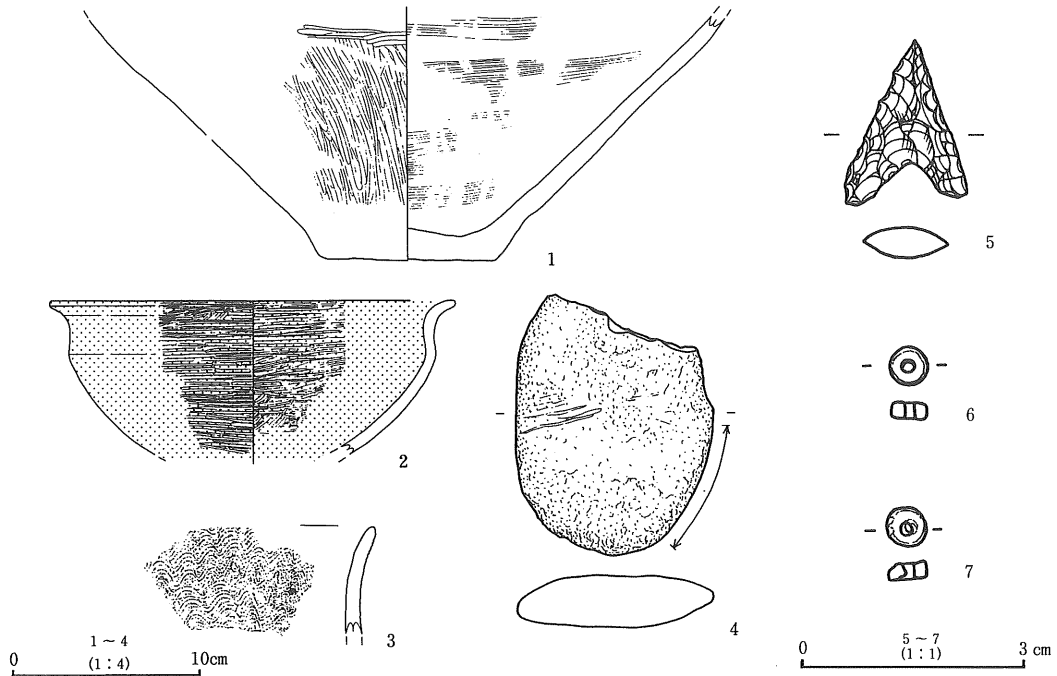
本址は調査区A区の北よりから検出され、エ-1・2, オ-1・2・3, カ-2・3 Grに位置する。残存状況は北側と西側が調査区域外となり、東側が鉄塔基礎により削平されていた。H2号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。

形態は歪な楕円形を呈し、南北にやや長い形状である。また、西側は調査区域外となるために確認はえられなかったが、西端周溝の形状から、或いは西側部分の溝が切れてブリッジを呈する



- 1層 黒色土 (10YR2/1) しまりあり、粘性ややあり。φ2~3cmの軽石を多量含む。
- 2層 黒色土 (10YR2/1) しまり、粘性あり。φ2~3cmの軽石を含む。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱く、粘性ややあり。φ1~2mmのパミスを含む。
- 4層 褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性ややあり。ロームブロックを含む。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性ややあり。3層に似るが軽石多い。

第34図 OT1号墳実測図



第35図 OT 1号墳出土遺物実測図

とも考えられる。また、盛土などによる墳丘は確認できなかった。規模は南北長8.20m・東西推定で7.30mを測る。周溝の幅は0.75m内外で、深さはGHセクションで0.54mを測り、壁は急激に立ち上がる。本墳主体部は墳丘部分に十文字のトレンチを設定し精査を行ったが、確認されなかった。耕作などにより既に削平されたものと考えられ、また、周溝内や周辺に石室構築時の石材などが見あたらなかったことから、主体部は土壙墓状のものと推定される。

本址からの出土遺物は古墳北よりの周溝内及びその周辺と南西よりの周溝内より出土している。1は弥生土器壺であり胴部下半から底部の破片である。北西よりの墳丘部から出土した。調整は胴部外面がミガキ、内面が刷毛目のナデが施されている。2は弥生土器高杯の坏部破片であり、南西よりの周溝内より出土した。調整は内外面丁寧なミガキが施され、全体に赤色塗彩されている。3は弥生土器甕の口縁部破片であり、施文は口縁部外面に9本一組の櫛描波状文がやや乱雑に施され、頸部には櫛描簾状文の一部が残存する。内面は丁寧なミガキが施されている。4は砥石と考えられ、側面に研磨の痕跡が残り、また、一部分には筋状の研磨痕がある。5は石鏃で、周溝内の覆土より出土した。石材は黒曜石である。6・7は石製白玉で、周溝内の覆土をふるいにより選別したおり検出された。石材は6が滑石、7が蛇紋岩である。

なお、本古墳の所産時期は第V章で詳細に述べるが、古墳時代後期と考えられる為、上記に示した遺物の内、本址に伴う可能性のあるものは石製白玉のみと考えられる。

第4節 土坑

(1) D1号土坑 (第36図, 写真図版十四②)

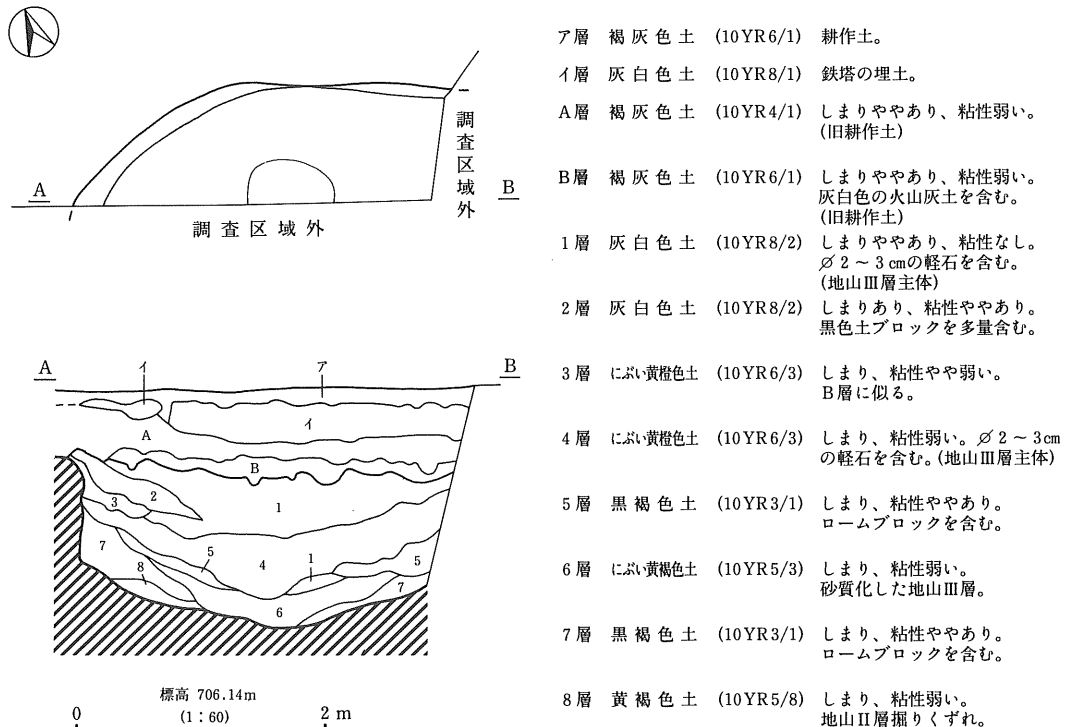
本址は調査区A区の南東端よりから検出され、オ-5, カ-5 Grに位置する。残存状況は南側と東側が調査区域外となり、遺構の北西端だけの検出となった。

形態は検出部分が狭い為、確定はできないが歪な楕円形を呈すると考えられる。規模は検出部で北壁1.57m・西壁0.93mで、深さは確認面より1.02mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は緩いすり鉢状を呈する。覆土の堆積はレンズ状の自然堆積を示し、ローム土を主体としたもので、黒色土の堆積はほとんど見られなかった。

本址からの出土遺物は土師器の小片が数点出土したのみであり、図示可能なものはなかった。よって所産時期や性格は不明であるが、本遺跡の他遺構に比べ覆土の主体がローム土と言う特異な様相を示し、しまりなども弱い為、或いは中・近世の範疇に含まれる遺構とも考えられる。

(2) D2号土坑 (第37図, 写真図版十五①)

本址は調査区B区の南よりから検出され、サ-8 Grに位置する。形態は歪な円形で、規模は径0.77m、深さは確認面より0.17mを測る。出土遺物はなかった。



第36図 D1号土坑実測図

(3) D3号土坑 (第37図,写真図版十五②)

本址は調査区B区の南よりから検出され、サ-8・9Grに位置する。形態は歪な円形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は径1.09m、深さは確認面より0.11mを測る。出土遺物はなかった。

(4) D4号土坑 (第37図,写真図版十五③)

本址は調査区B区の南よりから検出され、コ-8Grに位置する。形態はほぼ円形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は径0.84m、深さは確認面より0.14mを測る。出土遺物はなかった。

(5) D5号土坑 (第37図)

本址は調査区B区の北東端よりから検出され、ク-7Grに位置する。北側が調査区外となる為、遺構の南半分ほどが検出された。検出された形態はほぼ半円形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は径1.15m、深さは確認面より0.21mを測る。出土遺物はなかった。

(6) D6号土坑 (第37図)

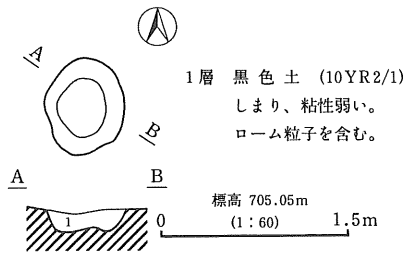
本址は調査区B区の北東端よりから検出され、キ-8,ク-8Grに位置する。H5号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。形態は歪な楕円形で、底面にPit状の落ち込みを持つ。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸0.92m、深さは確認面より0.31mを測る。出土遺物はなかった。

(7) D7号土坑 (第37図,写真図版十六①)

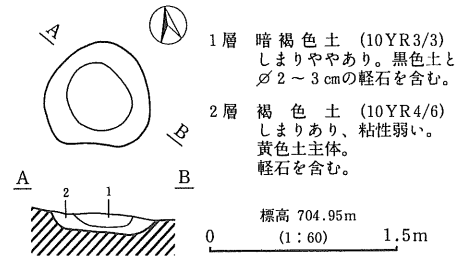
本址は調査区C区の中央部から検出され、セ-21,ソ-21Grに位置する。形態は隅丸の長方形で、底面に2カ所の掘り込みを持ち、壁はほぼ垂直に立ちあがる。規模は長軸長1.33m・短軸長1.15m、深さは確認面より0.73mを測る。出土遺物はなかった。

(8) D8号土坑 (第37図,写真図版十六②)

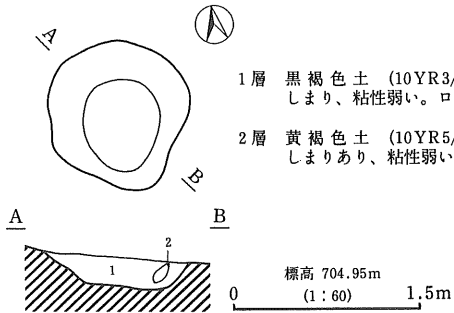
本址は調査区B区の北西端から検出され、ソ-20Grに位置する。残存状態は北側が調査区外となる為、遺構の南半分ほどが検出された。形態は隅丸の長方形で、底面はほぼ平らである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。規模は長軸長0.85m、深さは確認面より0.30mを測る。出土遺物はなかった。



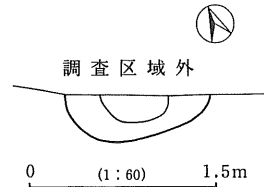
D 2 号土坑



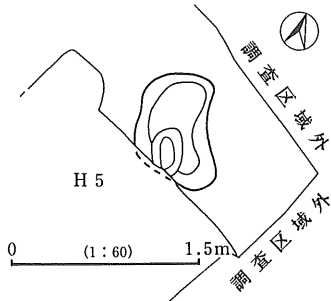
D 4 号土坑



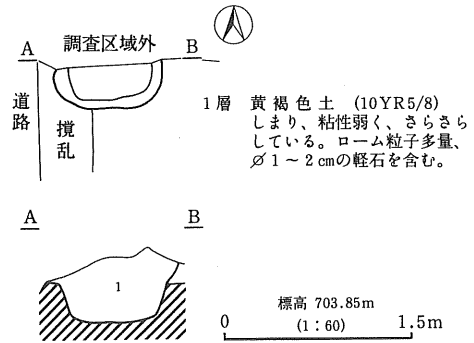
D 3 号土坑



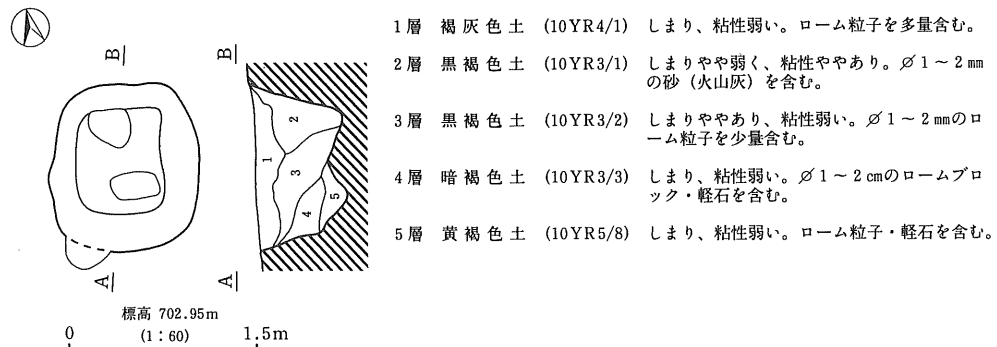
D 5 号土坑



D 6 号土坑



D 8 号土坑



D 7 号土坑

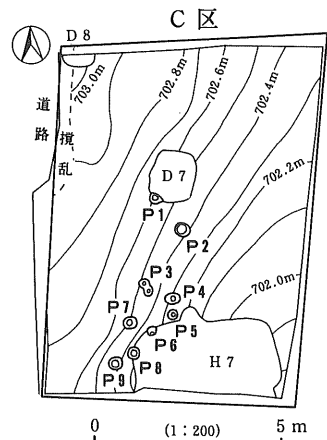
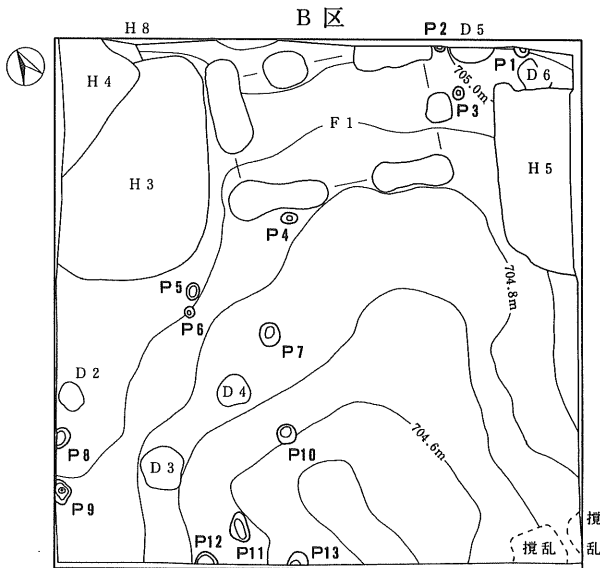
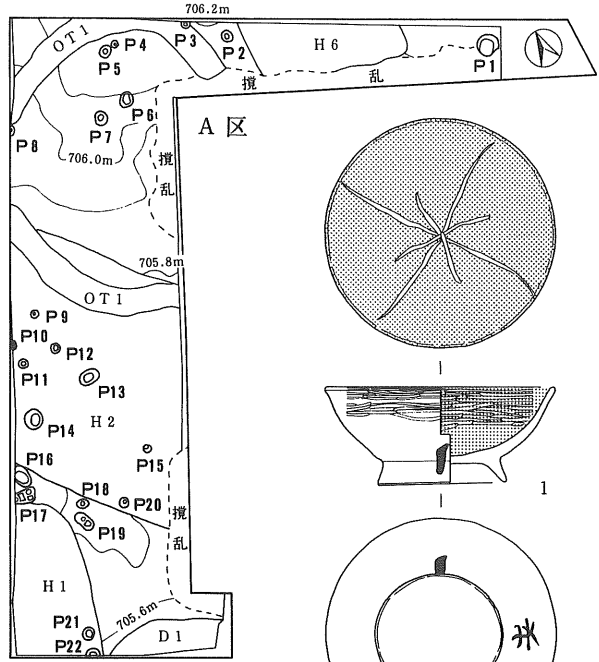
第37図 D 2 ~ D 8 号土坑実測図

第5節 Pit (第38図, 写真図版十六③)

調査では3カ所の調査地点から、計44個のPitが検出された(A区22個, B区13個, C区9個)。検出されたPitは、住居址や土坑と重複関係にあるが、新旧関係はいずれもPitの方が新しかった。形態は円形で、規模は径約0.20~0.50m・深さや0.20~0.40mを測るものが主体である。覆土はいずれも黒色土か黒褐色土で、しまりがややあり・粘性は弱い。Pitの検出位置は、群在性を示す部分もあるが、その配列は不規則で柵列・建物址の庇などを想定しうるものはなかった。

出土遺物はB区P9より完形の土師器高台付坏が出土している(写真図版十六③)。調整はロクロヨコナデの後ミガキが施され、底部は回転糸切り離しの後高台が貼付されている。

内面は黒色処理と見込み部に二重の「十」文字風の暗文が施される。また、外面には二カ所に墨跡?と墨書が確認される。



第38図 Pit配置図及びB区P9出土遺物実測図

第6節 遺構外遺物 (第39～43図)

本遺跡では3地点の調査区において表土(耕作土)や黒色土より、遺構に伴わない弥生から近現代に至る遺物が出土した。本節ではこれら遺物について記す。

まず、調査区B区においての土器集中区について触れたい。第III章、第2節 検出遺構・遺物の概要でも述べたが、B区では厚さ30～50cmの黒色土の堆積が確認された。この黒色土からは多量の弥生土器が検出され、特に当区北西端からは集中して土器の検出が見られた(下記写真参照)。遺物は土器片が主体を占め、こぶし大の礫等も若干含まれていた。土器片の広がり、ほぼH3号住居址上に収まるものやや東側に分布の偏りが見られる。出土層位はH3号住居址覆土1層上面と耕作土B層下面からほとんど出土している。土器はいずれも小片に破碎していた。土器割れ口は磨耗した痕跡が認められず、いずれも鋭さを保っていたが、復元作業をへても完形となる個体は一つもなかった。土器片検出時において焼土や硬質面などは確認されなかった。以上のような検出状況からこれらの土器片は、H3号住居址が機能を停止した後、ある程度の埋没が進んだ窪みに住居址東側から土器を廃絶した行為による結果と推定できる。

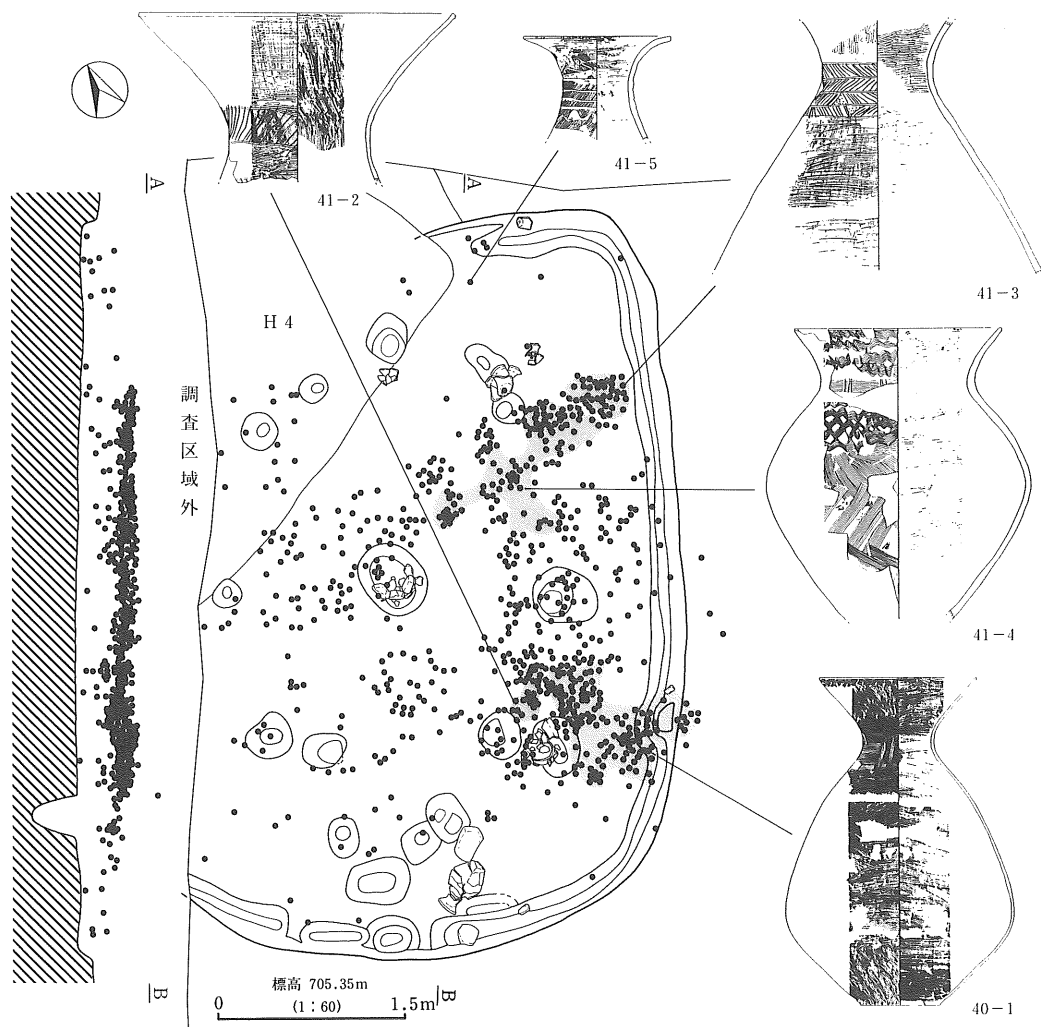
この他にB区においては調査区南よりの黒色土からも遺物がまとも出土している。この南側は黒色土を掘り下げるとローム層面において南に傾斜する小さな谷地形が確認された。よって



B区土器集中区全景 (南から)

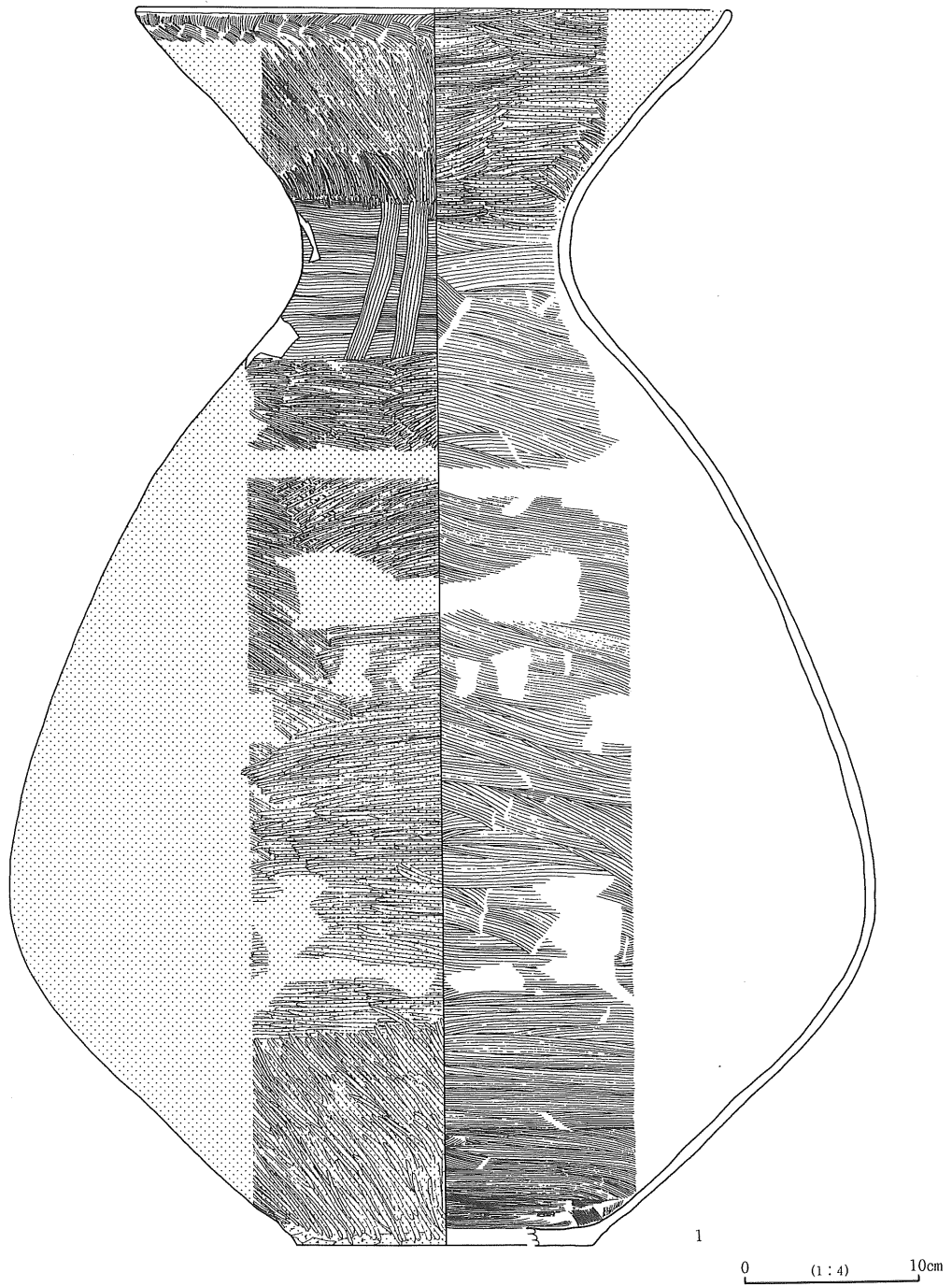
これらの遺物も谷埋没の過程で上方より流れ込んだものと推定できる。なおこの谷は調査区C区でも谷の西端と考えられる部分が検出され、土器もまとまって出土していることから、この谷は南に広がり低湿地へつながるものと予想される。

遺構外遺物は弥生時代を中心に古墳時代、平安時代の土器、中近世の陶磁器類、石器、土製品等多岐にわたる。弥生時代の遺物としては1~33がある。1は壺でH 3号住居址上の土器集中区から出土した。出土状態は第39図に示したように纏まりのある状態で、当个体が破棄された状態を推測しうる。残存状態は土器全体の1/2程が接合作業によって復元された。施文は口唇部に8本一組の櫛描斜走直線文が横位羽状、頸部に8本一組の櫛描横走平行線文を8帯施した後、8本一組の櫛描垂下文によってT字文を形成している。また口縁部から胴部下半外面と口縁部内面には赤色塗彩が施されている。調整は口縁部内面と口縁部から胴部外面が丁寧なミガキ、胴部内面



第39図 B区遺物出土状況図

はナデが施されている。2は壺口縁部で1と同じく土器集中区より出土した。出土状態は纏まっており、その場で破砕したような状態であった。施文は頸部に2本の櫛描直線文に区切られた空間に右上がりの櫛描斜走直線文が施されている。また、胴部欠損の為詳細は不明だが、上部施文とは逆の方向でもう一段施文の痕跡が確認できる。調整は内外面とも丁寧なミガキが施されている。3は壺の頸部から胴部であり、土器集中区から出土した。出土状態は1・2と同じく纏まりのある状態であるが、部分的に二次焼成を受けている。施文は5本の櫛描直線文で4帯の空間を区切り、上2帯には櫛描斜走直線文が羽状に施され、下2帯は鋸歯文で区切られた空間に刺突文を充填し、残りの部分は櫛描斜走直線文を施している。調整は外面ミガキ、頸部内面はミガキ、胴部内面は刷毛目のナデが施されている。4は甕で土器集中区より出土した。出土状態は1～3とやや異なり東西に散らばった状態で出土し、復元においても破片による欠損部分が多い。施文は口縁部が10本一組の櫛描波状文、頸部が11本一組の櫛描簾状文、胴部上半が10本一組の櫛描波状文、胴部中位から下半が10～12本一組とする櫛描斜走直線文が横位羽状に施されている。調整は内面ミガキが施されている。5は壺の口縁部で土器集中区からやや外れた北側より出土した。出土層位はH3号住居址覆土中層で、当住居址床面より7cm程浮いた状態である。よって本遺物はH3号住居址に伴う遺物とも考えられる。施文は口唇部にLR縄文を施し、頸部は3本の篋描横走平行線文により3帯の空間を区切りLR縄文を充填している。またその下には篋描連続山形文が施されている。調整は内外面ともに荒いミガキが施されている。6・7は鉢でありB区黒色土より出土した。何れも内外面丁寧なミガキと赤色塗彩が施されておいる。8は小型壺の胴部から底部の部分であり、B区土器集中区北側から出土している。出土層位はH3号住居址床面より6cm浮いた状態で出土しており、5と同様にH3号住居址に伴う可能性がある。調整は外面が刷毛目の残るナデ、内面がナデである。9・10・11は高坏の脚部であり、9は土器集中区から10・11はB区黒色土からそれぞれ出土している。調整はいずれもミガキが施され脚部外面と坏部内面には赤色塗彩が施されている。12・13・14は台付甕の脚部であり、12はB区より、13・14は土器集中区より出土している。12・13の調整は外面が丁寧なミガキ、内面が刷毛目の残るナデが施されている。14の施文は胴部下半に篋描直線文による綾杉状の様子が施されている。15～22は甕の口縁部の破片である。出土位置は15・17・19・20が土器集中区、16・22がB区、18・21がC区より出土している。施文は15が口縁部と胴部に6本一組の櫛描斜走直線文、頸部に6本一組の櫛描簾状文が施されている。調整は内面が丁寧なミガキを施す。16は口縁部に8本一組の櫛描波状文、頸部が7本一組以上の櫛描簾状文が施されている。調整は内面が丁寧なミガキを施す。17は口縁部に単位不明の櫛描波状文、頸部が9本一組以上の櫛描簾状文が施されている。調整は内面が丁寧なミガキを施す。18は口縁部に単位不明の櫛描波状文、頸部が6本一組?の櫛描簾状文が施されている。調整は内面が荒いミガキを施す。19は口唇部に刻み、口縁部と胴部に6本一組の



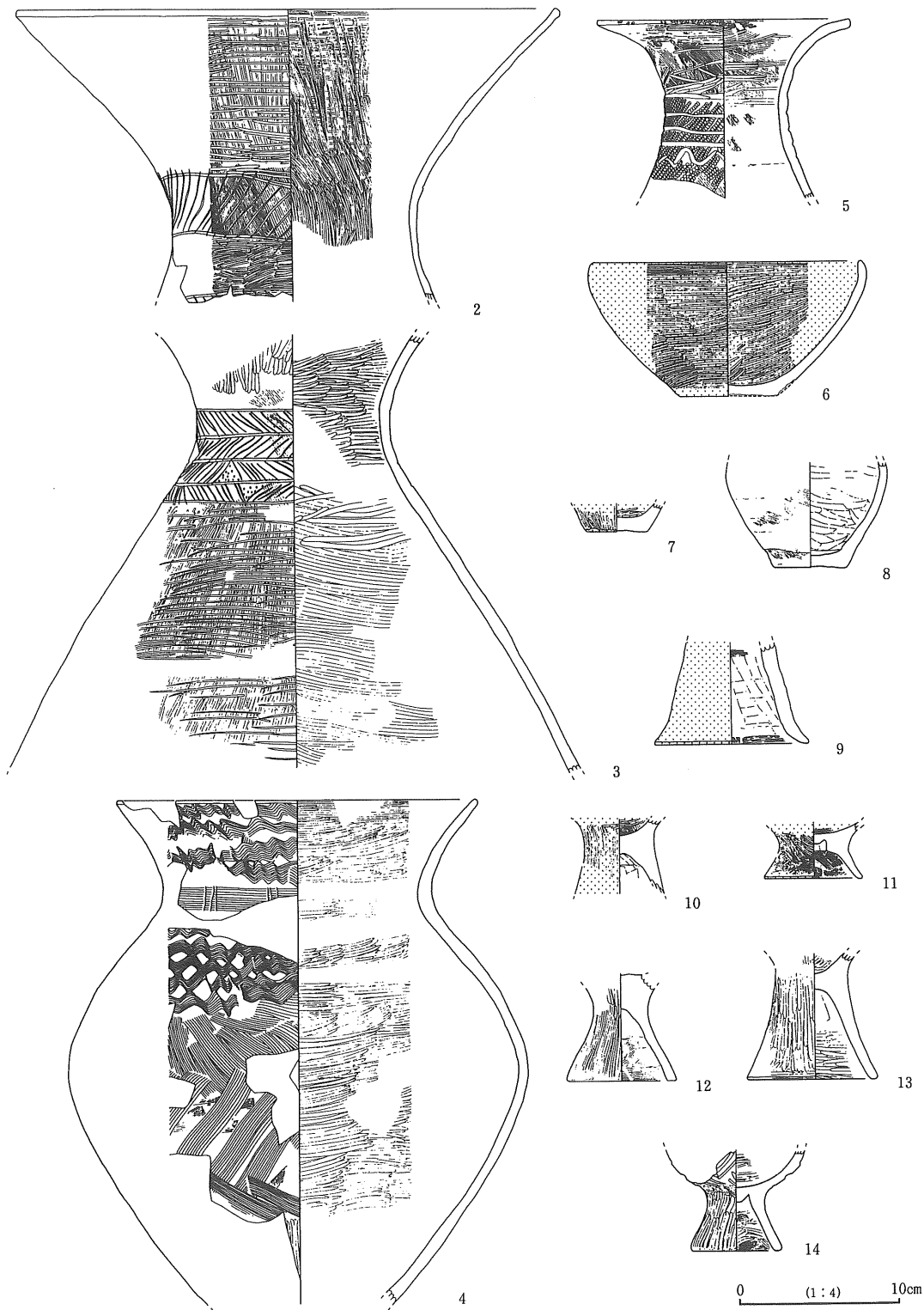
第40図 遺構外出土遺物実測図(1)

櫛描波状文、頸部が10本一組の櫛描簾状文が施されている。調整は内面が丁寧なミガキを施す。20は口縁部に10本一組の櫛描波状文、頸部が4本一組以上の櫛描簾状文が施されている。調整は内面が荒いミガキを施す。21は口唇部がやや受け口状に立ち上がり、施文は口縁部に9本一組の櫛描波状文、調整は内面が丁寧なミガキを施す。22は口縁部に7本一組の櫛描斜走直線文が施され、調整は内面が丁寧なミガキを施す。23・24は小型台付甕の口縁部破片である。出土位置は23が土器集中区、24がB区黒色土である。形態は何れも受け口状を呈する。施文は23が口縁部に2条の篋描連続山形文、胴部にLR縄文を充填の後、篋描「コ」の字重ね文を施す。調整は内面が丁寧なミガキを施す。24は口唇部にLR縄文、口縁部に1条の篋描連続山形文、頸部に7本一組の櫛描簾状文が施されている。調整は丁寧なミガキを施す。25～30は壺頸部の破片である。出土位置は25・29・30がB区、27がA区、26・28がC区である。施文は25が8本一組の櫛描横走平行線文の後、8本一組の櫛描T字文が施され、施文部分以外は赤色塗彩されている。26は5本一組の櫛描横走平行線文の後、5本一組の櫛描T字文が施され、中央に6個の円形刺突をもった円形浮文が貼付されている。施文部分以外は赤色塗彩されている。27は篋描直線文に区切られた空間に9本一組の櫛描横走平行線文を横位羽状に施す。28は3条の篋描沈線に区切られた空間に、横位羽状に篋描沈線を2回逆向きに描き格子目状に表現している。施文部分以外は赤色塗彩されている。29は3状の篋描横走平行線文に区画された空間に横位羽状の篋描直線文が施されている。30は2状の篋描横走平行線文に区画された空間に2条の篋描連続山形文が施されている。31～33は甕の胴部破片である。出土位置は何れも土器集中区から出土している。施文は31が篋描「コ」の字重ね文を施し、円形浮文を貼付している。32は5本一組の櫛描波状文を施す。33の器形台付甕の胴部で、施文は篋描直線文を施すが、これは篋描「コ」の字重ね文の下部と考えられる。調整は何れも内面丁寧なミガキを施す。

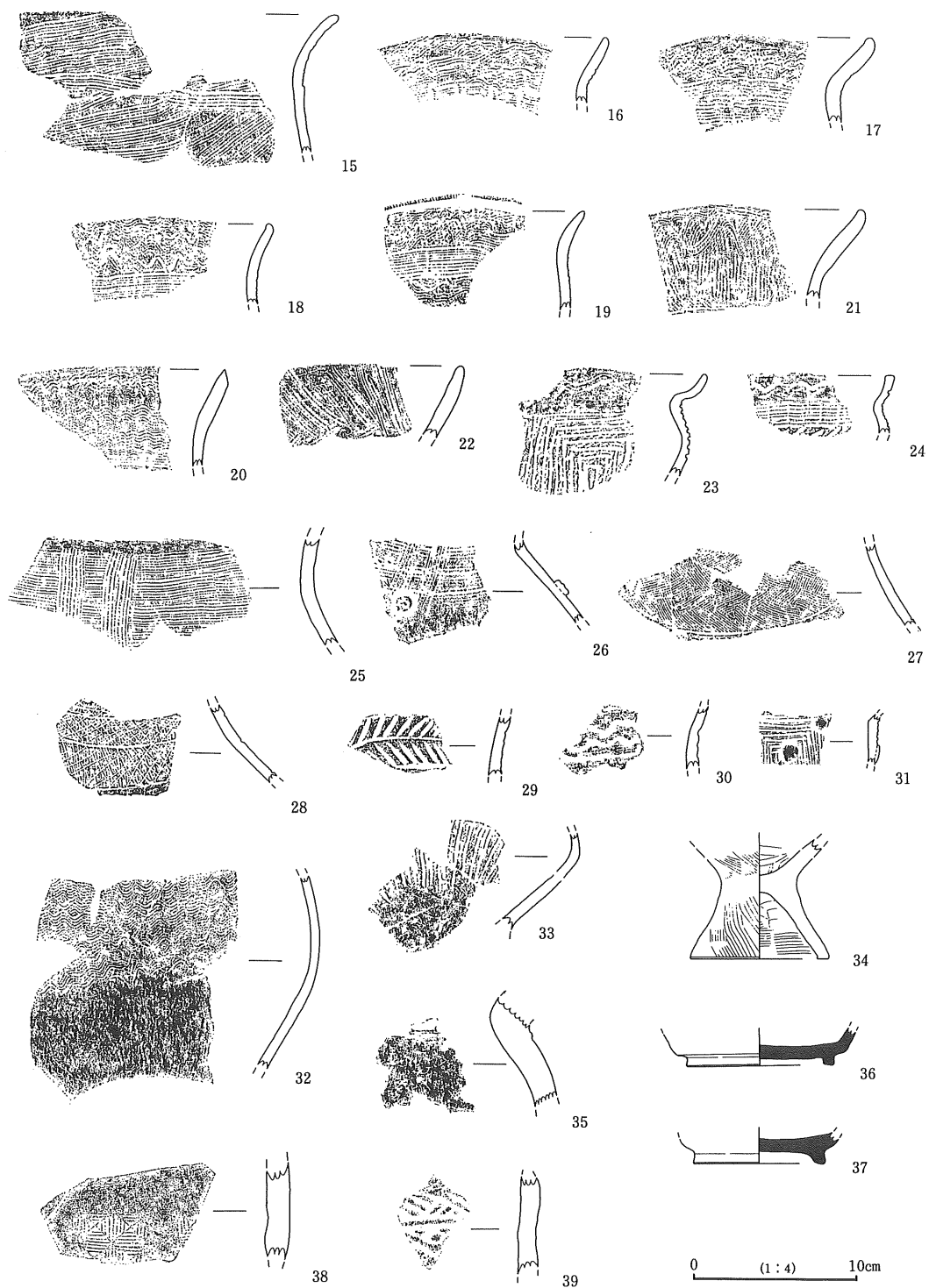
古墳～平安時代の遺物としては34～37がある。34は土師器台付甕の脚部で、出土位置はB区である。調整は内外面とも刷毛目の残るナデを施す。35は埴輪の破片で、部位は形象埴輪の上部形象部分と下部円筒部分の接合部と考えられる。接合部に小さな突帯が巡っている。出土位置はB区である。調整は内外面ナデを施す。36・37は須恵器高台付坏で、出土位置は36がB区、37がC区である。調整は何れも底部回転糸切り離しの後、高台を貼付している。

中世の遺物としては38・39と巻頭カラー4の1～9がある。38は常滑系の甕破片であり、C区より出土した。中央に叩き出しによる模様がある。39は火鉢の胴部破片と考えられ、B区より出土した。胴部に叩き出し状の模様がある。調整は内面がナデを施す。巻頭カラー1～3は青磁碗の体部破片である。出土位置は1がA区、2・3がC区である。1は竜泉窯系で、外面に蓮弁文を施す。2・3は内面に櫛歯状の施文具による花状の文様がある。

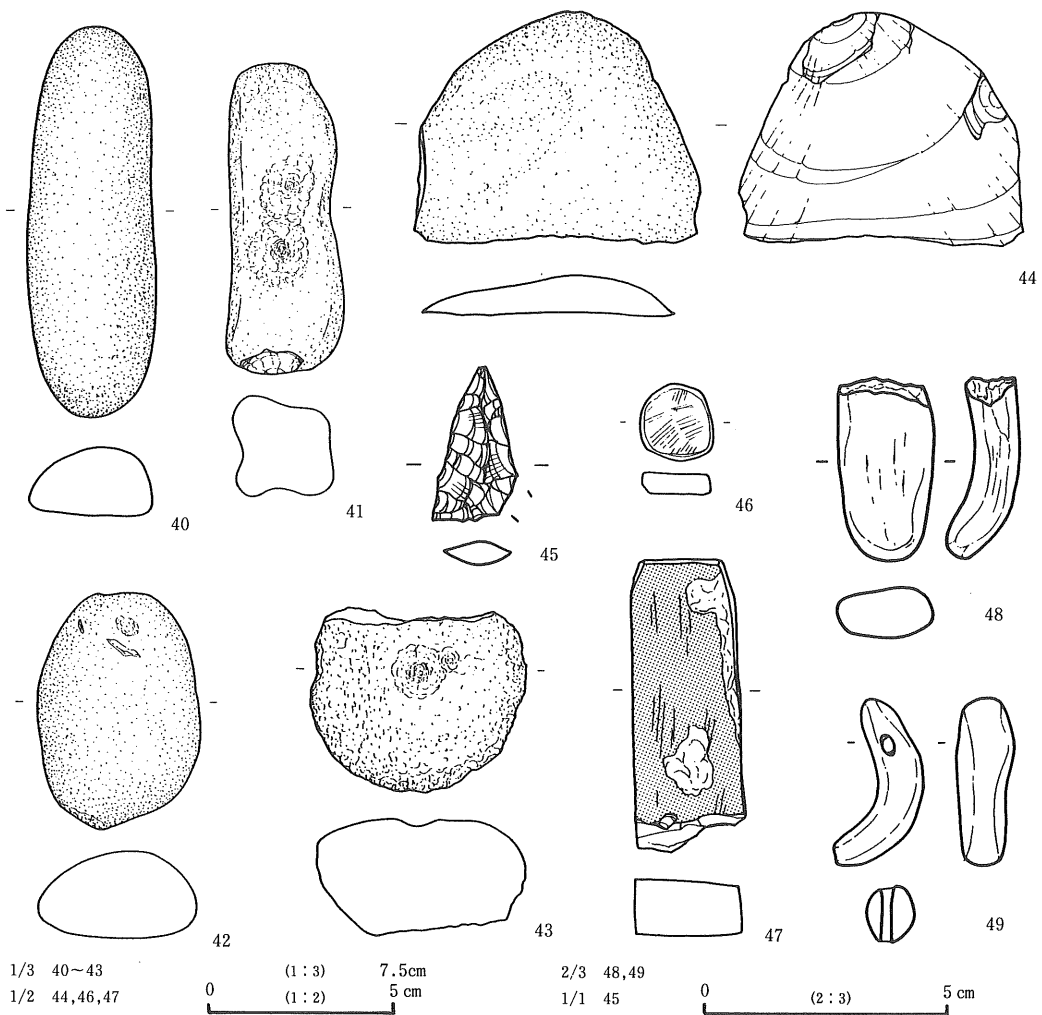
近世遺物としては巻頭カラー4～9の陶磁器があり、器種は碗、捏鉢、急須?等がある。



第41图 遺構外出土遺物実測図(2)



第42図 遺構外出土遺物実測図(3)



第43図 遺構外出土遺物実測図(4)

石器類としては40～47がある。40～42は敲石で、出土位置は40がC区、41がB区土器集中区、42がA区である。石材は40・42が角閃石安山岩、41が安山岩である。43は窪石で1/3が欠損している。出土位置はB区黒色土である。石材は石英安山岩である。44は薄片石器と考えられる。出土位置はB区黒色土で、石材は頁岩である。45は石鏃で基部を一部欠損している。出土位置はC区で、石材は黒曜石である。46は表採資料であるが蛇紋岩製模造品の未製品と考えられる。側面・両面ともによく研磨されている。47も表採資料であるが近現代の砥石で、一部欠損している。両面よく使い込まれており、使い減りにより凹レンズ状にへこんでいる。

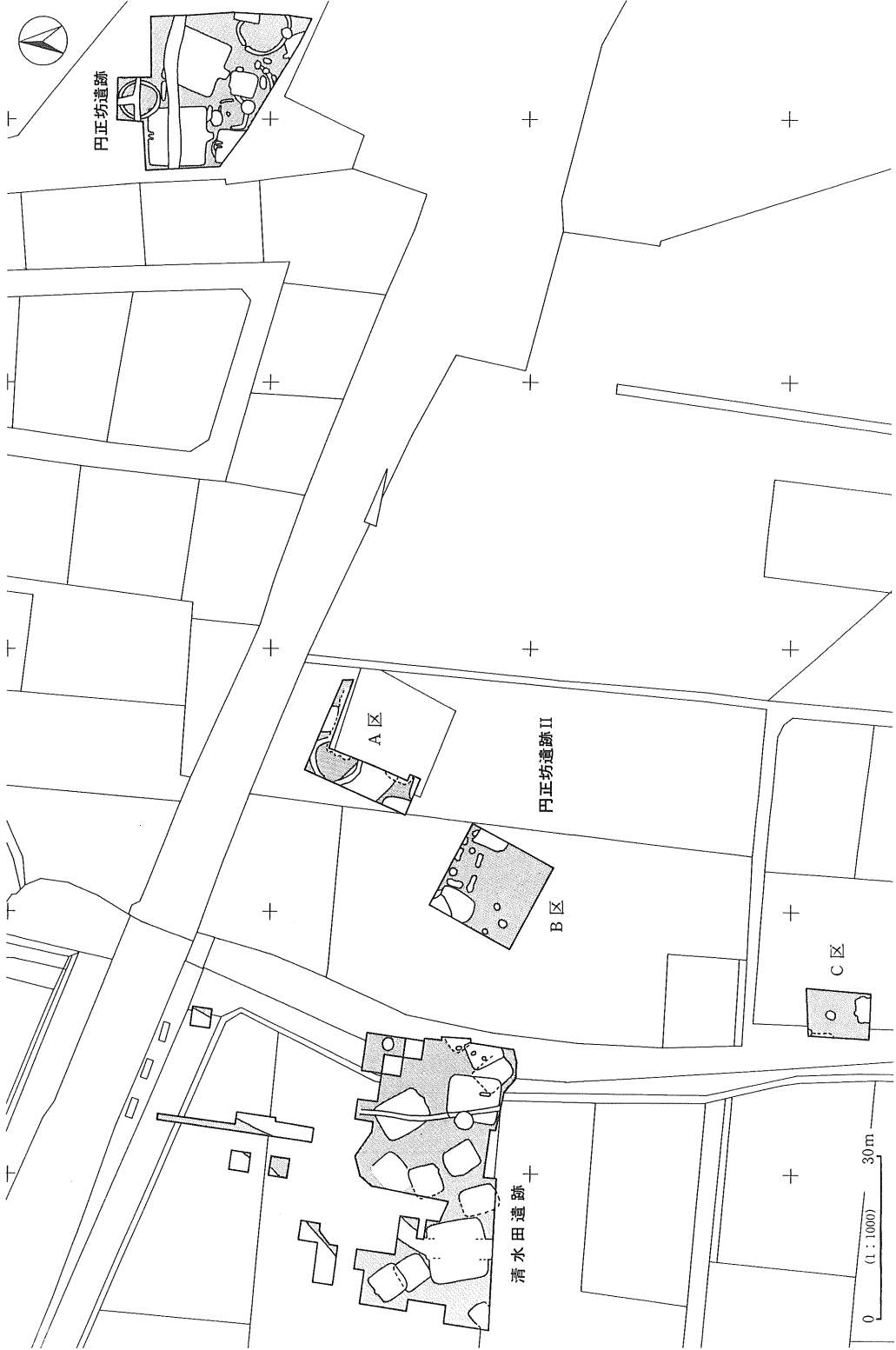
土製品としては48・49がある。48は土製匙の柄部分と考えられ、B区より出土した。49は土製勾玉であり、B区黒色土より出土した。穿孔は焼成前のものである。

第V章 調査のまとめ

本章では今回の調査にあたって遺物・遺構の気づいた点に触れ調査のまとめとしたい。まず遺物として弥生時代土器資料があげられる。今回の調査では3軒の当該期の住居址が検出された。その内、H3号住居址は一括資料に恵まれ遺物の残存状況も良好であった。ここで、H3号住居址の出土遺物についてその位置付けを簡単におこなってみたい。現在までの研究成果によれば当住居址の出土資料は弥生中期に位置づけられると考える。よって、北西ノ久保遺跡出土の資料を中心に市内他遺跡の資料と比較検討を通しさらに細分して考えてみたい。北西ノ久保遺跡での検討では出土資料を中期後半と位置づけ、さらに「北西ノ久保I期」・「北西ノ久保II期」と2期に細分している。そしてこの2期は北信の栗林II式、下伊那の北原II式に平行関係を持つと結論づけられている。では16-1の壺であるが北西の中期後半壺A3に器形は似るが、受け口で口縁部と頸部の文様帯を考慮に入れると中期後半壺B3の範疇とも捉えられる。ただ、器形のみをとっても似るのは後期壺B4とも見える。次に16-3,10の甕は中期後半甕B1,2、16-4の甕は中期後半甕A1,2の範疇でそれぞれ捉えられよう。16-5は後期甕A3,4に対応すると考えられる。16-7の高坏は類例が見あたらない。以上の結果をふまえると北西I期、II期何れの要素も含むものの、資料全体の要素からH1・H2号住居址いずれもII期に相当すると考えられる。しかし、甕の施文など後期に続く要素も色濃く見受けられ、II期の中でも細分の可能性を指摘できる資料と思われる。土器集中区の資料は周防畑遺跡D26号土坑に似ることから後期前半に対応するものと考えられる。

遺構については狭い調査範囲であった為、全容を把握しうるものはなかったが、注目しうる遺構として古墳址があげられる。OT1号墳は時期決定に至る出土遺物が無く正確な所産時期を決定しえないが、当遺跡北東の円正坊遺跡において類似する古墳址が4基検出されている為、これとの比較をふまえ検討を行いたい。円正坊遺跡の古墳址は正式報告がなされていない為、詳細については不明である。しかし、遺構の新旧関係よりいずれの古墳址も古墳時代後期(6世紀前葉)の住居址を壊し、平安時代の住居址に壊されている。よって構築時期は6世紀後半～8世紀後半の間と推定される。また当遺跡の古墳を含めた5基はいずれも盛土・横穴石室等の主体部が確認されていない。これらの事を考慮に入れ推測をたくましくすれば、本古墳群は終末期の古墳ではなく、低墳丘で土壙状の主体部をもつ6世紀後半～7世紀前半の古墳と考えられる。もしこれらの推測が正しいとすれば、従来不明な部分が多かった佐久平中心部において後期古墳群の新資料となり、北西ノ久保遺跡で検出されている古墳群を含め新たな地域史研究の展開が期待される。

以上、雑駁ではあるが調査の成果をまとめてみた。しかし、紙面の関係上言葉の足りないところや集落立地・他遺跡との比較検討など触れえなかった部分もあり、あらためて別稿で触れることとしたい。



第44図 円正坊・清水田・円正坊遺跡II全体図

円正坊遺跡Ⅱ出土土器観察表

H 1号住居址

挿図 番号	器種	法 量 (cm)			色 調	胎 土	調 整・施 文	備 考
		口径	底径	器高				
8-1	弥生 高坏	26.6	-	<5.4>	10R5/8 赤	径1~2mmの白色 粒子を多量に含む。	内面> ミガキ 外面> ミガキ、口縁部は鐙状に外反、口唇部に三角形 の突起が貼付	内外面赤色 塗彩
8-2	弥生 甕	-	-	-	7.5YR4/6 橙	径1~2mmの白色 粒子を含む	内面> ミガキ 外面> 8本一組の櫛描波状文を施文の後ミガキ	

H 2号住居址

12-1	弥生 壺	20.6	-	<6.1>	7.5YR5/6 明褐	径1~2mmの白色 粒子と砂粒を含む。	内面> 丁寧なミガキ 外面> ミガキの後、口縁部に2条の篋描連続山形文を 施す	
12-2	弥生 壺	-	-	<24.0>	7.5YR7/8 黄橙	径1~2mmの白色 粒子と砂粒を含む。	内面> 頸部ミガキ、胴部刷毛目のナデ 外面> 頸部2条の平行沈線の間に4条の篋描連続山形 文、空間にLR縄文を充填	
12-3	弥生 壺	-	-	-	2.5YR5/6 明赤褐	径1~2mmの白色 粒子と砂粒を含む。	内面> ナデ 外面> 頸部2条の平行沈線の間に3条の篋描連続山形 文、空間にLR縄文を充填	
12-4	弥生 甕	14.0	-	<9.2>	5YR5/8 明赤褐	径1~2mmの白色 粒子と砂粒を含む。	内面> 丁寧なミガキ 外面> 口唇部にLR縄文、頸部に6本一組の櫛描簾状 文、胴部に5本一組の櫛描波条文	
12-5	弥生 甕	-	-	-	5YR6/8 橙	径1~2mmの白色 粒子と砂粒を含む。	内面> ミガキ 外面> 口唇部にLR縄文、口縁部に6本 一組の櫛描波条文 外面> 頸部に7本一組の櫛描簾状文、胴部に7本一組 の櫛描斜走直線文が縦位羽状	
12-6	弥生 甕	14.0	5.3	9.7	2.5YR3/6 暗赤褐	径1~2mmの白色 粒子と砂粒を含む。	内面> ミガキ 外面> 口唇部にLR縄文、胴部ミガキ	焼成前穿孔

H 3号住居址

16-1	弥生 壺	17.1	9.8	39.7	5YR6/8 橙	径1~2mmの白色 粒子を含む。	内面> 胴部刷毛目のナデ 外面> 口唇部にLR縄文、 口縁部に2条の篋描連続山形文 外面> 頸部に2条の平行沈線の間に計4条の篋描連続 山形文、空間にLR縄文を充填	
16-2	弥生 壺	-	9.4	<12.0>	7.5YR5/8 明褐	やや大粒の砂粒を 含む。	内面> 刷毛目のナデ 外面> ミガキ	
16-3	弥生 甕	18.9	9.0	22.2	5YR4/8 赤褐	砂粒を含む。	内面> 刷毛目のナデ 外面> 口唇部にLR縄文、口縁 部に2条の篋描連続山形文 外面> 胴部に5本一組の櫛描波状文、口縁部と頸部に 沈線文を持つ円形浮文	
16-4	弥生 甕	-	-	-	7.5YR5/6 明褐	径1~2mmの白色 粒子を含む。	内面> 刷毛目のナデとミガキ 外面> 頸部に2本一組と1本一組の櫛描簾状文、胴部 に4本一組の櫛描斜走直線文	
16-5	弥生 甕	16.3	-	<12.7>	7.5YR6/8 橙	やや大粒の砂粒を 含む。	内面> 荒いミガキ 外面> 口縁部と胴部に4本一組の櫛描波状文、頸部に 4本一組の櫛描簾状文	

H 3号住居址

挿図 番号	器種	法 量 (cm)			色 調	胎 土	調 整・施 文	備 考
		口径	底径	器高				
16-6	弥生 台付甕	—	5.5	〈3.6〉	7.5YR5/6 明褐	砂粒を含む。	内面> ナデ 外面> 脚接合部に4本一組の櫛描簾状文	
16-7	弥生 高坏	12.0	7.7	10.8	2.5YR4/6 赤褐	砂粒を含む。	内面> ミガキ 外面> ミガキ	内外面赤色 塗彩
16-8	弥生 甕	—	7.5	〈7.0〉	7.5YR6/6 橙	砂粒を含む。	内面> ミガキと刷毛目のナデ 外面> 刷毛目のナデの後ミガキ	焼成前穿孔
16-9	弥生 転用甕	—	6.6	〈12.1〉	7.5YR6/6 橙	径1～2mmの赤色 粒子を含む	内面> ナデ 外面> 刷毛目の残るナデ	焼成後穿孔
17-10	弥生 甕	—	—	—	5YR4/6 赤褐	砂粒を多く含む。	内面> ミガキ 外面> 口唇部にLR縄文、口縁部に2 条の篋描連続山形文 外面> 頸部に6本以上一組の櫛描簾状文、胴部6本一 組の櫛描斜走直線文が縦位羽状	

H 4号住居址

20-1	土師器 甕	18.1	7.6	29.5	2.5YR5/8 明赤褐	砂粒を含む。	内面> 胴部ナデ、口縁部ヨコナデ 外面> 刷毛目の残るナデ、口縁部ヨコナデ	
20-2	土師器 甕	16.6	6.7	34.9	5YR6/8 橙	やや大粒の砂粒を 含む。	内面> 胴部～底部刷毛目のナデ、口縁部ヨコナデ 外面> 底部付近ナデ、胴部刷毛目のナデ、口縁部ヨコ ナデ	
20-3	土師器 甕	17.6	9.7	30.8	5YR6/8 橙	砂粒を含む。	内面> ナデ 外面> 胴部縦方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	
20-4	土師器 甕	20.4	7.4	23.9	5YR6/8 橙	砂粒を含む。	内面> 刷毛目のナデ、口縁部ヨコナデ 外面> 胴部縦方向のナデ、口縁部ヨコナデ	
20-5	土師器 甕	—	7.9	〈12.0〉	5YR5/8 明赤褐	径2～3mmの砂粒 を多量に含む。	内面> ナデ 外面> 底部周辺ヘラケズリ	
20-6	土師器 甕	15.2	—	〈16.4〉	5YR6/8 橙	やや大粒の砂粒を 含む。	内面> ナデ、口縁部ヨコナデ 外面> 胴部縦方向のナデ、口縁部ヨコナデ	
21-7	土師器 小型甕	14.6	—	〈15.9〉	2.5YR5/8 明赤褐	やや大粒の砂粒を 含む。	内面> ナデ、口縁部ヨコナデ 外面> 胴部縦方向のナデ、口縁部ヨコナデ	
21-8	土師器 小型甕	13.1	6.4	10.9	7.5YR6/6 橙	やや大粒の砂粒を 含む。	内面> ナデ、口縁部ヨコナデ 外面> 胴部下半と底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	
21-9	土師器 小型甕	11.7	6.8	10.9	7.5YR5/8 明褐	やや大粒の砂粒を 含む。	内面> ナデ、口縁部ヨコナデ 外面> 胴部と底部ナデ、口縁部ヨコナデ	

H 4 号住居址

挿図 番号	器種	法 量 (cm)			色 調	胎 土	調 整・施 文	備 考
		口径	底径	器高				
21-10	小型 丸底壺	11.4	6.9	15.8	5 YR 6/8 橙	径 1～2 mm の赤色 粒子を微量含む。	内面> ナデ、口縁部ヨコナデ、指頭痕あり 外面> 口縁部～胴部上半ヨコナデ、胴部中央～底部ナ デ、底部粘土版貼付	
21-11	小型 丸底壺	9.3	丸底	16.0	2.5 YR 5/8 明赤褐	砂粒を含む。	内面> 口縁部放射状のミガキ、胴部上半指によるナデ、 胴部下半ナデ 外面> 口縁部～胴部上半放射状のミガキ、胴部下半 ～底部ヘラケズリ	
21-12	小型 丸底壺	8.1	丸底	14.5	5 YR 6/8 橙	径 1～2 mm の赤色 粒子と白色粒子を 含む。	内面> 口縁部放射状のミガキ、胴部ナデ 外面> 縦位と横位のミガキ	顕著な二次 焼成

H 5 号住居址

23-1	土師器 壺	14.0	—	(13.8)	5 YR 4/6 赤褐	径 1～2 mm の赤色 粒子と白色粒子を 多く含む。	内面> 口縁部ミガキ、胴部ナデ 外面> 丁寧なミガキ	
23-2	土師器 高坏	15.0	—	(3.1)	2.5 YR 5/8 明赤褐	径 1～2 mm の赤色 粒子を微量含む。	内面> 暗文風のミガキが放射状に施される。 外面> ヘラケズリの後荒いミガキ	
23-3	土師器 高坏	14.6	—	(3.7)	5 YR 6/8 橙	径 1～2 mm の赤色 粒子を微量含む。	内面> ミガキ 外面> 体部ヘラケズリ、口縁部ミガキ	坏の可能性 あり

H 6 号住居址

26-1	須惠器 坏	13.5	5.8	3.5	7.5 Y 7/2 灰白	径 1～2 mm の白色 粒子を含む。	内面> ロクロヨコナデ 外面> ロクロヨコナデ、底部回転糸切り離し	
26-2	土師器 坏	15.0	6.8	4.3	7.5 YR 4/4 褐	径 1～2 mm の砂 粒・径 2～3 mm の赤 色粒子を含む。	内面> 放射状のミガキ、口縁部横方向のミガキ 外面> 体部ロクロヨコナデ、底部回転糸切り離し、周 辺部ヘラケズリ	内面黒色処 理
26-3	土師器 甕	15.7	—	(8.7)	7.5 YR 7/6 橙	黒雲母・砂粒を微量 含む。	内面> ロクロヨコナデ 外面> 口縁部ヨコナデ、胴部横方向と斜め方向のヘラ ケズリ	

H 7 号住居址

29-1	須惠器 坏	—	—	(3.8)	5 YR 6/2 褐灰	径 2～3 mm の小石 を含む。	内面> ロクロヨコナデ 外面> ロクロヨコナデ、底部回転糸切り離しの後高台 貼付	内面見込み 部にタール 状の付着物
29-2	土師器 坏	13.8	6.4	4.0	7.5 YR 6/8 橙	径 1～2 mm の赤色 粒子、径 3～4 mm の 白色粒子含む	内面> 見込み部は放射状のミガキ、口縁部は横方向の ミガキ 外面> 体部ロクロヨコナデ、底部及び周辺ヘラケズリ	内面黒色処 理
29-3	土師器 坏	13.2	6.4	3.7	5 YR 6/4 にぶい橙	径 1～2 mm の砂粒 を多く含む。	内面> ミガキ 外面> ロクロヨコナデ、底部回転糸切り離し	内面黒色処 理
30-4	土師器 坏	14.2	6.2	3.7	5 YR 5/3 にぶい赤褐	径 3～4 mm の白色 粒子を含む。	内面> ヨコナデ 外面> 体部ヨコナデ、底部にヘラ起こしの様な痕	内面煤付着

H 7号住居址

挿図 番号	器種	法 量 (cm)			色 調	胎 土	調 整・施 文	備 考
		口径	底径	器高				
30-5	土師器 坏	12.4	4.4	4.0	5 YR 3/3 暗赤褐	径1～2mmの赤色 粒子 径2～3mmの白色 粒子含む	内面>放射状のミガキ 外面>ロクロヨコナデ、底部及び周辺ヘラケズリ	内面黒色処 理
30-6	土師器 坏	13.2	6.0	4.9	7.5 YR 4/6 褐	径1～2mmの砂粒 を含む。	内面>放射状のミガキ 外面>ロクロヨコナデ、底部及び周辺ヘラケズリ	内面黒色処 理 口唇部外面 黒色
30-7	土師器 高台付皿	13.6	6.4	4.1	5 YR 6/8 橙	径1～2mmの白色 粒子 径2～3mmの赤色 粒子含む	内面>見込み部放射状のミガキ、口縁部横方向のミガ キ 外面>ロクロヨコナデ、底部整形の後、高台貼付	内面黒色処 理
30-8	灰釉陶器 小壺	—	5.5	(2.6)	2.5 YG 8/1 灰白	径1～2mmの白色 粒子含む	内面>ロクロヨコナデ 外面>ロクロヨコナデ、底部回転糸切り離しの後高台 捻り出し	見込み部と 外面に自然 釉付着
30-9	土師器 甕	20.4	—	(15.5)	5 YR 4/6 赤褐	径1～2mmの赤色 粒子 黒雲母を微量含む。	内面>ヨコナデ 外面>口縁部ヨコナデ、肩部から胴部斜め方向のヘラ ケズリ	頸部に接合 痕あり
30-10	須恵器 甕	—	—	—	2.5 YG 2/1 黒	石英・長石を含む。	内面>ナデ 外面>平行タタキ	外面に自然 釉付着
30-11	須恵器 甕	—	—	—	N 2/ 黒	雲母・石英を微量含 む。	内面>ヨコナデ 外面>平行タタキ	内面に自然 釉付着

F 1号掘立柱建物址

33-1	須恵器 坏	13.8	6.0	3.1	2.5 Y 3/1 黒褐	径1～2mmの白色 粒子と径2～3mm の砂粒を含む。	内面>ロクロヨコナデ 外面>ロクロヨコナデ、底部回転糸切り離し	火だすき痕
33-2	土師器 坏	12.8	7.3	3.5	7.5 YR 5/8 明褐	径1～2mmの砂粒 含む。	内面>ロクロヨコナデ 外面>ロクロヨコナデ、底部静止糸切り離しの後周辺 部のみヘラケズリ	内面黒色処 理
33-3	須恵器 甕	—	—	—	7.5 Y 5/2 灰オリーブ	砂粒を含み、黒色の 噴出物あり。	内面>同心円文のタタキ 外面>平行タタキの後、楕円状のカキ目	外面自然釉 付着

O T 1号墳

35-1	弥生 壺	—	9.3	(12.9)	7.5 YR 6/8 橙	径1～2mmの赤色粒 子を多量に含む。	内面>刷毛目のナデ 外面>ミガキ	
35-2	弥生 高坏	21.6	—	(8.2)	2.5 YR 4/3 にぶい赤褐	径1～2mmの赤色 粒子と白色粒子を 含む。	内面>丁寧なミガキ 外面>丁寧なミガキ	内外面赤色 塗彩
35-3	弥生 甕	—	—	—	10 YR 4/3 にぶい黄褐	径1～2mmの白色 粒子と砂粒を多く 含む。	内面>丁寧なミガキ 外面>口縁部は9本一組の楕円波状文、頸部は楕円波 状文	

B区P9

挿図 番号	器種	法 量 (cm)			色 調	胎 土	調 整・施 文	備 考
		口径	底径	器高				
38-1	土師器 高台付坏	12.2	6.8	5.2	10 YR 3/3 暗褐	黒雲母を微量含む。	内面> ロクロココナデの後ミガキ、見込み部に大小の「十」文字状の暗文 外面> ロクロココナデの後口縁部ミガキ、底部回転糸切り離しの後高台貼付	内面黒色処理 2カ所に墨書

遺構外出土遺物

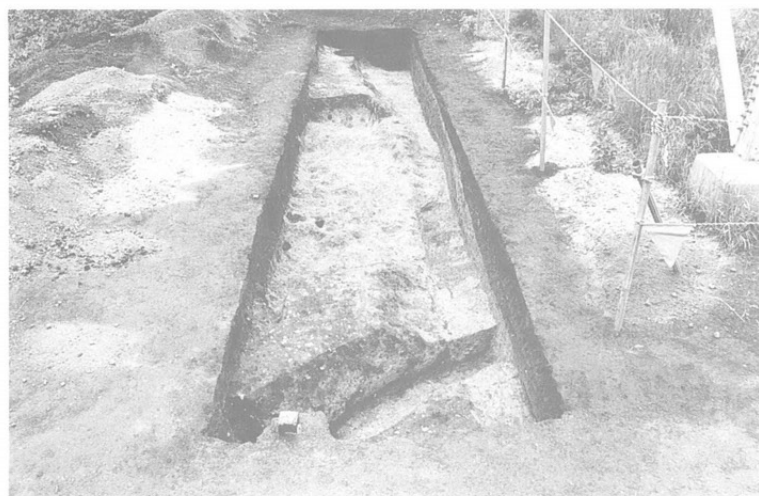
40-1	弥生 壺	34.2	17.0	69.9	5 YR 6/8 橙	径1~2mmの砂粒を含む。	内面> 口縁部ミガキ、胴部ナデ 外面> 口唇部8本一組の櫛描斜走直線文が横位羽状 外面> 頸部8本一組の櫛描横走平行線文を8帯、8本一組の櫛描垂下文でT字文	赤色塗彩
41-2	弥生 壺	33.7	—	48.0	7.5 YR 6/8 橙	径1~2mmの赤色粒子と砂粒を含む。	内面> 丁寧なミガキ 外面> 頸部2本の櫛描直線文に囲まれた空間に櫛描斜走直線文	
41-3	弥生 壺	—	—	27.0	7.5 YR 7/8 黄橙	径1~2mmの白色粒子と砂粒を含む。	内面> 頸部ミガキ、胴部刷毛目のナデ 外面> 5本の櫛描直線文で4帯の空間を作る 外面> 上2段櫛描斜走直線文が羽状、下2帯は鋸歯文の中に刺突文を充填	
41-4	弥生 壺	22.4	—	31.1	7.5 YR 6/6 橙	径1~2mmの砂粒を含む。	内面> ミガキ 外面> 口縁部に10本一組の櫛描波条文、頸部に11本一組の櫛描簾状文 外面> 胴部上半に7本一組の櫛描斜走直線文、下半に10~12本一組の櫛描斜走直線文	
41-5	弥生 壺	15.7	—	41.0	7.5 YR 7/8 黄橙	径1~2mmの白色粒子と砂粒を含む。	内面> ミガキ 外面> 口唇部にLR縄文 外面> 頸部2本の平行沈線の間にLR縄文を充填、下に篋描連続山形文	
41-6	弥生 鉢	16.6	6.0	8.2	10 YR 4/8 赤	径1~2mmの白色粒子と砂粒を含む。	内面> 丁寧なミガキ 外面> 丁寧なミガキ	赤色塗彩
41-8	弥生 壺	—	4.5	6.5	7.5 YR 5/6 明褐	径1~2mmの白色粒子と砂粒を含む。	内面> ナデ 外面> 刷毛目のナデ	
41-14	弥生 台付甕	—	5.3	6.2	5 YR 6/8 橙	径1~2mmの白色粒子と砂粒を含む。	内面> ミガキ 外面> 胴部に篋描直線文が綾杉状	
42-15	弥生 甕	—	—	—	7.5 YR 5/3 にふい褐	径1~2mmの砂粒を含む。	内面> ミガキ 外面> 頸部に6本一組の櫛描簾状文、口胴部と胴部に6本一組の櫛描斜走直線文	
42-23	弥生 甕	—	—	—	5 YR 4/6 赤褐	径1~2mmの白色粒子と砂粒を含む。	内面> ミガキ 外面> 口縁部に2状の篋描連続山形文 外面> 胴部にLR縄文を施文の後、篋描「コ」字文	
42-25	弥生 壺	—	—	—	7.5 YR 6/4 にふい橙	径1~2mmの砂粒を含む。	内面> ミガキ 外面> 頸部に8本一組の櫛描横走平行線文の後、8本一組の櫛描T字文	施文部以外赤色塗彩
42-34	土師器 台付甕	—	8.4	6.6	7.5 YR 6/6 橙	径1~2mmの砂粒を含む。	内面> ナデ 外面> 刷毛目のナデ	
42-35	埴輪 形象	—	—	—	7.5 YR 7/4 にふい橙	径1~2mmの赤色粒子と砂粒を含む。	内面> ナデ 外面> ナデ	

图 版





(南より)



円正坊遺跡Ⅱ
A区全景

(西より)



① 円正坊遺跡ⅡB区全景（南より）



② 円正坊遺跡ⅡC区全景（南より）



① H1号住居址全景（南より）



② H1号住居址掘り方及び床下住居（南より）



① H2号住居址全景（南より）



② H2号住居址炉内遺物出土状況（北より）



① H3号住居址全景 (南より)



② H3号住居址掘り方全景 (南より)

① H 3 号住居址
炉全景
(南より)



② H 3 号住居址
遺物出土状況
(東より)



③ H 3 号住居址
遺物出土状況
(西より)





① H 4 号住居址遺物出土状況（南より）

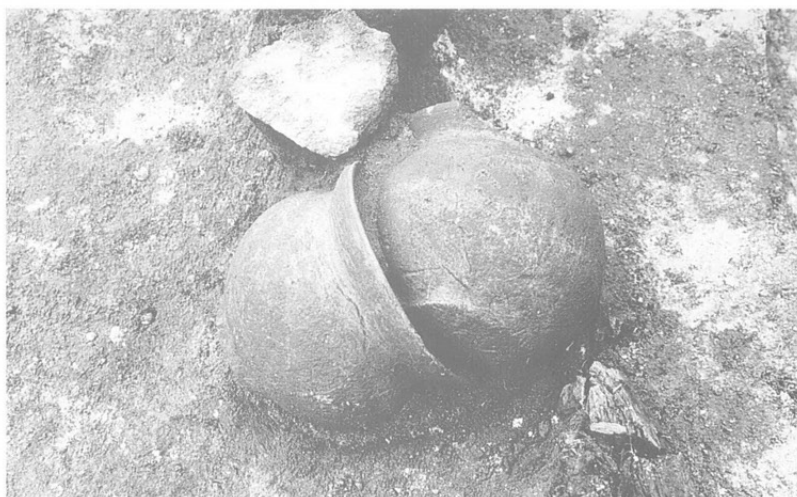


② H 4 号住居址全景（南より）



① B区発掘調査風景

② H 4号住居址遺物出土状況



③ H 4号住居址遺物出土状況





① H5号住居址全景（南より）



② H5号住居址掘り方全景（南より）



① H6号住居址全景（西より）



② H6号住居址掘り方全景（西より）



① H7号住居址全景（南より）



② H7号住居址全景（東より）



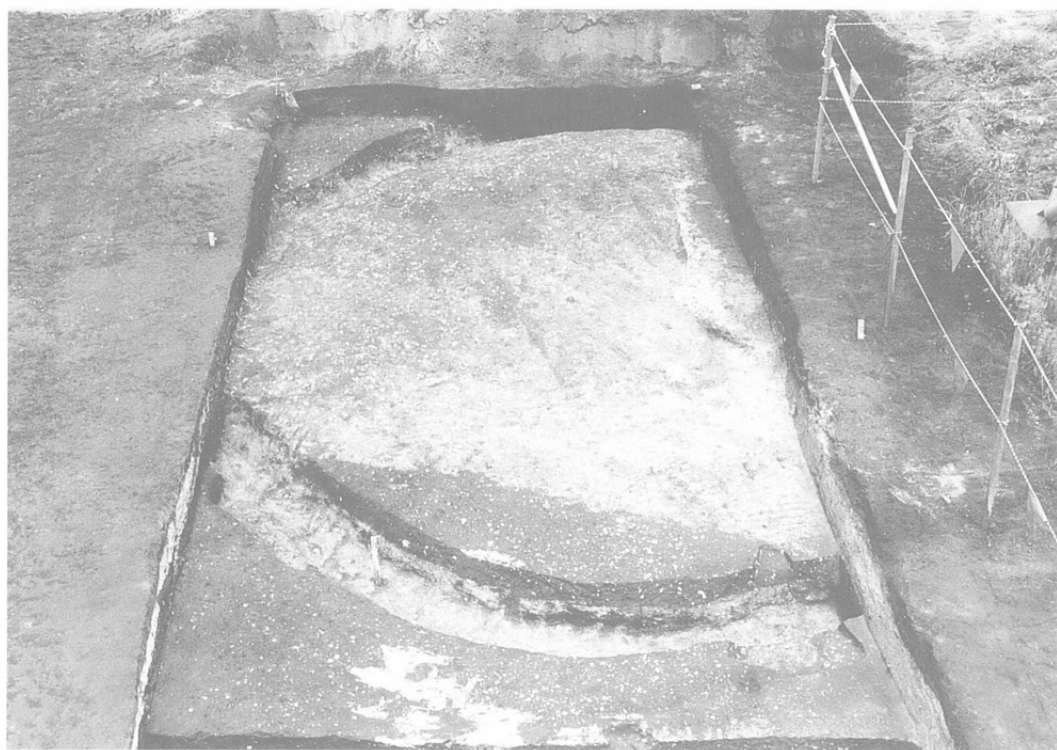
① H7号住居址カマド全景（南より）



② H7号住居址カマド掘り方全景（南より）



① F1号掘立柱建物址全景（南より）



② OT1号墳全景（南より）



① 円正坊遺跡Ⅱより蓼科山麓を望む（北より）



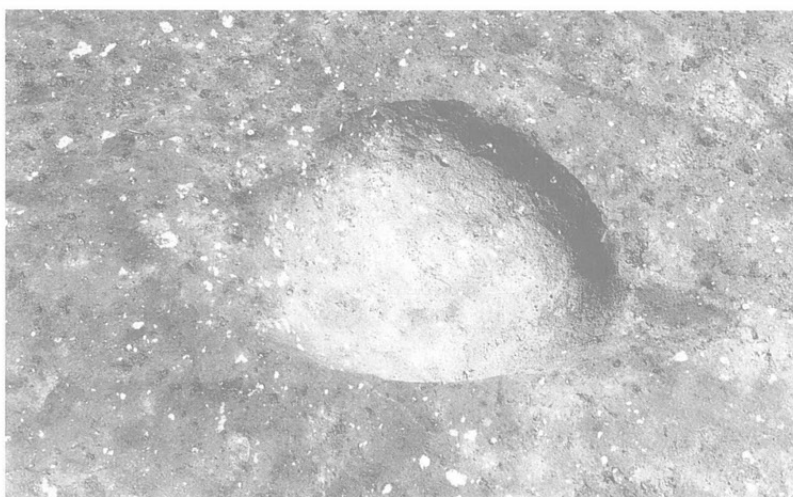
② D1号土坑全景（北より）



① D 2号土坑
全景（南より）



② D 3号土坑
全景（南より）

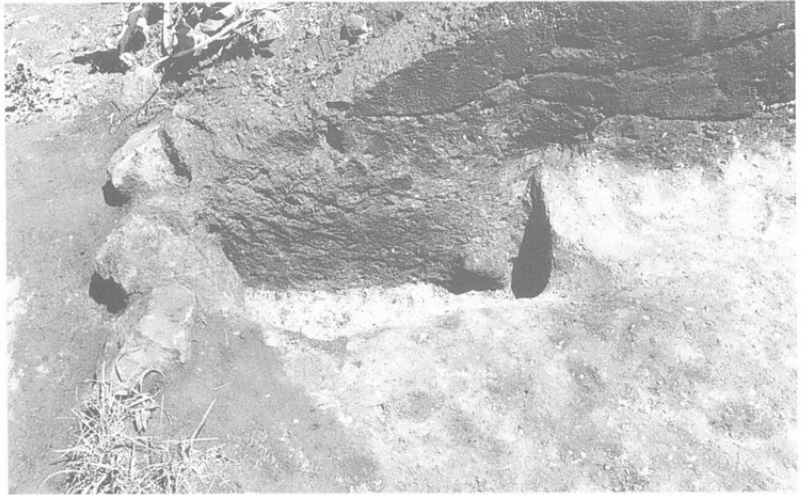


③ D 4号土坑
全景（南より）

① D7号土坑
全景（東より）



② D8号土坑
全景（南より）

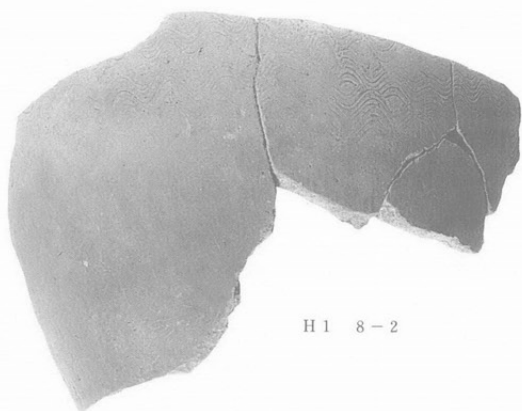


③ B区P9
遺物出土状況
（東より）





H1 8-1



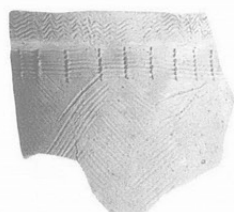
H1 8-2



H2 12-1



H2 12-2



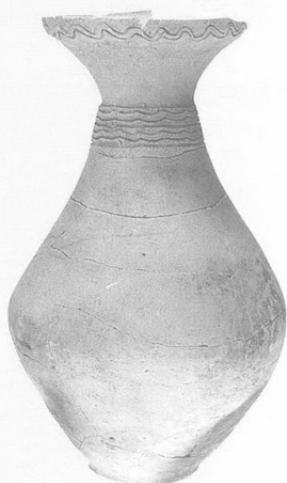
H2 12-5



H2 12-4



H2 12-6



H3 16-1



H3 16-2



H3 16-5



H3 16-3



H3 16-7



H 3 16-8



H 3 16-9



H 3 17-10



H 4 20-1



H 4 20-2



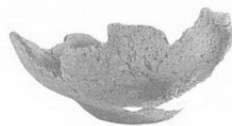
H 4 20-3



H 4 20-4



H 4 21-7



H 4 20-5



H 4 21-8



H 4 21-9



H 4 21-10



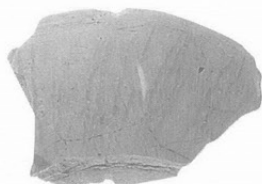
H 4 21-11



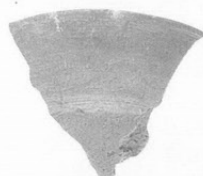
H 4 21-12



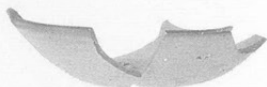
H 5 23-1



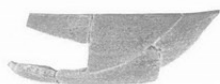
H 5 23-2



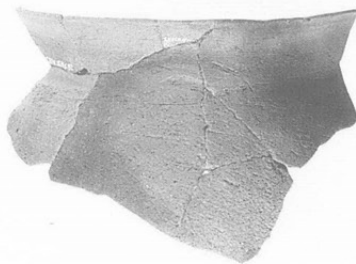
H 5 23-3



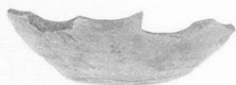
H 6 26-1



H 6 26-2



H 6 26-3



H 7 29-1



H 7 29-2



H 7 29-3



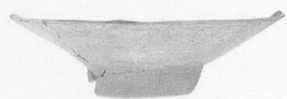
H 7 30-4



H 7 30-5



H 7 30-6



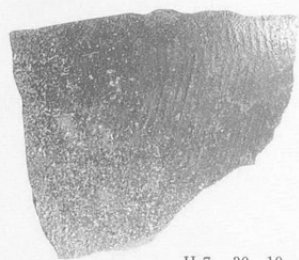
H7 30-7



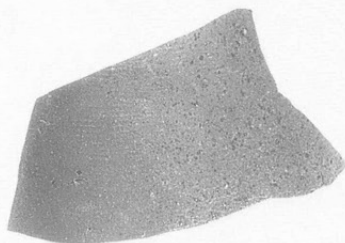
H7 30-8



H7 30-9



H7 30-10



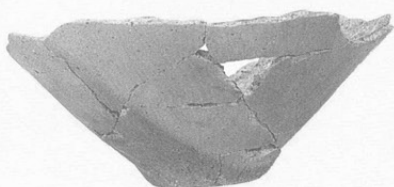
H7 30-11



F1 33-1



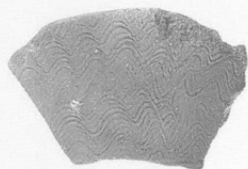
F1 33-3



OT1 35-1



F1 33-2



OT1 35-3



OT1 35-2



BXP9 38-1



38-1



40-1



41-2



41-3



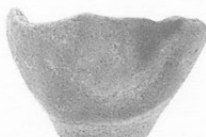
41-4



41-5



41-6



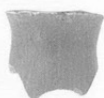
41-8



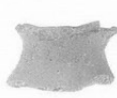
41-7



41-9



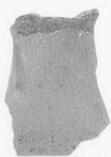
41-10



41-11



41-12



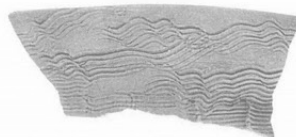
41-13



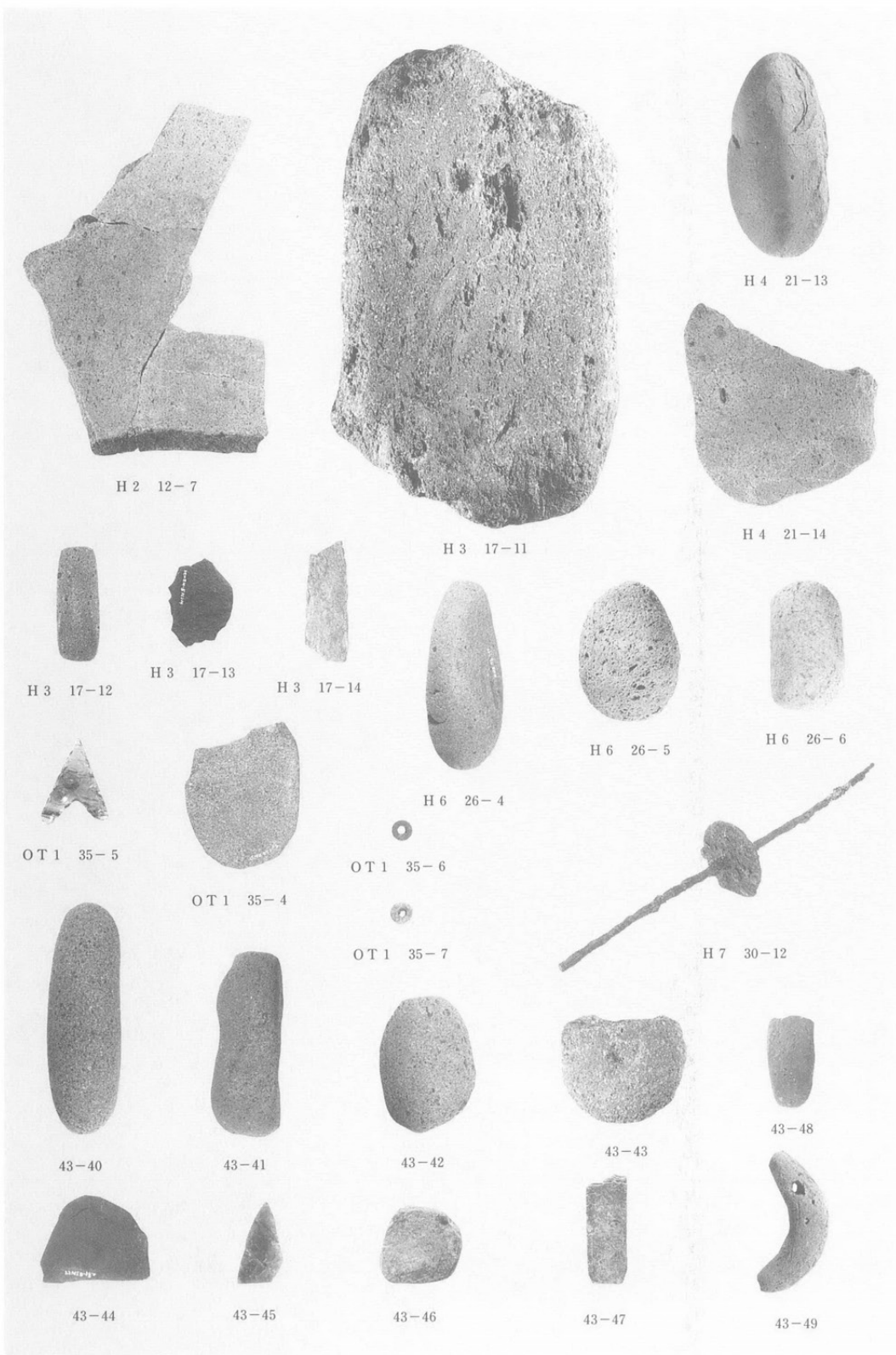
41-14



42-15



42-16



佐久市埋蔵文化財調査報告書

- 第1集 『金井城跡』
第2集 『市内遺跡発掘調査報告書1990』
第3集 『石附窯址群III』
第4集 『大ふけ遺跡』
第5集 『立科F遺跡』
第6集 『上曾根遺跡』
第7集 『三貫畑遺跡』
第8集 『瀧の下遺跡』
第9集 『国道141号線関係遺跡』
第10集 『聖原遺跡II』
第11集 『赤座垣外遺跡』
第12集 『若宮遺跡II』
第13集 『上高山遺跡』
第14集 『栗毛坂遺跡』
第15集 『野馬久保遺跡』
第16集 『石並城跡』
第17集 『市内遺跡発掘調査報告書1991』
(1月～3月)
第18集 『西曾根遺跡』
第19集 『上芝宮遺跡』
第20集 『下聖端遺跡III』
第21集 『金井城跡II』
第22集 『市内遺跡発掘調査報告書1991』
第23集 『南上中原・南下中原遺跡』
第24集 『上聖端遺跡』
第25集 『上久保田向IV』
第26集 『藤塚古墳群・藤塚II』
第27集 『上久保田向III』
第28集 『曾根新城遺跡V』
第29集 『山法師B, 筒村A・B遺跡』
第30集 『市内遺跡発掘調査報告書1992』
第31集 『山法師遺跡A』
第32集 『東ノ割遺跡』
第33集 『聖原遺跡VII』
『下曾根遺跡I』
『前藤部遺跡2』
第34集 『蛇塚BIII』
第35集 『市内遺跡発掘調査報告書1993』
第36集 『西一本柳遺跡I』
第37集 『西一本柳II』
第38集 『南下中原遺跡II』
第39集 『平賀中屋敷遺跡』
第40集 『寺畑遺跡』
第41集 『曾根新城I・II・III・IV・VI』
上久保田向I・II・V・VI・VII
西曾根遺跡II・III』
第42集 『寄山』
第43集 『権現平遺跡・池端遺跡』
第44集 『寺添遺跡』
第45集 『市内遺跡発掘調査報告書1994』
第46集 『濁り遺跡』
第47集 『上芝宮遺跡V』
第48集 『池端城跡』
第49集 『根々井芝宮遺跡』
第50集 『藤塚遺跡III』
第51集 『寺中遺跡・中屋敷遺跡II』
第52集 『坪の内遺跡』

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第53集

円正坊遺跡II

長野県佐久市円正坊遺跡II発掘調査報告書

1997年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒384-01 長野県佐久市大字中込3056

埋蔵文化財課

〒385 長野県佐久市大字志賀5953

Tel 0267-68-7321

印刷所 株式会社 櫟 <いちい>

